

石川県埋蔵文化財情報

第 13 号

巻頭図版（森本 C 遺跡）

平成16（2004）年度上半期の発掘調査から ……調査部長 小嶋 芳孝…（1）

発掘調査略報

三室トリ C 遺跡 ……（3）

新庄遺跡 ……（5）

良川北遺跡 ……（7）

得田氏館跡 ……（8）

北吉田ノシロタ遺跡 ……（10）

森本 C 遺跡 ……（11）

乙丸遺跡 ……（13）

小松城跡 ……（14）

矢田野遺跡 ……（15）

平成16（2004）年度上半期の遺物整理作業 ……企画部整理課…（16）

環日本海交流史研究集会の記録「古代日本海域の港と交流」

はじめに ……所長 谷内尾晋司…（20）

発表概要 九州—鴻臚館と古代の港湾— ……大庭 康時…（21）

古代出雲の水上交通と交流 ……森田喜久男…（24）

古代敦賀津と松原客館について ……川村 俊彦…（28）

金沢における水上交通遺跡の調査 ……出越 茂和…（31）

古代日本海域の港と交流—北陸（石川県）の場合— ……和田 龍介…（34）

内陸の水上交通にかかる考古学的一視点

—主に船着場遺構への認識をめぐって— ……根津 明義…（37）

新潟県の古代港湾遺跡 ……田中 一穂…（40）

出羽北部の古代水上交通と交流—古代遺跡と史料からみる— ……小松 正夫…（43）

北海道の古代交易と海上交通手段

—統縄文～擦文文化期の交易路と準構造船— ……鈴木 信…（46）

討論と展望 ……安 英樹…（49）

調査研究・報告

石川県の畑状遺構と栽培植物 ……安 英樹…（50）

津幡町領家地内出土遺物の資料紹介 ……高見哲士・長田政彦・松尾 実…（66）

畝田遺跡出土の玉杖形木製品にかんする新知見と研究メモ ……伊藤 雅文…（80）

2005年 3 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

森本 C 遺跡

写真 1 人面墨書土器

多数の完形土器が出土した SD 1 底近くから、土師器鉢に重なった状態で出土した（12頁左下写真）、口径15.6cm、高さ10.4cmの仏鉢模倣須恵器である。側面に、ややつり上がった目の、あごひげをたくわえた人物が倒位に描かれ、底部外面には墨書「中山寺」が書かれる。8世紀後半から9世紀前半の年代が与えられる。

写真 2 木簡

1号木簡

請求文書に分類される文書木簡である。片面には「品治部」が、もう片面には「□（丈カ）部」の人名がみえ、具体的な品名は不明だが、物品を要求する旨が記されている。片面は薄く削り下半に「右右右右」と習書に転じる。

2号木簡

呪符木簡であり、上端に半欠した釘穴が残る。付録^{ふろく}および呪句は釈読中である。

写真 3 SD 1完掘状況（北東から）

北東から南西方向に流下する幅約5m、深さ約1mの河道である。多量の土師器・須恵器や木製品が出土した。左岸の平坦面では遺物包含層が認められたが、右岸では遺構・遺物は僅少であり、これらは左岸側よりもたらされたとみられる。



写真1 人面墨書土器

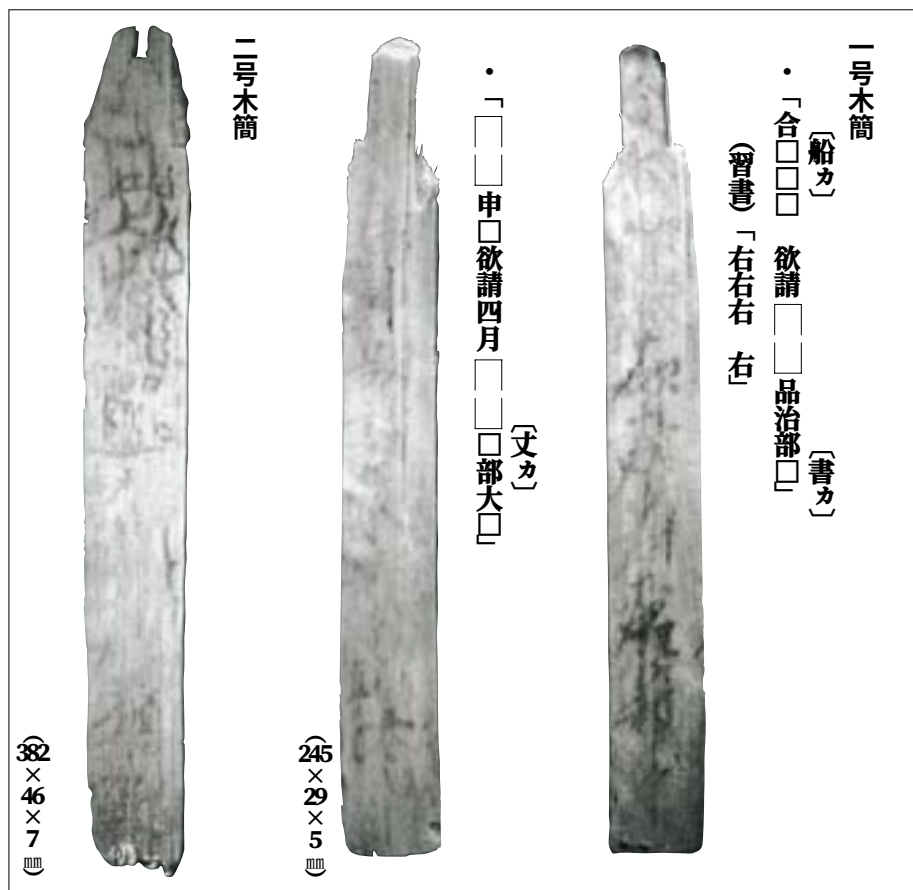


写真2 木簡



写真3 河道 SD1完掘状況（北東から）

平成16（2004）年度上半期の発掘調査から

調査部長 小嶋 芳孝

平成16（2004）年度は、県教委から25遺跡の調査を受託した。当初計画の調査面積総計は、65,240㎡である。内訳は、国土交通省等の国関係事業に伴う調査が4件、県農林水産部関係が9件、県土木部関係が10件、企画開発部関係と教育委員会が各1件である。

本書では4～8月の調査を主に紹介する。三室トリ遺跡（七尾市）では、中世の館跡がほ場整備事業に伴って盛土保存されることにともなう調査を、昨年に引き続き実施した。堀・土塁・柱穴などを検出している。新庄遺跡（中能登町）では、昨年に引き続き調査を実施し、中世の建物跡や井戸を検出している。

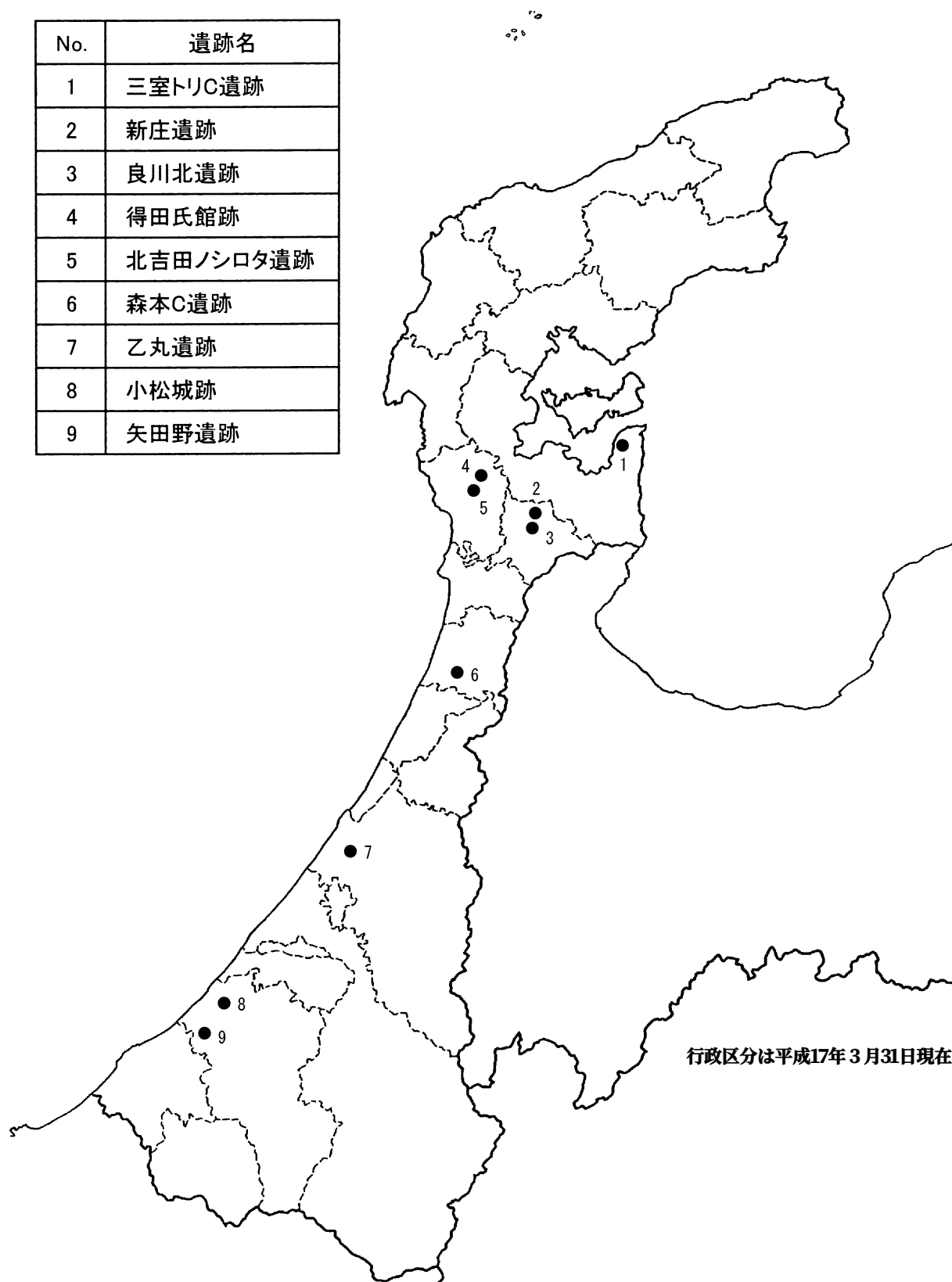
県道整備事業に伴う森本C遺跡（宝達志水町）の調査では、奈良時代の宗教儀礼に係わる遺物が出土している。遺跡は森本丘陵から流れ出す小河川の谷口に立地しており、川跡から呪符木簡、木簡、墨書土器などが出土している。墨書土器には「中山寺」や「川相」などがあり、付近に山林寺院が置かれていた可能性がある。

小松高校改築に伴う小松城跡の調査では、下層（中世末期）と上層（近世前期）の遺構面を検出している。部分的な調査のため遺構の全体像を把握することは困難だったが、2面の遺構面を確認したことは今後の調査にあたって重要な手懸りとなる。

調査課	関係機関	事業名	遺跡名	所在地	面積(㎡)
1課	国土交通省	津幡北バイパス	加茂遺跡	津幡町	24,550
		津幡北バイパス	和田山堡跡	津幡町	4,400
		梯川改修	白江梯川遺跡	小松市	2,680
2課	農林水産部等	石塚川改修関連土地改良	新庄遺跡	中能登町（旧鳥屋町）	740
		地域連携促進道路整備（主）七尾羽咋線	新庄遺跡	中能登町（旧鳥屋町）	640
		県営ほ場整備	矢田野遺跡	小松市	130
		広域営団農道整備	飯川谷製鉄遺跡	門前町	1,800
		県営ほ場整備	得田氏館跡	志賀町	610
		県営ほ場整備	森ガッコウ遺跡	かほく市	820
		県営ほ場整備	正友じんとくじま遺跡	宝達志水町(旧押水町)	2,370
		県営ほ場整備	栗津カンジャバタケ遺跡	珠洲市	580
		中山間地域総合設備	三室トリC遺跡	七尾市	1,600
		県営ほ場整備	太田A遺跡 他	羽咋市	2,470
3課	土木部 道路建設他	緊急地方道路整備（主）押水福岡線	森本C遺跡	宝達志水町(旧押水町)	1,410
		いしかわ広域交流幹線軸道路整備 （一）松木代田線	代田遺跡	志賀町	2,100
		いしかわ広域交流幹線軸道路整備 （一）七尾鳥屋線	東三階A遺跡	七尾市	1,500
		道路改良 一般国道249号(藤橋バイパス)	栄町遺跡 他2遺跡	七尾市	6,240
		街路（都）川原松百線	小島西遺跡	七尾市	1,290
4課	企画開発部 土木部 河川課他 教育委員会	北陸新幹線建設	乙丸遺跡	金沢市	1,300
		街路（都）的場飯山線	的場農業倉庫前遺跡	羽咋市	2,150
		広域一般河川改修 米町川	北吉田ノシロタ遺跡	志賀町	630
		道路バリアフリー化促進（主）七尾羽咋線	良川北遺跡	中能登町（旧鳥屋町）	450
		街路（都）春日通り線	飯田町遺跡	珠洲市	1,600
		小松高等学校改築	小松城跡	小松市	600
		都心地区整備推進	金沢城跡	金沢市	2,580
		総計			65,240

平成16年度発掘調査計画（当初）

No.	遺跡名
1	三室トリC遺跡
2	新庄遺跡
3	良川北遺跡
4	得田氏館跡
5	北吉田ノシロタ遺跡
6	森本C遺跡
7	乙丸遺跡
8	小松城跡
9	矢田野遺跡



掲載遺跡位置図

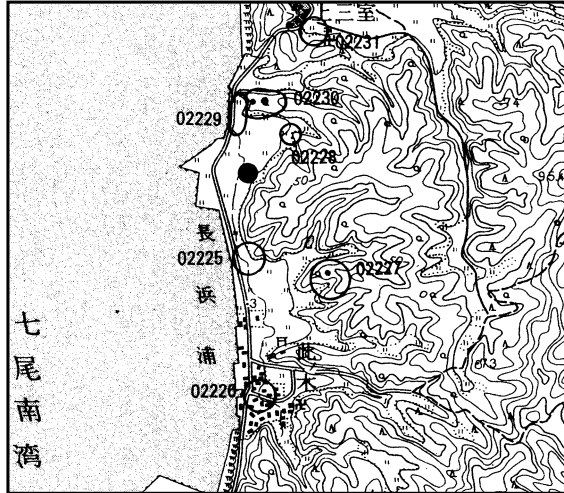
三室トリC遺跡

所在地 七尾市三室町地内

調査面積 1,600㎡

調査期間 平成16年6月1日～同年8月19日

調査担当 金山哲哉 和田龍介 安中哲徳



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は七尾湾に面した崎山半島西側丘陵裾部の緩斜面に立地。
- ・上層—中世の館跡の規模及び土塁・堀跡の一部や井戸跡などの遺構を確認。包含層や堀跡から土師器・珠洲焼等が出土。
- ・中層—古代の遺構を確認。上層基盤層から製塩土器・土師器・須恵器等が出土。
- ・下層—弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構を確認。包含層から土師器・弥生土器・縄文土器等が出土。

三室トリC遺跡は、七尾市北東部にのびる崎山半島西側の三室町地内に所在し、七尾湾に向かい西へ傾斜する丘陵裾部の緩斜面に立地している。遺跡の北側には三室まどがけ古墳群や三室まどがけ遺跡、北東側には三室中世墳墓群が存在している。

遺跡は中山間地域総合整備事業三室地区のほ場整備に先立ち行われた試掘調査により、古代の集落跡と中世の館跡の複合遺跡として発見された。同時に、北側に三室まどがけB遺跡、西側に三室トリB遺跡、南側に此ノ木A遺跡、昨年度の調査で製塩遺構が検出された三室トリA遺跡などが発見され、遺跡は小規模な製塩遺跡に囲まれて位置していることがわかった。

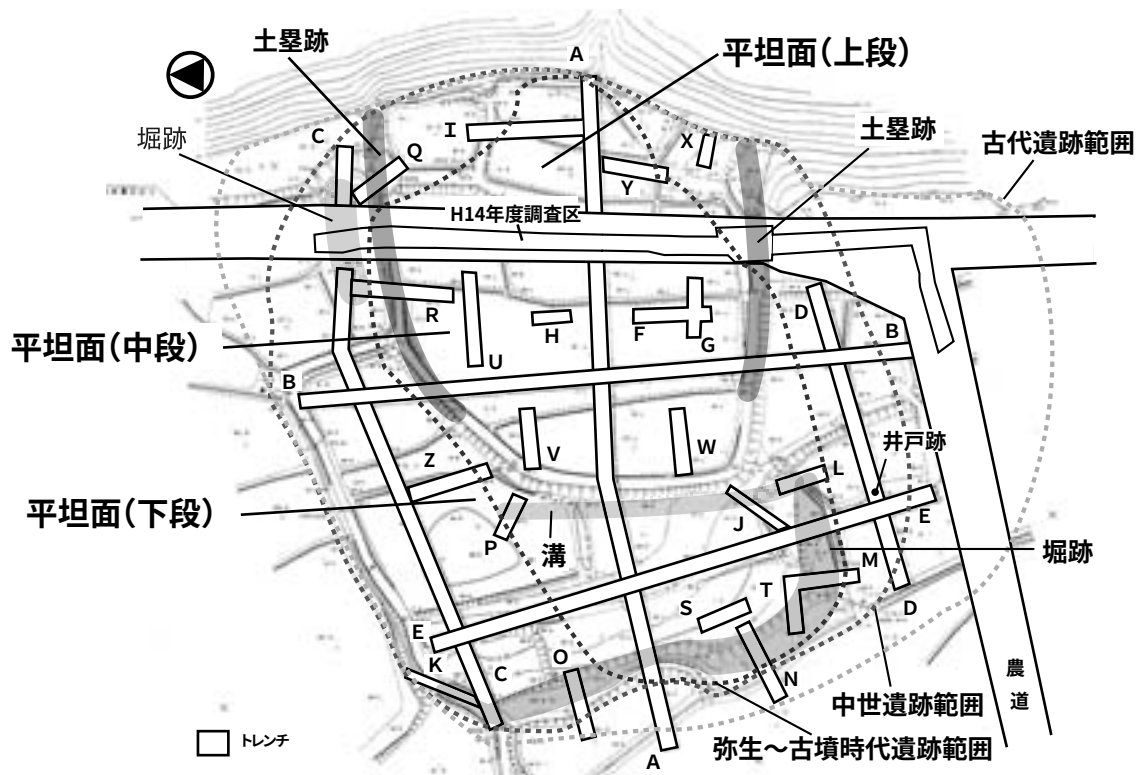
発掘調査は、昨年度に農道下のパイプライン埋設箇所を対象として行われており、館跡の一部とみられる土塁と堀状の遺構が確認された。今年度は遺跡全体が工事で盛土されることから、中世の館跡及び古代の集落跡全体の規模・内容確認を主眼として調査が行われた。

上層 館跡は現況では、上・中・下段3段の半円状に作り出された平坦面と、それを囲む堀状の落ち込みが確認できた。当初、平坦面に屋敷跡の存在が想定されたことから、館跡全体を東西に縦断するトレンチ3本と南北に横断するトレンチ2本を設定し、さらに小規模な21のトレンチを追加して調査を行った。近・現代の耕作に伴う地盤改良が深くまで及び、遺構面全体が削平されていたことから中世の建物跡は確認できなかったが、昨年度確認された土塁や堀跡の範囲を確定し、他に溝、井戸跡などを検出した。また、堀跡や井戸跡からは土師器や珠洲焼など中世の遺物が出土した。

中層 上層の基盤層を掘り下げた結果、製塩遺構は検出されなかったが、古代の製塩土器や土師器、須恵器等が出土し、溝や土坑、畑の畝溝状遺構などが検出された。

下層 包含層から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての土器がまとまって出土し、地山面で溝や土坑、小穴などの遺構を検出した。南側へ約4.5km離れた万行遺跡の竪穴住居跡と同時期の集落跡と考えられる。また、少量ではあるが弥生時代中期と縄文時代後期の土器が出土している。

今回の工事により、遺構や遺物の多くは盛土され地中に保存されることになるが、現況で確認できた館跡の平坦面や土塁、堀跡など、当時から残されてきた景観が完全に失われてしまうことは残念である。今後調査成果をまとめることで、少しでも遺跡の復元につながれば幸いである。(安中哲徳)



調査区全体（遺跡範囲）図 (S = 1/1,000)



平坦面(上・中段) 作業風景



平坦面(中段) 作業風景



堀跡(L トレンチ) 検出状況



堀跡(C-O-A トレンチ間) 検出状況

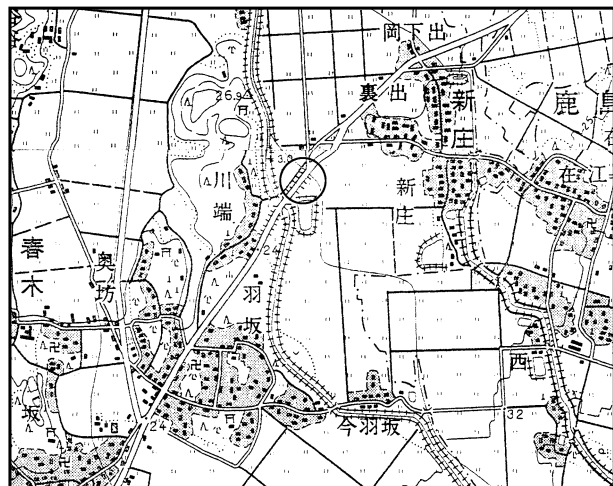
しん じょう
新 庄 遺 跡

所在地 鹿島郡中能登町(旧烏屋町)新庄地内
調査面積 1,380m²

調査期間 平成16年5月12日～同年8月30日
調査担当 白田義彦 金山哲哉 荒木麻理子

調査成果の要点

- ・奈良時代、中世の集落跡と古墳時代の河跡を検出した。
- ・古墳時代の河跡は自然災害により廃絶したと思われる痕跡を残す。
- ・奈良時代の竪穴建物・溝を検出した。
- ・中世の区画溝・掘立柱建物・竪穴建物・井戸を検出した。



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

新庄遺跡は邑知平野の西側にあり、現在の七尾湾のある七尾南湾と田鶴浜町方面の七尾西湾へぬける分岐点に立地する。天井川またはあばれ川として有名な二宮川の流域にあり、遺跡のすぐ南側には館池（溜池）が存在した。昨年度も調査が行われており、今年度は昨年度の調査区に挟まれた主要地方道七尾羽咋線下の E 区と北西側の F 区の調査を行った。尚、河川改修に関連した当遺跡の現地調査は今年度で終了する。

E区では主に奈良時代と中世の遺構を検出した。奈良時代の主な遺構は竪穴建物と溝である。竪穴建物は約3.5×3.5mの方形で、深さは約20cmである。竪穴建物からの遺物は少なく、奈良時代の土器が数点出土した。奈良時代の溝は幅約1m、深さ約50cmを測り、ほぼ南北方向に走るものである。中世の遺構は溝・掘立柱建物・竪穴建物・井戸を検出した。溝は幅約0.5～1.5m、深さ約10～30cmを測り、屋敷地を区画する区画溝と思われる。掘立柱建物は昨年度の調査区から続くものである。中世の竪穴建物は2棟検出され、その規模は約6×4mの長方形を呈し、深さは約20cmのものと、約3×3mの方形を呈し、深さ約30cmのものである。井戸は5基検出した。検出した井戸のうち井戸枠が検出されたものはなかった。平面形は方形と円形の2種類がみられ、方形のものの規模は1.5×1.5m、深さは約1mであり、円形のものは直径1～2mの規模におさまリ、深さは約0.5～1.5mである。

F区では主に古墳時代の河跡と中世の井戸を検出した。古墳時代の河跡はほぼ南北方向に走るもので、幅約10～13m、深さ約2mである。河跡の埋土は主に灰白色の粗砂であり、洪水かなにかで一気に埋まった様な堆積状況であった。河跡の底の方から木製品の農耕具が数点出土している。古墳時代の土器は主に河跡の底の方と検出面に近い上層から出土した。土器は甕が比較的多く、中には完形に近いものも出土した。中世の井戸は3基検出した。平面形は全て円形を呈し、小型のものは直径約1m弱であり、深さは約1m弱である。大型のものは直径約2mであり、深さは約1.5mである。小型の井戸の一つから珠洲焼の播鉢が底の方から出土した。また、別の小型の井戸からは小型獣の骨が出土した。井戸は検出されたが、掘立柱建物は検出されなかった。(白田義彦)



調査区位置図



E区完掘状況（南東から）



F区完掘状況（南東から）



中世の竪穴建物（E区）



奈良時代の竪穴建物（E区）



井戸から出土したすり鉢（F区）



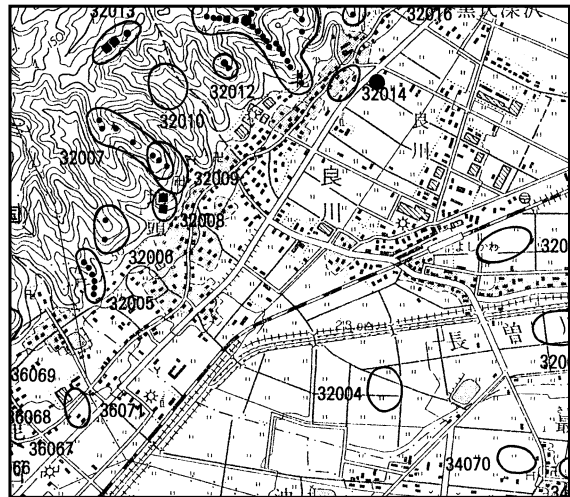
古墳時代の河跡の断面（F区）



河跡出土土器（F区）

よしかわきた
良川北遺跡

所在地 鹿島郡中能登町(旧鳥屋町)良川地内
調査面積 450m²



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査期間 平成16年6月21日～同年7月30日
調査担当 伊藤雅文 西田昌弘 渡邊大輔

良川北遺跡は、邑知地溝帯を流れる長曾川中流域の北側、眉丈山山麓の丘陵裾部に位置する。

道路バリアフリー化促進（段差解消）事業に係る七尾羽咋線の拡幅箇所を対象に発掘調査を実施した。

調査では、上・下2層を確認している。

上層では、平安時代の溝・小穴を確認した。遺構はいずれも浅く、遺物の出土は僅かであった。

下層では、古墳時代～平安時代の溝・小穴を確認した。遺物は土師器片や須恵器片などが若干出土しており、調査区南半部で検出された溝内からの出土が過半を占める。調査区中央部の溝からは、幼児頭大程度の亜角礫が多量に確認でき、旧

河川の氾濫ないしは丘陵部からの土石流があったことを推測させる。

旧地形は、上・下層とも調査区南西部でやや高く、北東部に向かって緩やかに下っており、当時は調査区の西に広がる丘陵が舌状に延びた微高地上に遺跡が立地していたものと推測される。また、検出した溝群の覆土からは、砂粒や礫、植物遺体の混入が多くみられたことから、遺跡内を小河川が幾筋も流れていた様相をうかがわせる。

(西田昌弘)



上層完掘状況（北東から）



下層完掘状況（北東から）



下層南西端部 5号溝完掘状況（北東から）



下層中央部 7号溝礫群出土状況（北から）

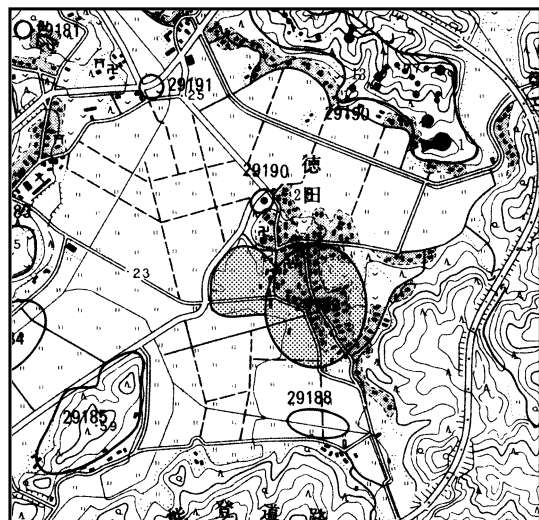
とく だ し やかた 得 田 氏 館 跡

所在地 羽咋郡志賀町徳田地内

調査面積 610m²

調査期間 平成16年4月27日～同年6月10日

調査担当 本田秀生 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・本遺跡は段丘上に立地する。
- ・調査区はA～Fの6箇所で、A区35m²、B区30m²、C区105m²、D区150m²、E区150m²、F区140m²である。
- ・検出した遺構は、堅穴住居、円筒土坑、区画溝、柱穴等である。
- ・出土した遺物は縄文～古代までであるが、主な時期は弥生～古墳時代である。
- ・徳田古墳群とは地理的・時期的にも近いことから本遺跡との関連が注目される。
- ・今回の調査では館跡に関連するような遺構・遺物は確認できなかった。

本調査は県営ほ場整備事業土田地区に係る発掘調査である。排水路・パイプライン敷設及び切土で遺跡が損壊する地点6箇所を調査区とした。

A区は段丘の法面上端に位置しており、溝を1条検出した。他の調査区と比べ、検出面が現況より80cm下と深い。斜面裾に向きのびており、排水溝と考える。遺物は出土しなかったが、周辺の表土から縄文時代の磨製石斧1点が出土している。

B区では堅穴住居1棟、円筒土坑2基を検出した。堅穴住居は隅丸方形を呈し、1辺2m以上を測る。柱穴は北東隅部で1基確認しており、主柱穴は4本と想定される。時期は弥生後期～古墳時代と思われる。円筒土坑は上端が円形で径1.2m、下端が隅丸方形で1辺70cm、深さが1mであった。時期は弥生後期～古墳時代と思われる。

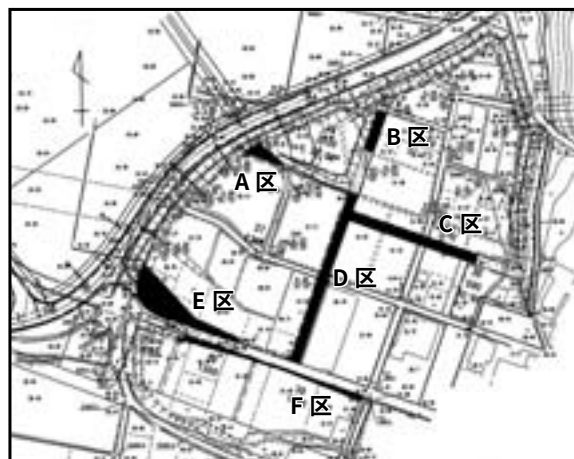
C区では遺構・遺物とも希薄であったが、古代の土器が少量出土している。

D区は北から南に向けて遺構が増加し、遺物の時期も新しくなる傾向が認められた。堅穴住居1棟、ピット10基を検出した。堅穴住居は隅丸方形を呈し、1辺3m以上を測る。貼床層を除去後、やや北寄りで不整形な土坑を検出した。径1.6m以上・深さ30cmを測り、防湿目的で構築されたと考える。古手の須恵器片が出土しており、時期は古墳時代と思われる。ピット10基は掘方の埋土・規模・形状から柱穴の可能性が高いが、柱筋の大半は調査区外へとのびるため、建物の正確な規模は不明である。D区の包含層からは、古墳～古代の土器が出土している。

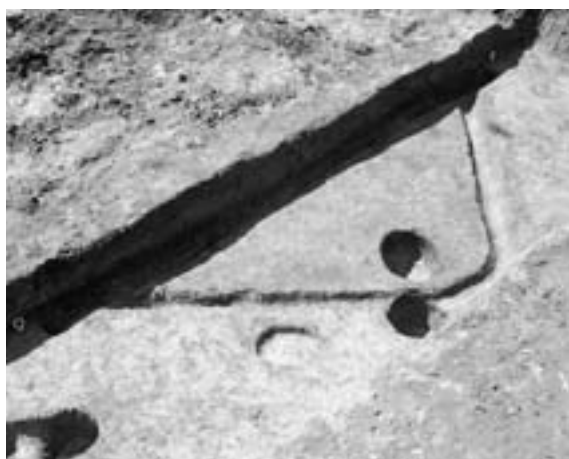
E区では円筒土坑1基を検出した。隅丸方形を呈し、1辺70cm・深さ80cmを測る。遺物は出土しなかった。ピット状の遺構を多数検出したが、埋土・断面・掘方形状等から木の根による攪乱穴ないし稲架穴と判断した。円筒土坑周辺で柱穴らしき遺構は確認しているが、柱筋が並ばず決め手に欠ける。E区の包含層からは、古墳時代の土器が少量出土している。

F区は西から中央付近にかけて遺構が増加する傾向が認められた。堅穴住居1棟、溝2条、ピット24基を検出した。堅穴住居は周溝北側端のみ確認しており、弓状に北へ張り出していた。貼床層が調

査区外南側にのびており、B・D区で検出した竪穴住居よりも規模は大きくなる可能性が高い。周溝から古墳時代の土器がまとまって出土している。溝は北東―南西方向と北西―南東方向のものを検出した。F区西端と中央付近に存在し、遺構密度が濃い範囲を囲むようにして検出されたことから、区画溝の可能性はある。ピット24基は掘方の埋土・規模・形状から柱穴の可能性が高いが、柱筋の大半は調査区外へと伸びるため、建物の正確な規模は不明である。
(谷内明央)



調査区配置図 (S = 1/4,000)



B区竪穴住居 (南から)



B区完掘状況 (南から)



D区竪穴住居 (北から)



D区完掘状況 (南から)



E区完掘状況 (北西から)

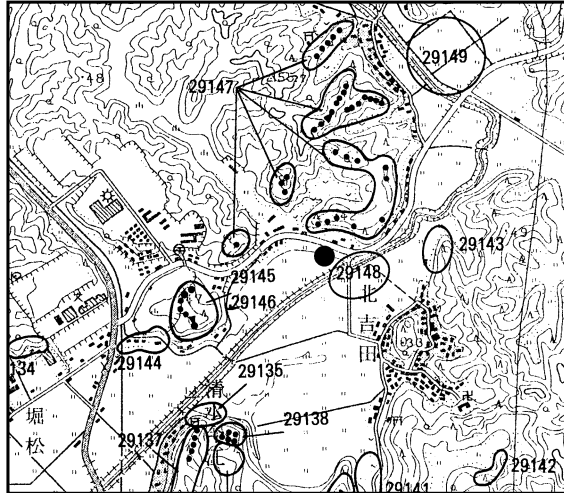
きた よし だ 北吉田ノシロタ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町字北吉田地内

調査面積 630㎡

調査期間 平成16年4月28日～同年6月17日

調査担当 伊藤雅文 西田昌弘 渡邊大輔



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

北吉田ノシロタ遺跡は、志賀町のほぼ中央を流れる米町川の中流域、丘陵に挟まれた谷間の沖積低地上に立地する。

平成4・5年度には県営ほ場整備事業に伴い、また、平成7年度には道路整備事業に伴って発掘調査が実施されており、今回で4度目の調査となる。

今年度は、米町川河川改修事業に伴って発掘調査を実施した。

遺構は稀薄であったものの、厚さ30～60cmを測る遺物包含層からは、古墳時代の土師器片や中世の土師器、珠洲焼片の他、板材等の木製品や宋銭などが出土した。旧米町川の氾濫に伴う堆積層(灰

黄色砂質土層)を挟む暗灰色粘質土層が主たる包含層であり、下位で古墳時代が、中位～上位にかけては中世の遺物が出土する傾向にあったものの、層ごとに時期を明確に区分することはできなかった。

以上、今回の調査においては、古墳時代から中世にかかる時期、旧米町川の氾濫を数度受けつつも、本遺跡において集落が営まれてきた様相を確認することができた。(西田昌弘)



調査区遠景 (北東から)



完掘状況 (北から)



作業風景 (北から)

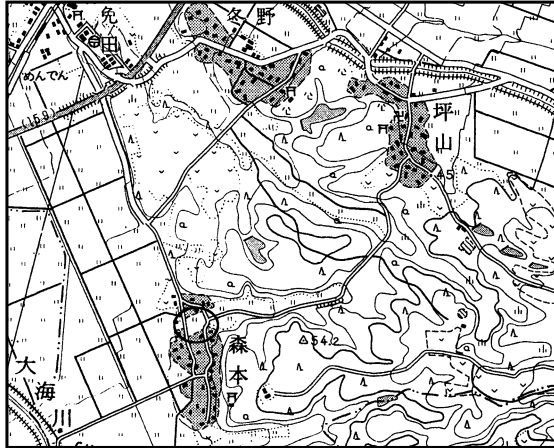


木製品出土状況 (西から)

森本C遺跡

所在地 羽咋郡宝達志水町(旧押水町)森本地内
調査面積 1,510㎡

調査期間 平成16年4月19日～同年7月23日
調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・西半で弥生時代後期～古墳時代中期の、東半で奈良時代後半～平安時代前半の河道を確認。
- ・水田用水とみられる溝から田下駄1足出土。
- ・古代河道からは木簡(文書木簡1、呪符木簡1)、「中山寺」等の墨書土器約50点が出土。周辺に宗教的施設等の存在が推測される。

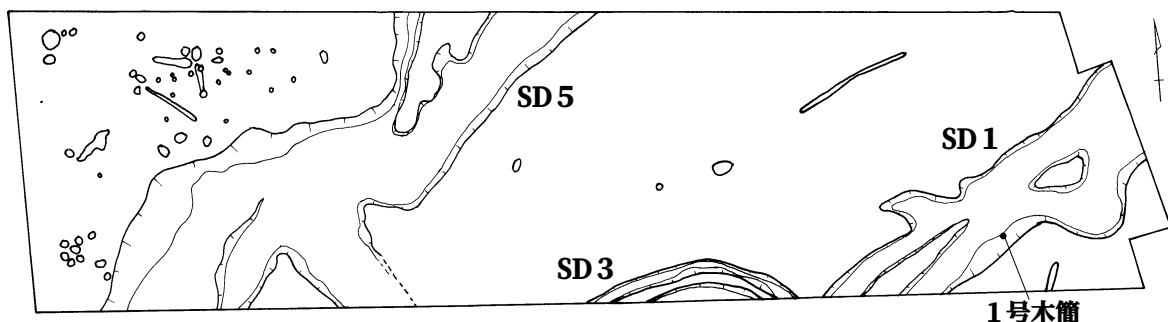
遺跡は宝達山西麓に刻まれた幅約50mの小解析谷出口に位置する。眼前には大海川が望まれ、その右岸に形成された低湿地が広がる。調査は県

道改良工事に伴うもので、調査地は谷中央部にあたる。主な遺構は2条の河道と溝1条であった。

東西に長い調査区西半部では現谷に斜行して北東から南西に流下する幅約9m、深さ約1.5mの河道(SD5)を検出した。内部からは弥生時代後期～古墳時代中期の土器が多量に出土し、周辺に集落域のあることが推測される。

調査区中央部では幅約1m、深さ約0.5mの孤状をなす溝(SD3)が検出され、田下駄一足が出土した。溝主体は調査区域外にあり詳細は明らかにできなかったが、溝に囲まれた箇所が凹をなし、この凹みが水田面、SD3は用水路となる可能性がある。溝からは土器細片も少量出土した。

谷奥にあたる東半部ではSD5と同方向を向く幅約5m、深さ約1mの奈良時代後半～平安時代前半にかけての河道(SD1)を検出した。SD1からは、木簡2点(巻頭写真)、直径約40cmの木製鉢や箸状木製品、「中山寺」、「川相」、「前」等の墨書土器約50点、人面墨書土器1点(巻頭写真)などが多量の土師器・須恵器とともに出土した。1号木簡は「品治部」、「□(丈力)部」が物品を要求する旨を表裏に記した請求文書であり、後に片面を薄く削り「右右右右」と習書に転じている。2号木簡は呪符木簡である。また、人面墨書土器は、仏鉢模倣須恵器側面にひげを生やした人物が倒位に描かれ、外底に「中山寺」の墨書がある。この奈良・平安時代については、SD1以西に遺構・遺物が僅少なことや、SD1内の遺物分布状況などから本河道左岸に接した丘陵裾部に遺跡の主体があるものとみられる。その性格について、木簡や墨書土器「中山寺」などから、宗教的施設の可能性が高く、また、古代、加賀・能登の国境をなしたといわれる大海川に近い立地や、近接して経路が想定される北陸道能登路との関連も注意され、公的性格を合わせ持ったことも推測される。(澤辺利明)



森本C遺跡概略図 (S = 1/400)



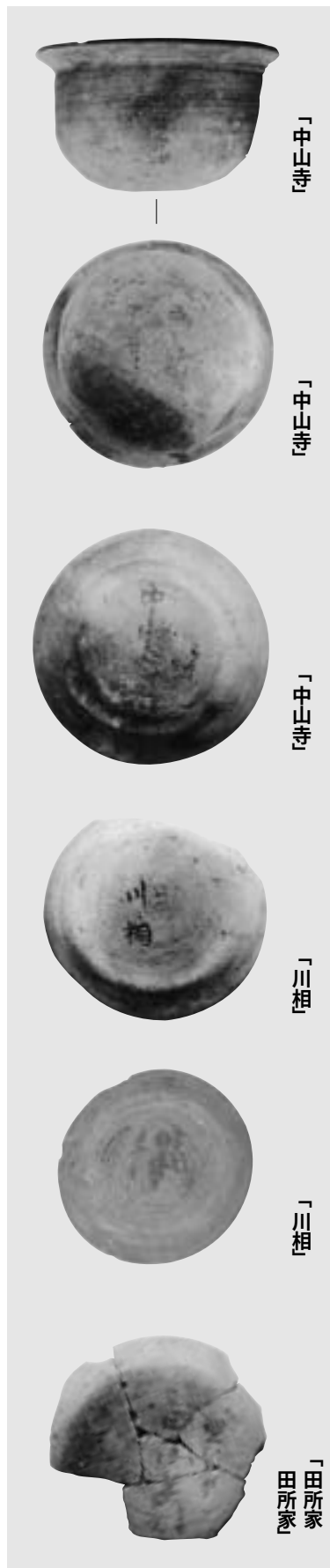
遺跡空中写真（東から）



東半部完掘状況（東から）



河道 SD 1 遺物出土状況

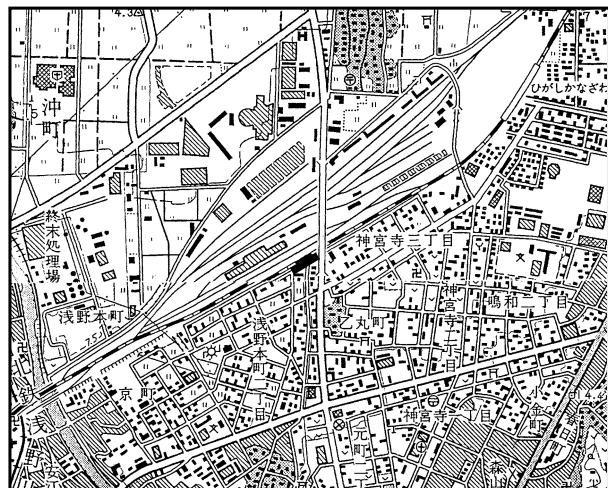


墨書土器（縮尺不同）

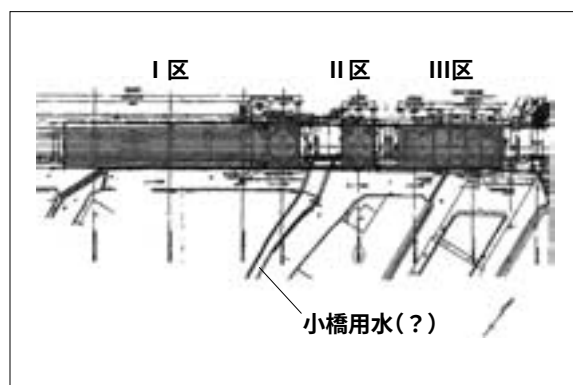
乙丸遺跡

所在地 金沢市乙丸町、浅野本町地内
調査面積 1,300㎡

調査期間 平成16年4月26日～同年8月6日
調査担当 安 英樹 山田由布子



遺跡位置図 (S = 1/25,000)



調査区割図 (S = 1/2,000)

本調査は北陸新幹線建設工事に伴う発掘調査であり、JR 北陸本線の南側に位置する。遺跡は浅野川と金腐川にはさまれた平野に立地し、標高5～6mを測る。弥生時代の溝・河川跡等を検出し、遺物は少量の土器が出土している。調査区は西から東へ向かってI区・II区・III区とした。

I区ではほぼ南北方向に向かって走る溝を多く検出した。溝の中でも、I区の西側に比較的多く見られる、細く複雑な形態をしたものは、地割れの痕跡である可能性が高い。

II区は調査区の半分が旧小橋用水による攪乱を受けていたが、残る箇所で河川跡を検出した。弥生時代後期の土器が少量出土しており、それ以前の河川跡である。現在もI区とII区の間を流れると推定されている小橋用水が浅野川の支流を利用して作られたことから、検出した河川跡も旧浅野川の支流である可能性がある。

III区では調査区全体を約40～50cmの洪水砂層が覆っていた。砂層の上には植物腐敗層をはさんで、地山とよく似た青灰粘土層が堆積しており、この層は洪水による冠水堆積の跡と推測される。洪水砂層からは弥生土器が出土しており、洪水はこの時期のものであろう。

(山田由布子)



I区 完掘状況



I区 溝検出状況

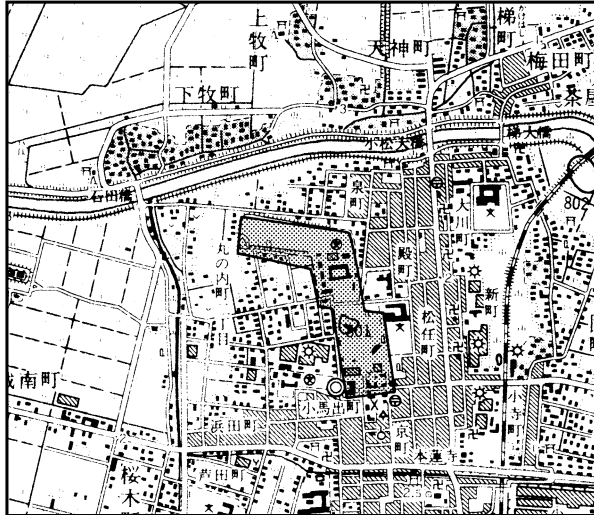
こまつじょう 小松城跡

所在地 小松市丸内地内

調査面積 600㎡

調査期間 平成16年4月26日～同年6月1日

調査担当 松山和彦 浜崎悟司 伊藤さやか



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

本調査は、小松高校校舎改築に伴う第4次調査になる。第2体育館と取り壊される普通教室棟の間に位置し、18世紀後半頃の「城内分間絵図」(『小松市史資料編1 小松城』)との照合によると、二の丸の中央の馬廻り上番所(下図★印)付近に位置することが判明している。調査区を東西二分し、東半部(1～3区)・西半部(4～7区)の順に実施したところ、現地表面下80cm(上層)と140cm(下層)において遺構面2面を確認した。上層面の主な遺構としては、2・3区で硬化面を検出している。幅は350～530cmで南北に展開し、東西両脇に幅40～90cm、深さ約20cmの溝状の窪みを伴う。構築時期

は硬化面下出土の遺物から、17世紀以降と思われる。道路遺構と想定しており、下記○印部分に見える道の可能性もある。また4区でも、17世紀中葉以降の構築と思われる凝灰岩切石や石白破片で組まれた石積み遺構も検出している。規模は東西約200cm、高さは石の上面まで約100cmであり、北側に面がそろっている。石垣裏込めには貝殻や燻し瓦が含まれていた。石垣かあるいは建物基礎となるかは不明である。

下層面の遺構としては、1区で土坑、2区で溝を確認しており、土坑・溝からは15～16世紀を中心とする遺物が出土している。4区では、新旧関係のある2条の溝(SD06・SD07)を検出している。SD06の幅は遺存状態の良い地点で約70cm、深さ約40cmである。SD07は幅110～150cm、深さは最深部で約60cmである。その他小穴を検出している。

今回の調査では、従来遺構確認面として認識されていなかった上層面を確認出来たことが大きな成果であろう。年代的には寛永16(1639)年の前田利常入城に伴う大規模な改修に関連した遺構面と考えられる。
(伊藤さやか)



上：道路状硬化面検出
右：調査区の推定位置

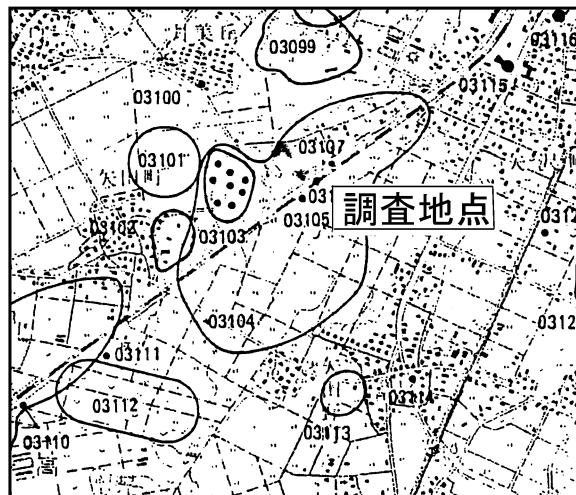


城内分間絵図『小松市史 資料編1 小松城』より転載

や た の 矢 田 野 遺 跡

所 在 地 小松市月津町、扇原町地内
調査面積 130m²

調査期間 平成16年6月24日～同年7月21日
調査担当 白田義彦 荒木麻理子



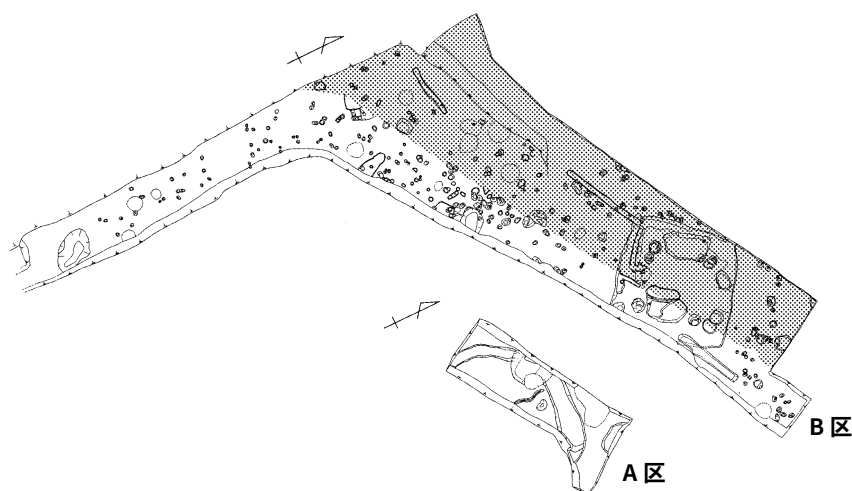
遺跡位置図 (S = 1/25,000)

矢田野遺跡は、小松市南部の月津台地上に位置している。近現代の開発が著しく、土採取や谷の埋め立て、農地開発等によって旧地形から大きく変化が見られる。台地のほぼ中央には、柴山瀉に注ぎ込む馬渡川によって形成された開析谷が入り込んでおり、遺跡はこの谷を取り囲むように広がっている。

また、周辺には念仏林遺跡、矢田野エジリ古墳、額見町遺跡や念仏林南遺跡など縄文時代以降各時代の遺跡が数多く分布し、特に古墳時代から古代にかけて営まれた大規模集落や6世紀前～中葉の古墳が群集する地域として知られる。

発掘調査は県営ほ場整備事業を原因としている。(財)石川県埋蔵文化財センターでは、これまで平成11年度から計4次にわたる調査を行っており、古墳時代後期から奈良時代の遺構・遺物を確認している。

今年度はA区・B区の2調査区で調査を行ったが、一帯の開発などによる大規模な削平・埋め立てにより包含層や遺構面が削平を受けていた。また、巨大な木根や竹根が残っており、一部で遺構を攪乱していた。A区では古墳の周溝と思われる溝の一部を確認した。狭小な調査区のため、墳丘の確認には至っていないが、周囲の状況より恐らく削平されたものと思われる。また、B区では、昨年度検出した古墳時代終末期のオンドル状遺構を伴う竪穴住居址の一部、土坑、ピットを確認した。また、多数の小穴を確認したが、その大半が木根跡であったと思われる。(荒木麻理子)



※網掛けは前年度調査分

矢田野遺跡遺構概略図 (S = 1/500)

平成16（2004）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

1 班

上半期では、大長野 A 遺跡（小松市・平成 8、9 年度調査）の整理作業を行った。縄文土器の深鉢、浅鉢、注口など破片が多くみられたわりには、形になるものは少なかった。他には弥生土器をはじめ、珠洲焼、越前焼、瀬戸・美濃陶器、青磁、白磁など中世の遺物も目についた。また、石器では、磨製石斧、石錘が多く、金属製品では、「元宝通宝」などの北宋銭とともに、江戸時代の「寛永通宝」もみられた。木製品はそれぞれの時代の礎板、柱、杭、桶などの整理を行った。（松田智恵子）

2 班

上半期の整理作業は、まず梅田 B 遺跡（金沢市・平成10年度調査）の記名・分類・接合および実測・トレース作業を行った。実測遺物の中には、土師器、椀の底部に回転糸切痕の残るものも多数あり、拓本を採るにあたって摩耗しているものには特に慎重になったが、はっきりしているものは墨で模様を出していくのが非常に楽しかった。

その後は、作業期間の短い遺跡が続き、谷内石山遺跡（津幡町・平成15年度調査）、太田 A 遺跡ほか（羽咋市・平成15年度調査）、矢田野遺跡ほか（小松市・平成15年度調査）のそれぞれ記名・分類・接合および実測・トレース作業を行った。この間は、短期間作業の大変さを改めて感じさせられた。（角間律子）

3 班

小杉遺跡第 1、2 次（山中町・平成14、15年度調査）の分類・接合作業を行った。縄文土器の粗製、平縁のものが大半で、内面に厚く煤の付いたものも多く、文様は山字文、扇状文、凹線文、連結縦短線など、井口式、八日市新保式に似たものがみられた。装飾的な土盤が 1 点あった。まとまった形にはならなかったが、注口の注ぎ口部分も何点かあった。1 次と 2 次で接合したものもあり、出土地に重点をおくという事だったので分類の仕方もいろいろ試みたが思ったほど成果が出ず、完形に至るものは少なかった。（小林直子）



小杉遺跡 復元品

4班

四柳白山下遺跡第4、5次（羽咋市・平成9、10年度調査）の記名・分類・接合作業および土器・木器・石器の実測を行った。土器の接合作業では、この遺跡が縄文時代中期から近世初頭の集落・耕作地が度重なる土砂災害に遭いながら、断続的に営まれてきたという性格をもっているためなのか、調査面の異なる離れた遺構のもの同士や、4次と5次の破片が接合することも稀ではなかった。常に前の作業を振り返りながら、しらみ潰しのごとく探し回る接合は持久力のいる作業だった。

実測遺物の大多数は須恵器と土師器なのだが、縄文土器から近世陶磁器まで幅広くあり器種もさまざまであった。ただ、全体的に依存度の低いのが残念に思われた。木製品では斎串、刀子の柄、挽歯横櫛、漆器椀、柱根、大型の井戸枠など、石製品では砥石、石鏃などの実測を行い上半期を終えた。

（朝倉佳子）



四柳白山下遺跡 木製品・大型須恵器甕実測

5班

小島西遺跡（七尾市・平成14、15年度調査）の分類、データ作成、実測作業を行った。当遺跡では、2万点以上におよぶ木製品が出土している。斎串、人形、馬形、舟形などの祭祀具や棒状木製品、杭、板材、農具の他自然木や木片も多く混ざり込んでいたため、種類別に細かく分類する作業は大変に時間を要するものとなった。分類後、木製品を接合、計測しながらデジタルカメラで撮影し、パソコンに取り込むデジタル機器を導入したデータ作成作業は整理課初の試みとなり、当初は試行錯誤の連続であったが、膨大な量の計測情報を詳しく残しておくことができ、有意義なものとなった。

（明田奈々）

6班

北方B、北方E、北方池の下遺跡（珠洲市・平成15年度調査）、末松遺跡（野々市町・平成15年度調査）、浄水寺跡（小松市・平成12年度調査）の整理作業を行った。印象深かったこととしては、北方B遺跡より出土した木製のカゴの実測がある。土圧で押しつぶされ大変もろくなっていたため、作業中に分解しないように土とともに板に乗せた状態での実測であった。上からのぞき込んで書く姿勢が辛く、集中力が続かず苦勞した。「時間かかってもいいよ。」との班の皆のはげましが支えとなり、大変根気のいる作業を終えることができた。また、浄水寺跡では、火災によって火を受けたと思われる変色した土器や炭化物が多量に付着した土器が数多くあったのが興味深かった。

（下村 薫）



①分類・選別



②計測



③デジタルカメラ写真撮影



④データ取り込み

小島西遺跡 木製品データ作成作業

7班

白江梯川遺跡（小松市・平成9、10年度調査）の出土遺物は、時代範囲が長期にわたるため多種多様であった。土器では、土師器の他に瓦や陶器・磁器、特に絵柄の中に歌が書かれている色絵皿や赤絵の小壺、墨書が施された白磁の小碗などもみられた。木製品については下駄、駒、椀、傘の部品などが、また、金属製品では煙管の吸い口、石製品では行火や宝篋印塔などと、人々の日常生活が窺えるような内容だった。

館開テラアト遺跡他3遺跡（志賀町・平成15年度調査）は短い期間の整理作業だったが、甕、壺、種もみ壺、高坏、土師器皿、播鉢などの他、石鏃、砥石などの石製品、鉄滓、銅銭といった金属製品、櫛、杓文字を含む木製品などさまざまな遺物がみられた。（海野美香子）



北方B遺跡 木製カゴ実測



館開テラアト遺跡 大型壺実測

8 班

上半期では、新庄遺跡（鳥屋町・平成15年度調査）、観法寺ジンヤマ遺跡（金沢市・平成14年度調査）、塩津遺跡（中島町・平成14年度調査）、四柳白山下遺跡（羽咋市・平成11年度調査）以上4遺跡の整理作業を行った。

四柳白山下遺跡については、この一帯が土砂災害多発地帯であったため、調査区や遺構を超えての接合作業となった。整理済みのパンケースをもう一度見直す作業には、記憶力と体力を要し大変苦勞させられた。実測では、墨書土器が含まれており「吉継」、「法師」と書かれたものがみられた。四柳白山下遺跡の記名・分類・接合、実測までで上半期の作業は終了した。（北 香織）

復元

平成16年度上半期（4月から9月まで）の出土品修復作業は、梅田B遺跡をはじめ、白江梯川遺跡、大長野A遺跡など数遺跡、約100点近くの土器を扱った。深鉢、浅鉢など縄文土器の「小杉遺跡」、大甕、長胴甕、横瓶など須恵器の「四柳白山下遺跡」。土器の口縁部と底部との接点がない依存度の低い遺物の場合は、石膏を埋め合わせ完形品のイメージに近づけるようにする。よみがえった土器は収蔵庫で保管されるが、ある博物館で偶然見覚えのある土器をみつけた時は、わが子と再会したような気持ちになるものである。（小間博文）

洗浄

上半期は白江梯川遺跡、大長野A遺跡、小松城跡（小松市）、加茂遺跡（津幡町）、栄町遺跡、小島西遺跡（七尾市）、金沢城跡（金沢市）、末松遺跡（野々市町）、森本C遺跡（押水町）の洗浄・乾燥作業を行った。今年度も木製品が多く、中でも小島西遺跡（平成15年度調査）は小さな木片から大人の身長ほどもある大型木器を洗った。洗浄後はその全てを水漬けにするので、収納箱の重さは相当なものになる。また、木器は土器よりも大変もろいので慎重に作業しなければならない。ちょっとしたことで折れてしまった苦い経験もある。

今から7年前に旧センターから新センターへ引越した時、担当者から「木製品を持ち上げ運ぶ場合は、必ず両手でやさしく赤ちゃんを抱くような気持ちで。」といわれた。その時は少々おおげさと思ったが、実際はその通りにしなければ大切な遺物が壊れてしまうことがわかった。今回も、その言葉を思い出しながら丁寧に扱うことを心がけた。（末富しげ子）



観法寺遺跡 須恵器坏復元



小島西遺跡 木製品洗浄

環日本海交流史研究集会の記録

「古代日本海域の港と交流」

所長 谷内尾 晋司

はじめに

石川県はもとより、日本海沿岸域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次でおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿岸域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

平成16年度は「古代日本海域の港と交流」をテーマに開催いたしました。

日本海は、原始・古代より中世、そして近世北前船の時代を通じて、海の大動脈として機能し、人々や文物の交流・交易の舞台として数多くの「ミナト」が栄えてきました。特に、今回取り上げた古代（奈良・平安時代）には、律令国家によって営まれた外洋港である「国津」、「郡津」とともに、内陸部との水上交通路でもある河川や潟湖に築かれた「川津」、「潟津」が交易、物資の集積拠点として重要な役割を果たしていたと考えられます。北陸地方におきましても、新潟県の蔵の坪遺跡、富山県の中保B遺跡、石川県の戸水C遺跡、畝田・寺中遺跡で、「津」の文字が書かれた墨書土器を含む豊富な遺物や建物遺構群が相次いで発見されており、古代の水運に関係する遺跡の実態が明らかにされつつあります。

このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、水上交通史の視点から日本海沿岸域の古代の「ミナト」について焦点を当てました。北部九州地方については福岡市の大庭康時氏、山陰地方については島根県の森田喜久男氏、北陸地方については敦賀市の川村俊彦氏、石川県の和田龍介氏、金沢市の出越茂和氏、高岡市の根津明義氏、新潟県の田中一穂氏、東北地方については秋田県の小松正夫氏、北海道地方については鈴木 信氏にお願ひし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

報告や討議の中で、船着き場など「ミナト」の所在を示す遺構の有無、付随する建物遺構群や宗教施設等の在り方などが論点となりました。また、沿岸部と内陸の河川や潟湖の「ミナト」の性格の違いなどが論議され、その立地によって機能差が存在することがほぼ共通認識となりました。特に、船溜まり（繫留施設）など「ミナト」に直結する遺構については、まだまだ不明瞭な点が多く、何をもって「ミナトの遺跡」とするかが、その多様な機能性を含めこれからの課題であると感じました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。

九州 — 鴻臚館と古代の港湾 —

大庭 康時（福岡市教育委員会）

西北九州沿海部には、古代・中世に對外貿易の拠点となったとされる港が、点在している。それらは、必ずしも歴史資料的に裏付けられたものばかりではないが、地勢的に見れば、すべての港湾地形にその可能性があるといっても過言ではない。

一方、日本の古代国家は、律令上の公的な貿易窓口として、筑前国博多大津の鴻臚館を経営した。鴻臚館跡では、1987年以来、全容解明のための発掘調査が継続して実施され、多大の成果を上げつつある。ここでは、古代九州を代表する港として、鴻臚館の発掘調査成果を見ることとする。

鴻臚館の立地と調査成果

博多湾は、玄界灘の荒海を海ノ中道と志賀島が遮り、穏やかな内水面を形作っている。鴻臚館はそのほぼ中央、南北に伸びる丘陵の先端に位置する。博多湾に向かっては、ほぼ正面に独立丘である荒津山が隆起し、西側から砂州が伸びていた。これにより、鴻臚館の乗る丘陵と荒津山との間には入江が形成され、樋井川が注いでいた。古代の港は荒津にあったとされるが、この入江の出口付近あるいは荒津山の裾あたりをさすものと思われる。また、鴻臚館の丘陵から東にも砂州が伸び、その南に入江を作っており、港に利用された可能性を考えうる。

発掘調査の結果、鴻臚館は南と北の施設からなり、東西に通る谷（堀）によって隔てられていたことが判明した。7世紀後半から11世紀前半までの遺構・遺物が検出されているが、後世の削平のため、第Ⅰ期（7世紀後半）から第Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）にかけての建物変遷しか確認できない。11世紀中頃以降は、鴻臚館に関わると推測される遺構は皆無である。この考古学的な状況が、1047年の「大宋商客宿房」放火犯人捕縛の史料に対応するとみれば、この放火による焼失以後、鴻臚館は再建されなかったものと考えられる。11世紀後半は、博多遺跡群で遺構・遺物が急増し、國際貿易の拠点が、鴻臚館から博多に移ったことが看取できる。

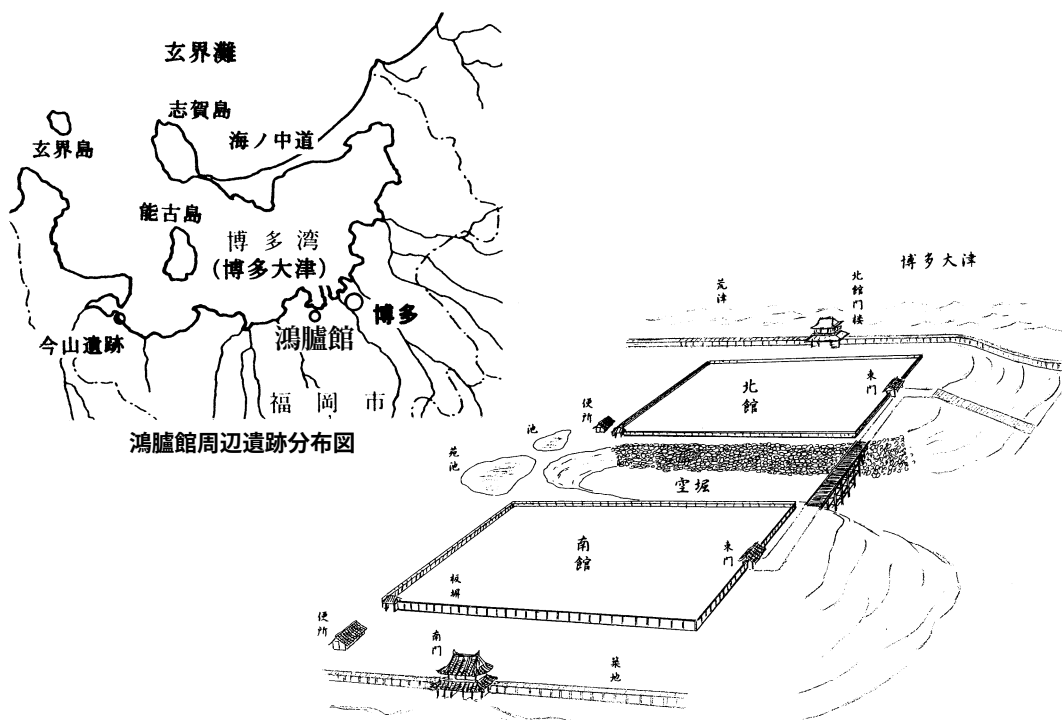
國際港湾としての鴻臚館の機能

鴻臚館には、大きく言って三つの機能があった。迎賓館的機能、入国管理機能、軍事的防衛機能である。外国使節や商人をもてなす場としては迎賓館的な性格がうかがわれるが、この間外国人は自由に館の外に出ることは許されなかったわけで、体よく監視下に置かれたことになる。中国・朝鮮からの来航に際して、その対応の決定権は朝廷にあった。来航者の審査を朝廷で行なう間、乗員と積荷は鴻臚館に収容されたわけだが、遣唐使や遣新羅使、入唐僧などの出国拠点ともなっており、出入国の管理施設として機能した。また、鴻臚館には、兵船・兵士・甲冑・馬が配備されていた。博多警固所は、鴻臚館に置かれたと考えられ、対外的な博多湾の防衛を担っていたのである。

周辺の関連遺跡

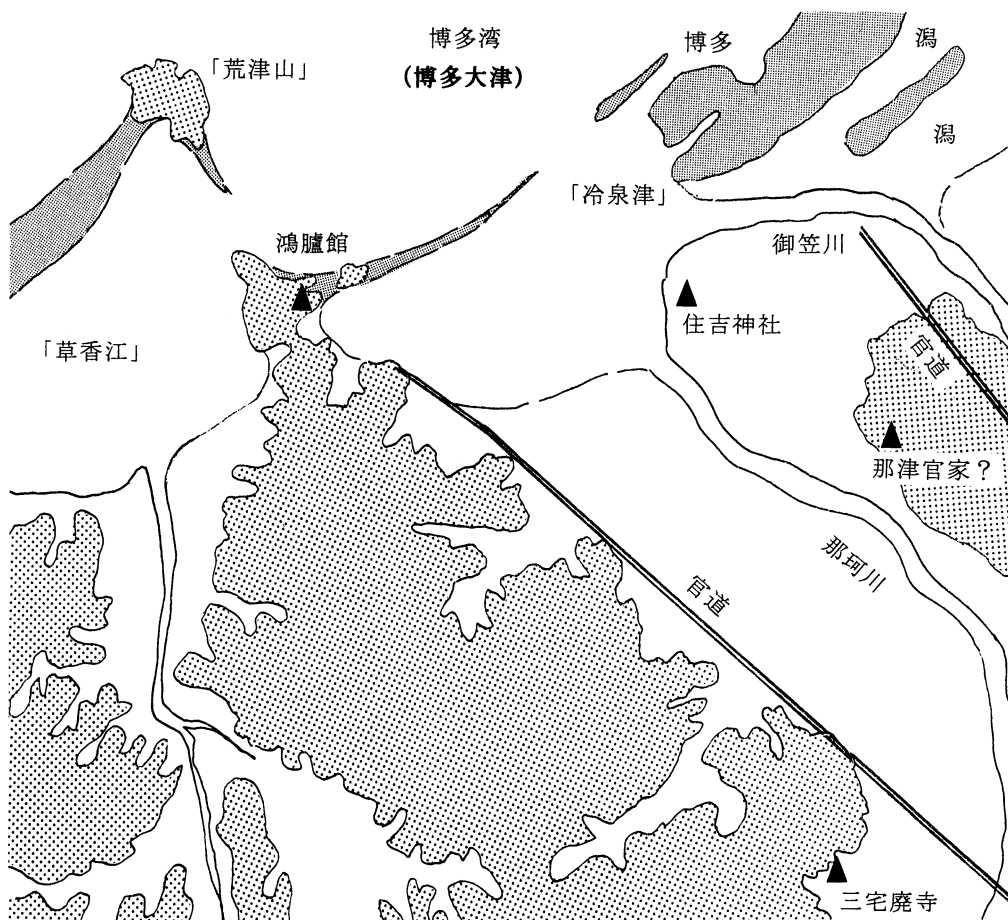
博多湾西側の今山遺跡第8次調査では、10世紀のドックと推測される遺構が調査された。

鴻臚館とこれに付随する荒津が外国船に関わるとすれば、国内に向けての港が併置されたとは考えがたい。一方、博多遺跡では史料上不明であるが、8世紀以降官衙が置かれた様相がみられ、博多が鴻臚館と対になる国内向け港湾であった可能性が考えられる。

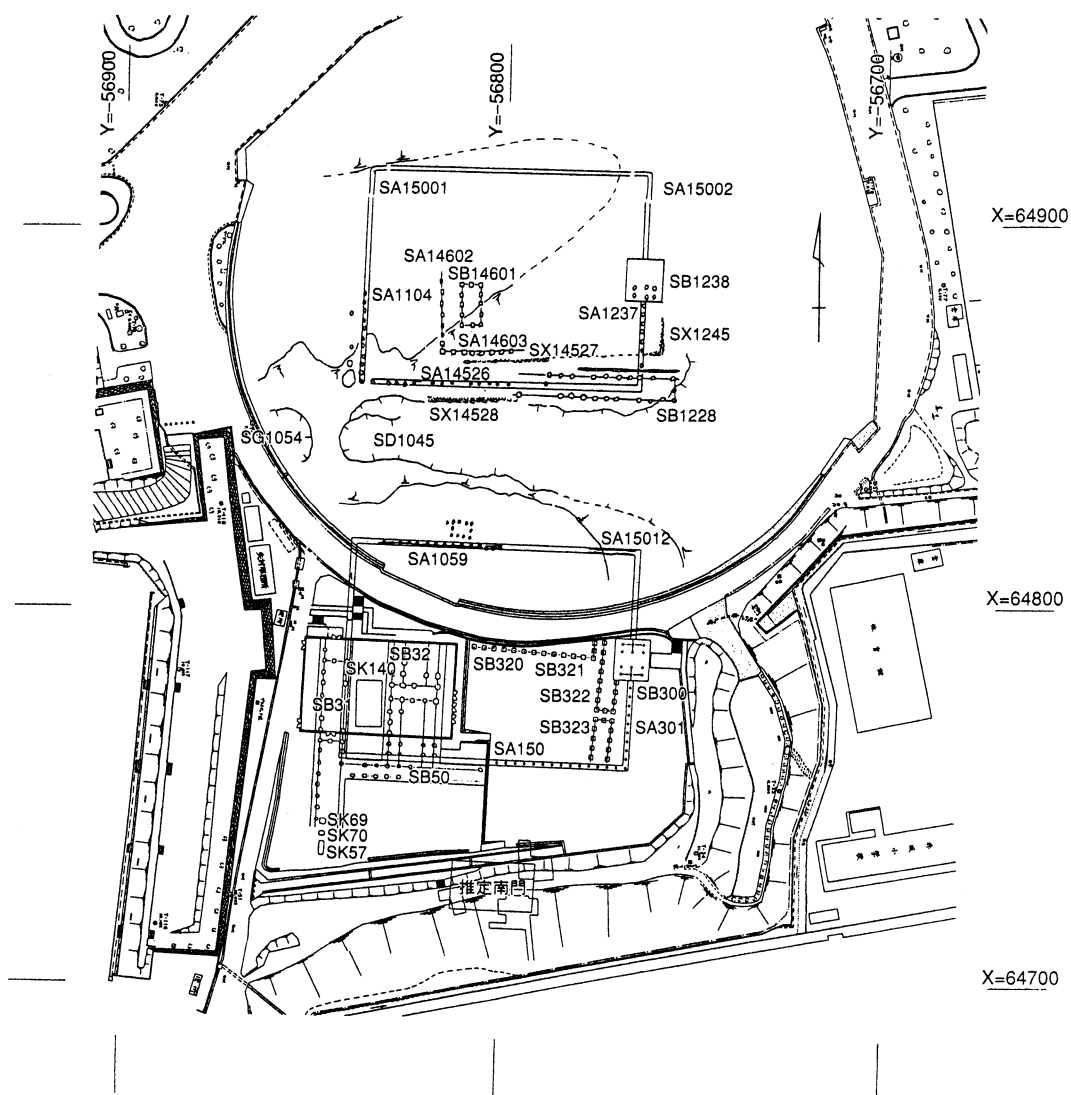


鴻臚館周辺遺跡分布図

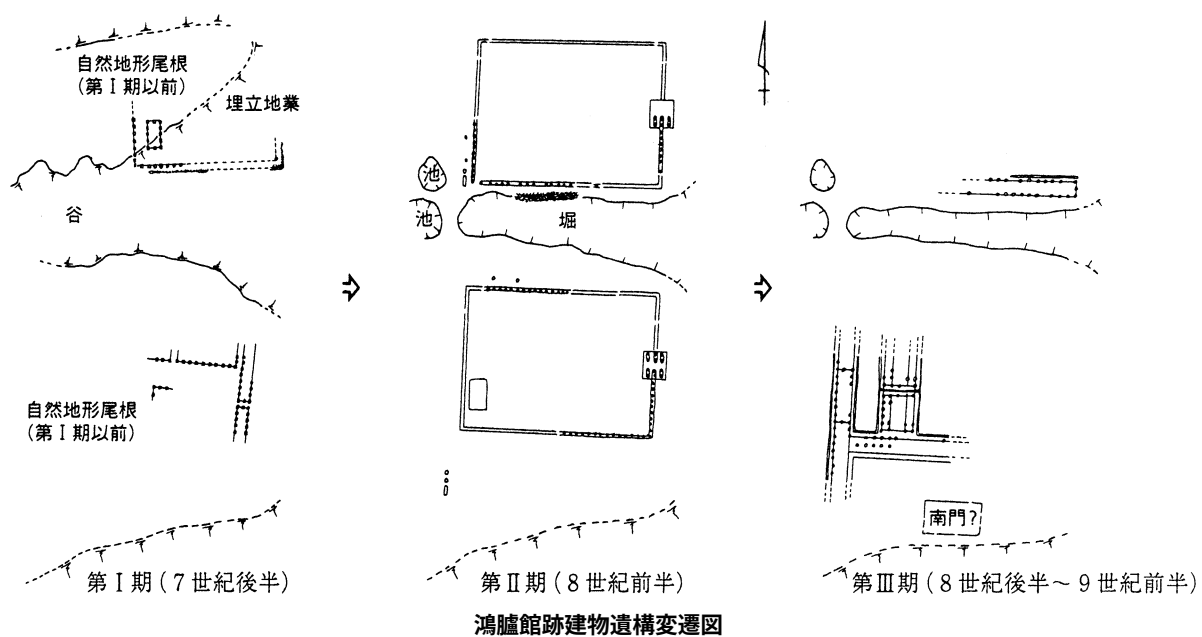
筑紫館（鴻臚館）調査から見た想定復原図



鴻臚館周辺旧地形推定復原図（明治33年地形図による）



鴻臚館跡検出遺構概念図 (S = 1/2,000)



古代出雲の水上交通と交流

森田 喜久男（島根県古代文化センター）

1 古代出雲における港の事例

日本海域において、潟湖が港湾施設として重要な役割を果たしたことは、すでに指摘されているところである。潟湖付近の河口に港湾施設が存在した可能性は、出雲においても指摘することができる。

『出雲国風土記』によれば、「佐太水海」から「入海」（宍道湖）にそそぐいわば水門や「神門水海」と「大海」（日本海）とを結ぶ水門としての「潮」が確認できる。この「潮」は、通常、「みなと」と訓読されているが、このような場所は、水上交通の要衝として機能した可能性があろう。

近年、前者の「潮」の近くに位置していた松江市石田遺跡から、「宿泊」や「宿」と書かれた墨書土器が出土している。また後者は、ほぼ現在の神戸川の河口部分に相当する場所であるが、付近には「湊社」が存在し、「湊原」の地名も残る。この「湊社」については、少なくとも中世前期の段階において、杵築大社の祭祀として、神在月に関わる神送りの神上神事が執行されていた。

『出雲国風土記』は、日本海沿岸における久毛等浦・質留比浦・手結浦・宇礼保浦の四つの浦について、船舶数など詳細な記述を行っており、古代の水軍基地としての意味を持たせて浦に関する記述を行っているのではないかと考えられているが、水上交通の要衝に関わる記述としては、河川や海岸部に存在した渡しについても注意する必要がある。

『出雲国風土記』を参照すると、出雲国庁から隠岐国へと向かう船が出発するルート上に「朝酌渡」と「隠岐渡」といった二つの渡しが存在したことが確認できる。このうち、「朝酌渡」は、出雲国庁から隠岐へと向かう陸上交通のルートと当時は「入海」という言葉で一括された宍道湖と中海沿岸に展開したであろう水上交通のルートの結節点に存在した。そこには、市も存在しており、様々な物資が集積される場所であった。

次に「隠岐渡」について、『出雲国風土記』には、隠岐国へと向かう船の出航する渡し場であり、津が存在していたことが明記されている。『日本三代実録』によれば、貞観3(861)年と貞観18(876)年に渤海使が隠岐国に到着し、出雲国島根郡へと移送されているが、その場合、当然、隠岐渡と朝酌渡の二つの渡しを利用した可能性が高い。

2 古代出雲における内水面の交通

山陰地方の場合、北陸地方と同様、内水面の交通が重要な役割を果たした可能性がある。

『出雲国風土記』に列挙されている秋鹿郡の神社の中に「大野津社」が見える。これは、松江市大野町の「大野津神社」に比定されるが、その立地場所は、宍道湖北岸、古代で言えば「入海」の沿岸に相当する。そこに「大野津」が存在していた可能性がある。既に述べた松江市石田遺跡の事例を踏まえるならば、「入海」沿岸にはいまだ文献では確認できないいくつかの「津」が存在した可能性がある。

また、出雲西部、斐伊川に目を点ざると、斐伊川が水上交通の動脈として重要な役割を果たしていた痕跡が残されている。

たとえば、出雲山間部には、船や海神に関わる神話や伝承がある。『出雲国風土記』には、生まれつき泣いてばかりで言葉を発することができないアジスキタカヒコを父神であるオオナムチが船に乗せて各地を巡行した後、ようやく三沢(仁多町三沢)の地において言葉を発する事が出来るようになった

た神話が載せられている。

また、大原郡海潮郷の地名の由来として、日本海に面する出雲郡の海から海水を押し上げ、親神を漂流させた海神ウノヂヒコの神話が記されている。

さらに、大原郡船岡山の地名の由来は、この地にアハキヘワナサヒコという神が船を曳いてきたことにあるのだという。

これらの神話が成立するための歴史的条件として、北陸地方と同様、山陰地方の出雲の地においても、内水面の交通が活発に展開していたということが指摘できるのではなかろうか。

このような観点から出雲の遺跡の状況を見直すならば、斐伊川下流域や斐伊川の支流である赤川の流域に、それぞれ西谷墳墓群や神原神社古墳などが立地しているのも、内水面の交通を意識したものと考えざるを得ない。

松江市東部に位置する朝酌川遺跡群の一つである原の前遺跡からは、古墳時代前期の石組護岸遺構や杭列が検出されている。

今後とも潟湖や河川流域の地名を丹念に調査し、これを遺跡と照合することで、内水面の交通の実態がさらに浮かび上がる可能性があるだろう。

近年、島根県において注目されているのは、出雲市東林木町に位置する青木遺跡である。この青木遺跡は、島根半島の北山山系の南裾に立地する弥生中期から近世初頭にかけての複合遺跡で、突線鈕段階の銅鐸飾耳、四隅突出型墳丘墓、墨書土器、木簡、九本柱の建物遺構、石敷井戸跡、神像・絵馬などが出土しているが、「入海」と「神門水海」とを共に意識した場所に立地している点が注目される。青木遺跡は、明らかに内水面の水上交通の要衝付近に位置している。そのような場所から出土した木簡の中に田の売買に関わる文書を抄出した「売田券」木簡があり、「船岡里」とか「船越田」など船に関わる地名が出てくる。それらの地名の所在地については、はっきりしないが、江戸時代の出雲の地誌である『雲陽誌』によれば、楯縫郡の東林木に「舟山」という地名が確認できるので、意外に近いところに存在していたのかも知れない。そこに港湾施設があった可能性は高い。

3 古代出雲における水上交通の展開と出雲国造

これまでの検討により、古代出雲においても北陸地方と同様に潟湖や河川など内水面の交通が活発に展開していたことが明らかとなった。このような地域社会における内水面の交通の存在形態を考える際に、看過できないのが出雲国造である。

先に、出雲における港の事例として「朝酌渡」を紹介したが、『出雲国風土記』によれば、渡しや市が存在していた朝酌郷の人々は、熊野大神に神饌を貢納する役割を担っていた。

この熊野大神は、「所造天下大神」である大穴持命と並んで出雲国造が奉祭する重要な神であり、そのような神と深い関わりを持っている朝酌郷は、同時に出雲国造にとって重要な場所であったことが知られる。とすれば、「朝酌渡」は、本来、出雲国造によって管理された渡であった可能性もあろう。

同様の事例は、意宇郡の忌部神戸においても見られる。忌部神戸は、石見へと向かう「正西道」と奥出雲の大原郡へと向かう「正南道」との分岐点であり、水陸交通の要衝でもあったが、ここは、出雲国造の神賀詞奏上の際に用いられる「御祈玉」（御富岐玉）を製作する場所として重視されていた。

この二つの事例は、いずれも『出雲国風土記』に記されている。このことを踏まえると、出雲国造による水陸交通の要衝、結節点の支配は、まさに奈良時代において行われていたものであると言える。

一般的には、律令国家が成立する過程において、ヤマト王権の段階で各地に存在していた国造のク

ニグニは、国評制や国郡制といった形で再編される。それはもちろん出雲の場合も例外ではない。出雲国造は、律令制下にあっても意宇郡の大領にとどまった。しかし、同時に出雲国造は言うまでもないことであるが、杵築大社や出雲国内の神事を執行する存在でもあった。

それ故に、出雲の各地に拠点となる場所が存在したと考えられる。このように出雲における内水面の交通の存在形態を考えていく時に、出雲国造の存在は無視できない。

しかしながら、最初から、古代出雲の河川の多くが、出雲国造によって掌握されていたかどうかについては検討の余地がある。少なくとも、6世紀中頃の段階においては、出雲はまだ一つに統一されておらず、出雲国造出雲臣の祖である淤宇宿禰が出雲東部を本拠地とするのに対し、出雲西部には神門臣が支配するといった状態が続いていた。また、奥出雲にあっても、大原郡の郡司を歴任した額田部臣や勝部臣など独自の勢力が存在したと考えられる。

このうち、すでに触れた出雲西部の「神門水海」から日本海へと通ずる「潮」については、もとは出雲西部の神門臣が掌握していた可能性が高い。

神門臣は、ここを拠点として、九州地方や北陸地方と交流を展開していたと考えられる。古代の出雲において、神門水海や斐伊川など出雲西部の内水面の交通を掌握していたのは、神門臣であった。神門臣は、その水上交通を利用して九州や北陸との交流を行っていた。これに対し、ヤマト王権は瀬戸内海沿岸の吉備地方から山越えて出雲へ侵入し、出雲山間部の額田部臣や出雲東部の淤宇宿禰と手を結んで、神門臣を打倒し、出雲西部の水上交通を奪取した。ヤマト王権と手を結ぶ形で出雲を統一した出雲国造は、律令制下にあっても「入海」や「神門水海」、斐伊川流域の港の管理を続けた。

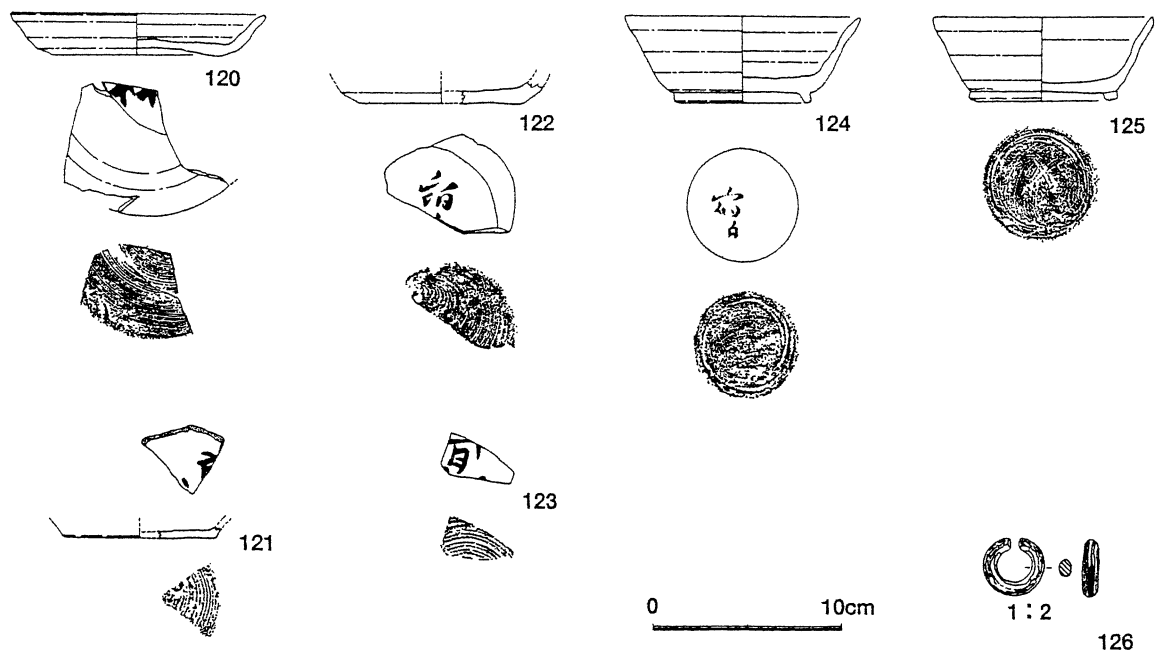
『出雲国風土記』において、水上交通の要衝に出雲国造に関連した記述が残されている背後に、このような歴史的事実を想定しておきたいと考える。

そのことに関連して、最後に触れて起きたいのは、『古事記』における国譲り神話である。『古事記』の国譲り神話によれば、高天原の使者に対して、「天御饗」として、鱈を料理した神としてクシヤタマが登場するが、この神について『古事記』は「水戸神之孫」とであると記している。

国譲り神話に登場する神が、瀧と海とを結ぶ水門であるミナトの神であることは何を意味するのであろうか。それは、ミナトが、交通の結節点、境界領域であり、そこにあらゆるモノが集まる場所と認識されたことによるのであろう。

出雲の「神門水海」の河口部のミナトの場合、それは北陸にも九州にも、さらには、「国引詞章」を想起するなら、朝鮮半島（韓半島）へも通ずる重要な空間として、理念的にも実態的にも重視されたのではなかろうか。故に、ヤマト王権は、この地を国譲りの舞台として設定せざるを得なかったのである。この地に杵築大社も造営せざるを得なかったのも同様の理由による。杵築大社の造営とは、まさに瀧湖を舞台とした国譲り神話の具現化であった。

ここに、地域社会だけではなく、ヤマト王権にとって古代出雲の瀧湖のミナトが重要な場所であると認識されていたことが判明する。



石田遺跡出土墨書土器

出典：松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『石田遺跡発掘調査報告書』（2004年）

古代敦賀津と松原客館について

川村 俊彦（敦賀市教育委員会）

はじめに

越前国の南端に位置する敦賀は、近江を介して畿内方面と交通する海陸の要衝であった。古代敦賀津と対外交流を考えると、看過できない課題として、渤海使節を迎えた松原客館がある。ここでは、この松原客館をめぐる研究の現状と課題について紹介しておきたい。

創設時期と停廃時期

松原客館の成立については、以下のことからおよそ9世紀前半頃ではないかと推定される。

渤海船は、8世紀半ば、頻繁に日本海側諸地域に到着したため、延暦23年（804）、能登客院造営の勅が出されている。また越前国では、弘仁6年（815）、蕃客の乗用に供するため大船の徴発が発令されている。なお、これに先立って敦賀津の整備を窺わせるものとして、天平神護2年（766）、近江国の近郡から稲穀5万斛を松原倉に運び入れ貯蓄されたことが挙げられる。

松原客館の終焉については定かではない。延喜19年（919）、若狭国丹生浦に座礁した渤海使一行105人を越前国松原駅館に移送している。また、長徳元年（995）9月6日、若狭国に到着した宋の商人・朱仁聰ら一行70余人を定め、越前国に移したとあり、康平3年（1060）にも林表、候改、承暦4年（1080）に孫吉忠等、宋商の来津が記録されている。駅館という表記から駅家との関連が見られるし、渤海の滅んだ後も通商施設として存続していたらしいことが解る。

松原客館の所在地について

松原客館の候補地については諸説あり、未だ決定打を見ない。これまで数箇所の比定地が提起されており、主なものを列挙すれば、①別宮神社附近（櫛川遺跡）一帯、②松原遺跡、③西福寺、④来迎寺及び永建寺附近一帯、⑤旧神明社所在地、⑥気比神宮附近、⑦中遺跡及びその周辺、等が挙げられる。（図1参照）

第一次越前国府敦賀説

近年、敦賀津をめぐる論考として水野和雄氏による第一次越前国府敦賀説がある。これは、奈良時代から平安時代前半までの越前国府を現在の敦賀市長沢附近に想定し、したがって敦賀津を国府津と位置付け、それを基軸として愛発関、敦賀郡衙、松原駅家、松原客館等を、相関的に俯瞰しようと試みた論考である。水野説の当否については今後、大いに検討を加えられるべきであろう。

おわりに

敦賀市においては、当地を日本海諸地域と畿内との通交の要衝であるとしながら、古代敦賀津をめぐる研究は遅滞していると反省せざるを得ない。歴史学や歴史地理学の成果に対して、未だ発掘調査例が乏しく、考古学から提起できる資料が限られていることが一因であるが、調査を進めるべく努めていきたいと考えており、今後の調査成果の蓄積を待たれたい。

参考文献

- 1 鈴木靖民ほか1994『松原客館の謎にせまる—古代敦賀と東アジア—』気比史学会編
- 2 水野和雄1999「越前敦賀の復権—越前国府・愛発関・敦賀津・郡衙・松原駅・松原客館等の官衙」『紀要』第14号
敦賀市立博物館

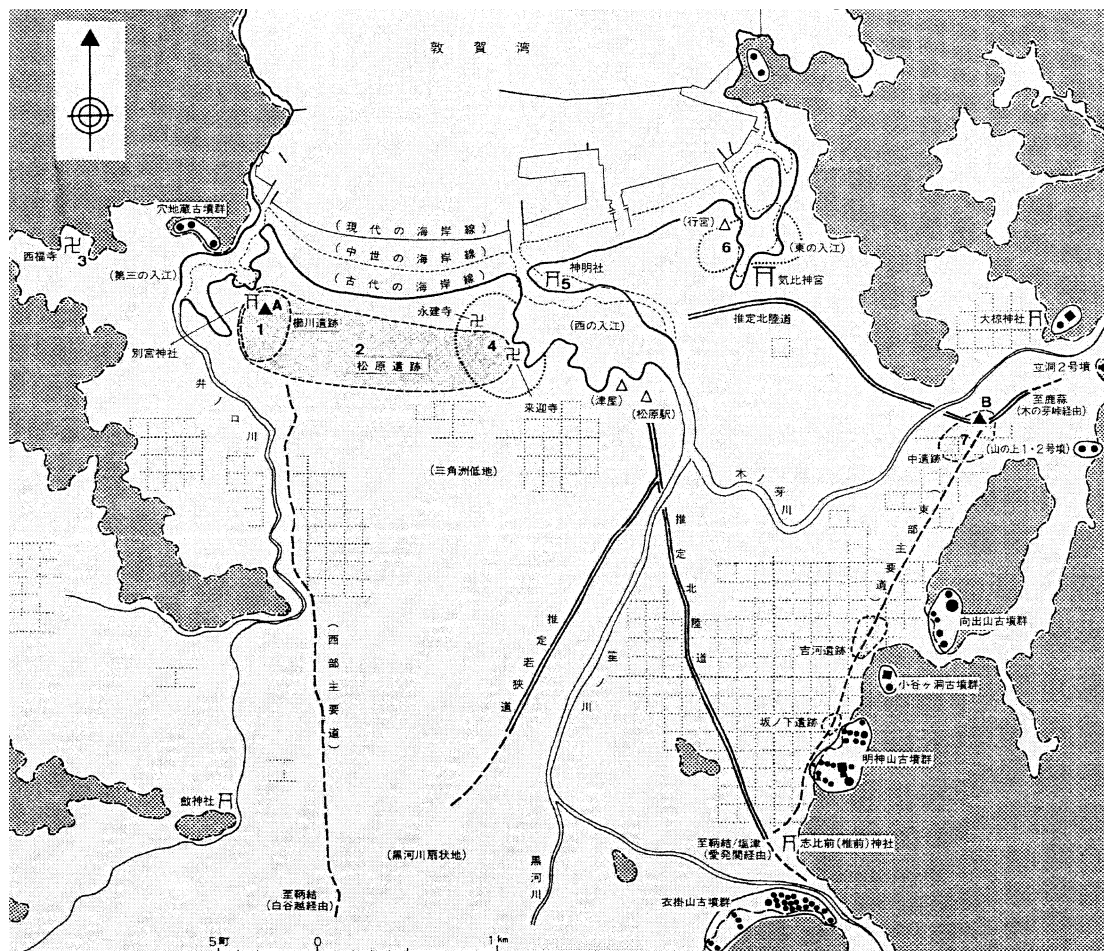


図1 松原客館推定候補地関係図（文献1より）

図1 凡例

- 1 別宮神社附近一帯 平安時代の祭祀遺跡を中心とする遺跡群。氣比神宮の主宰する焚火儀礼の祭祀遺跡と見られる。
- 2 松原遺跡 古墳時代から平安時代に亘る複合遺跡群。製塩遺跡を主とするが、範囲内の各地で皇朝銭や須恵器が出土。
- 3 西福寺 縁起によれば、開創のとき土中より和同開珎133枚及び銀の匙・鈴等が出土したと伝える。
- 4 来迎寺及び永建寺附近一帯 西の入江に近い浜堤上に当る。
- 5 神明社旧所在地 近世に松原客館跡地であると伝承される。
- 6 氣比神宮附近一帯 東の入江に臨み、氣比社を管掌するにあたっての最適地である。
- 7 中遺跡及びその周辺 平安時代の石帯を含む多量の遺物が出土しており、官衙の所在が想定される。

△古代施設推定地（南出真助氏推定による）

▲平安時代主要遺跡

A 櫛川祭祀遺跡 B 中遺跡

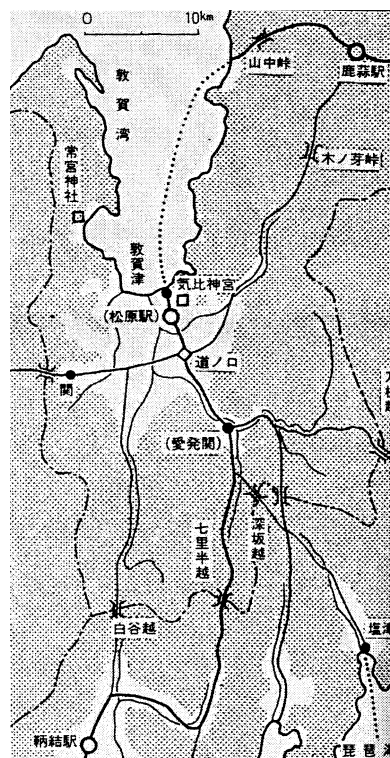


図2 近江越前国境の交通路（文献1より）

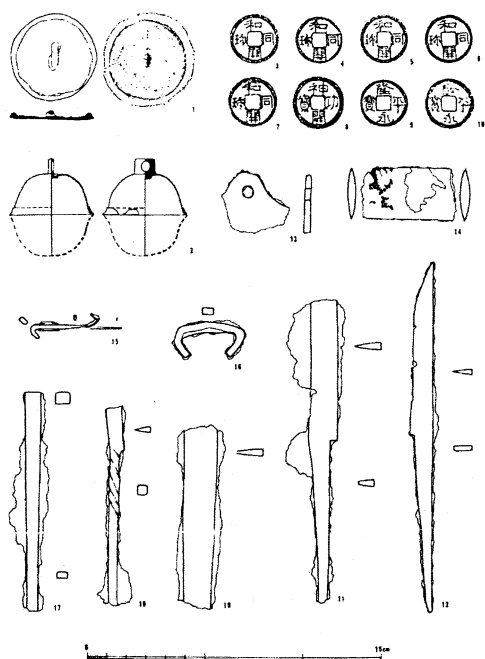
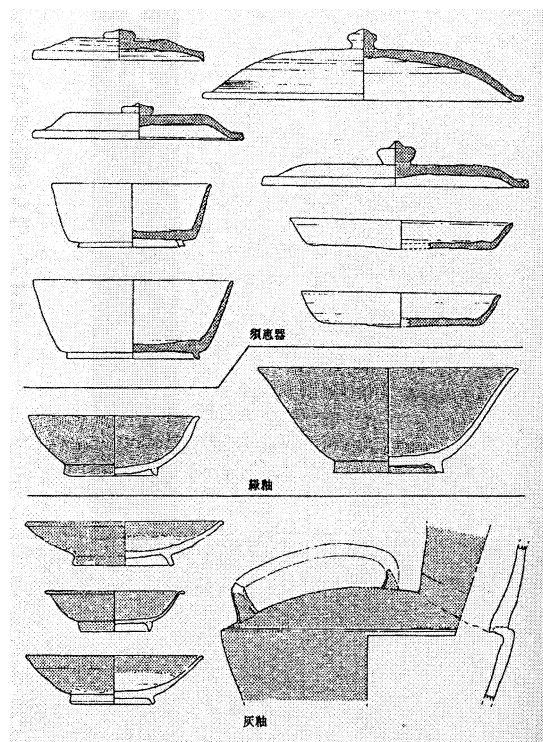


図18 別宮神社前地点出土遺物実測図(1:銅鏡、2:銅鈴、3~10:銅銭、11:刀子、12~18:その他)
(※福井県埋蔵文化財調査センター作成原図を使用)

(『松原遺跡』敦賀市教育委員会 1989 より)

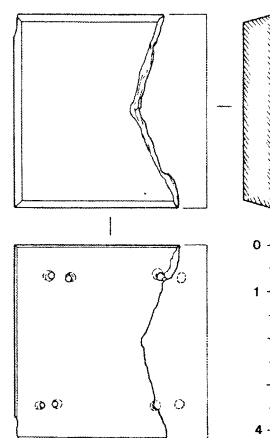
櫛川遺跡(別宮神社前)出土遺物



中遺跡出土遺物



気比神社



中遺跡出土石帯



中遺跡遠望



別宮神社

金沢における水上交通遺跡の調査

出越 茂和（金沢市埋蔵文化財センター）

旧地形の復元

潟湖に関する情報には、加賀藩が作成した国・郡図がある。絵図には主要な潟の名前と大きさ・深さが記され、フコと呼ばれる入江状の浅瀬も描かれているが、幕末までに自然堆積や新田開発で規模を縮小するか消滅している。絵図の史料価値は、近代までに改変された地形情報を窺い知ることができる点にある。明治42年には初めて正確な地図が作成される。

金沢西部では海拔1m前後まで遺跡が進出し、堆積土は厚くない。これに対し、河北潟沿岸の平野では海拔約2.5m以下には遺跡の進出が見られない。ただ地表が海拔2.5m以上でも遺構面は海拔1m前後の事例も見られることから、潟沿岸部の堆積が予想以上に多いことも考えられる。

気候の変動と遺跡の盛衰

金沢西部の遺跡を見ると遺跡数に増減が認められる。第1のピークは弥生時代終末から古墳時代前期、第2は奈良時代から平安時代前期であり、両者の間には古墳寒冷期が存在したと予想される。金沢西部における古代の開発は、西暦730年前後から本格化して900年前後に衰退する。港湾関連遺跡の動向も同様である。

古代港湾関連遺跡の調査

金沢市が調査した遺跡を2例紹介する。金石本町遺跡は犀川河口付近に位置し、7世紀から活動を再開して8世紀代にピークを持ち、9世紀末までに衰退・消滅する。地域首長色の濃い上位遺跡で、海上と河川交通の結節点に地域首長が進出したものと推定される。奈良時代には東に隣接する郡津に比定される畝田・寺中遺跡と共に、港湾関連遺跡に比定されている。しかし、平安時代に入ると、畝田ナベタ遺跡や国（府）津に比定される戸水C遺跡など河北潟水運の基点に位置する大野川左岸諸遺跡の台頭により、その比重は相対的に低下したと予想される。

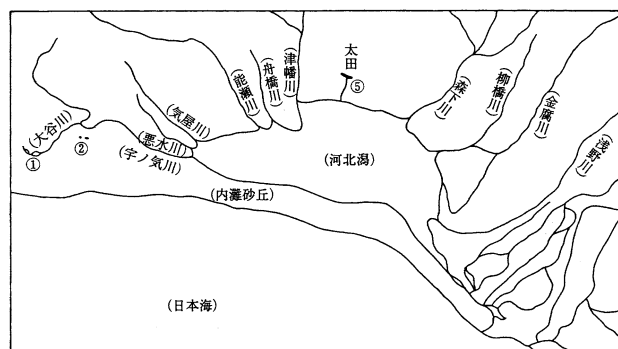
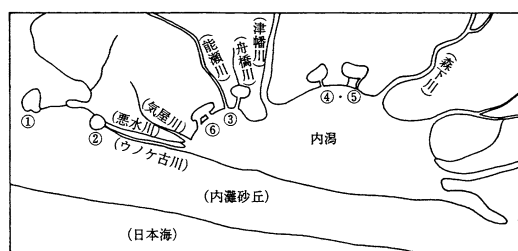
戸水大西遺跡は8世紀後半から9世紀代に営まれ、8世紀末～9世紀初頭に方半町規模の政庁的プランの東地区と居宅風の西地区が成立する。墨書土器は、「中家」、「宿家」、「西家」等の施設名や人名等386点を数え、木簡には弘仁十三年（822）の紀年木簡や条里木簡など11点が出土している。中庄に係る郡司級氏族が、港湾諸遺跡の隣接する地理的環境に設けた「津宅」と考えられる。

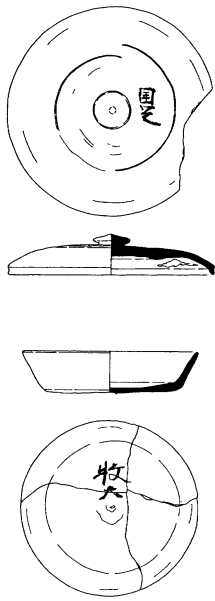
津幡町加茂遺跡は北陸道が著名であるが、河北潟旧舟橋フコに注ぐと思われる大溝に注目したい。大溝は7世紀初頭に掘削された後、8世紀前半に掘り直され、9世紀後半まで機能している。掘立柱建物群は大溝沿いに展開しており、特に倉庫が目立つことから津としての機能を考えたい。

陸路と津

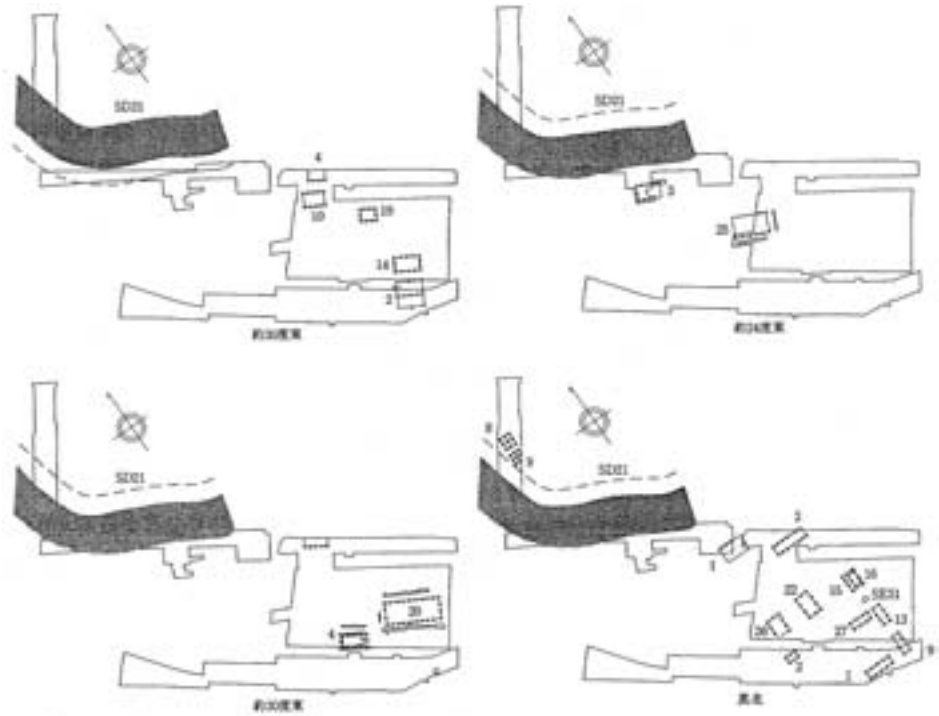
加賀の諸駅の特徴として、水上交通との結節点に設けられている。駅以外にも道と河川の結節点が存在し、物資集積場や市の存在の可能性を指摘できる。

大野湊から越中を目指すには津幡津を、能登には旧宇気フコが有利であり、前者は越中口の後者は能登口の拠点である。河北潟を媒介とした水上交通ネットワークの形成は7世紀末には開始されたと推定されるが、大きく展開するのは9世紀に入ってからである。

[illegible]

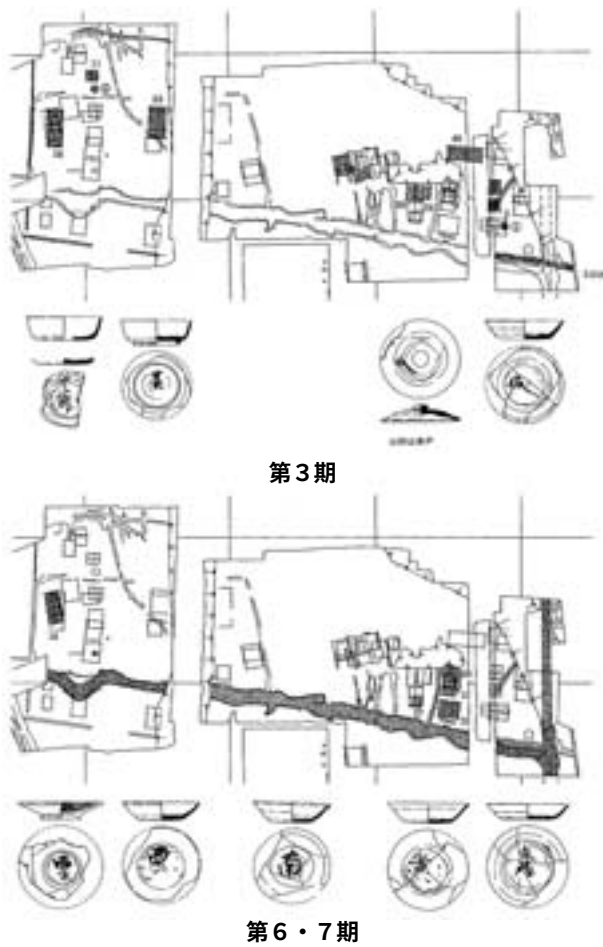


第6図 金石本町遺跡
出土墨書土器

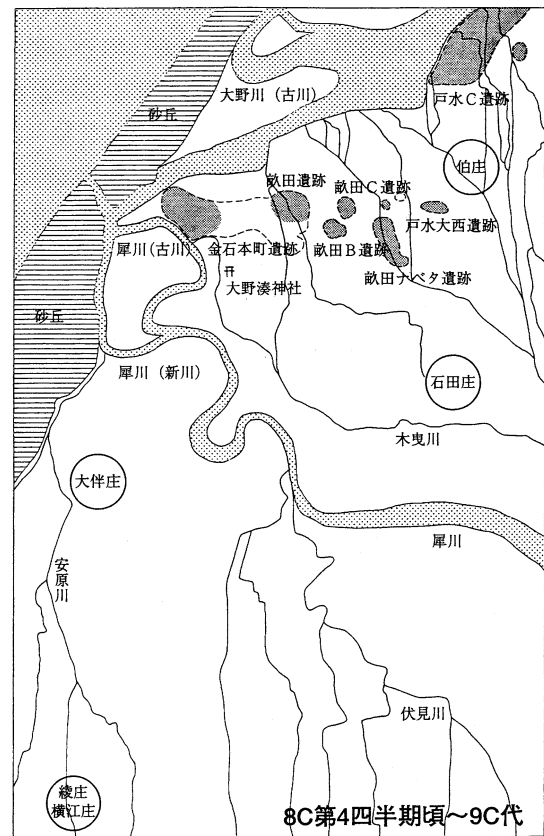


※一部筆者改変

第7図 金石本町遺跡遺構変遷図



第8図 戸水大西遺跡遺構変遷図



第9図 港湾関連遺跡位置図

古代日本海域の港と交流 ― 北陸（石川県）の場合 ―

和田 龍介（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1 はじめに 文献史料中には、加賀（旧越前）国・能登（旧越中）国でいくつかの津湊が記載されているが、遺跡との一致を見ている例はほぼないと言ってよい。それは津湊関連遺跡の調査・抽出の困難さの一面を映しているわけだが、今回の報告であげる、金沢市臨海部に展開する津湊関連遺跡の事例を検討することで、津湊の動態・発展の一例として今後の調査に資することができればと考えている。

2 津湊関連遺跡の調査事例 何をもって津湊関連遺跡と認定するか、の原則が確立されていないのが現状であり、特に港湾管理施設のような、他の官衙関連施設と性格が重なるような遺跡に関しては津湊関連遺跡と考えられていない例が多いのではないかと考えられる。津湊関連遺跡の指標となるものの抽出が必要である。

3 県内の津湊関連遺跡の事例 金沢市戸水C遺跡は、大野川河口に位置する9世紀中頃～後半に盛期をもつ遺跡であり、加賀立国に伴い整備された、加賀国津ないし加賀国府津と考えられている。官衙的配置を有する建物群・官衙関連遺跡に通有の遺物（木簡、施釉陶器、硯等）・津の存在を示唆する文字資料（「津」墨書土器）・周辺に宿家・庄園・祭場遺跡が存在するなど、よく津湊としての特徴を備えており、津湊遺跡の指標となりうる遺跡・遺跡群として評価できる遺跡である。

金沢市畝田・寺中遺跡は犀川河口に位置し、8世紀初頭～後半に盛期をもち、西側に同時期の遺跡である金石本町遺跡が存在する。多数の「津」墨書土器・津湊を管轄する施設を示唆する「津司」墨書土器の出土、郡符木簡2点を含む、11点の木簡などから、8世紀代の加賀郡津として整備・発展したものと考えられる。

4 津湊の移動 7世紀後半～8世紀前半代に、犀川河口の金石本町遺跡、畝田・寺中遺跡が加賀郡津として順調に発展を遂げるが、9世紀中頃、特に加賀立国（823年）以降になると戸水C遺跡が盛期を迎える。これに呼応するかのように畝田・寺中遺跡は中心が東側に移動（庄園的な様相？、畝田B遺跡と関連するか？）し、金石本町遺跡は継続するものの規模が縮小するという動態を見せている。これは北加賀地域の物流の拠点が犀川から大野川（河北潟）に移ったことを示しており、2つの可能性が指摘できる。

①河北潟を取り込んだ、新しい北加賀エリアの内水面交通の発展・整備に伴い、より河北潟へのアクセスが至便な戸水地域が開発された。

②自然現象（犀川河口部の地形変化）により、これまでの郡津が使用できなくなった→新たに大野川河口部に津湊を新設。

参考文献 『北加賀の古代遺跡』2004（石川考古学研究会々誌47号）

8世紀後半～9世紀初頭の建物

「小殿」

「津」

「官」

皇朝錢埋納

漆紙文書

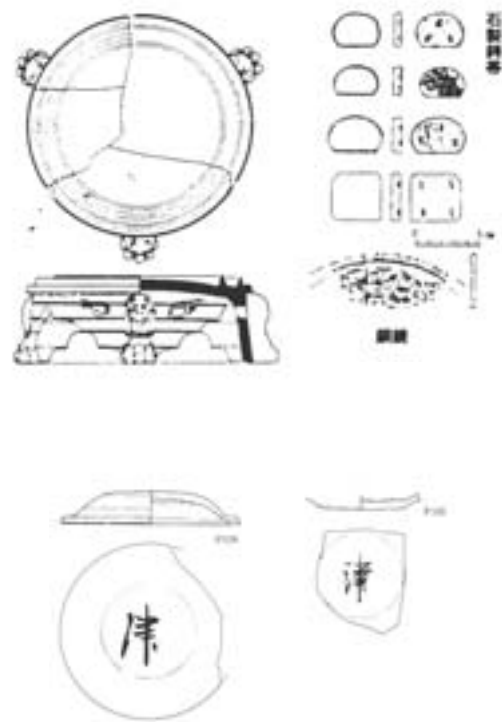
0 200m

畝田・寺中遺跡

「津」墨書土器
1号木簡

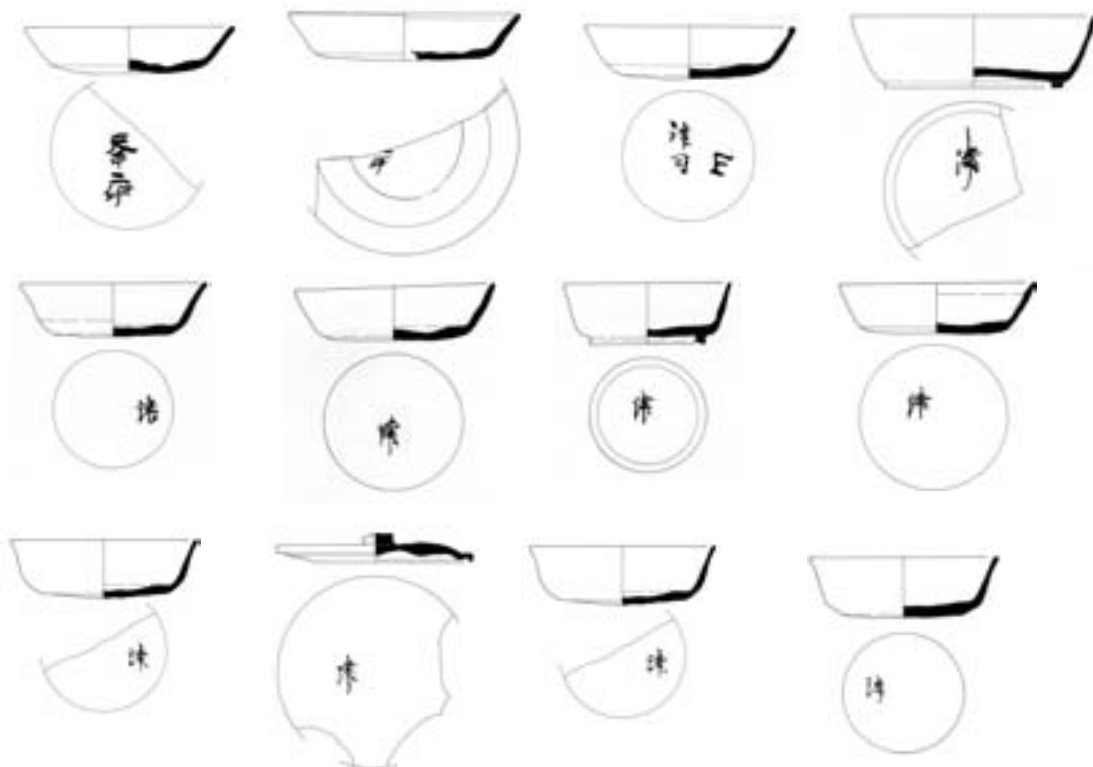
3~11号木簡
「津」「天平二年」
「宮家」墨書土器

「津司」「天平二年」
「語」「語成人」
「荒田家」墨書土器

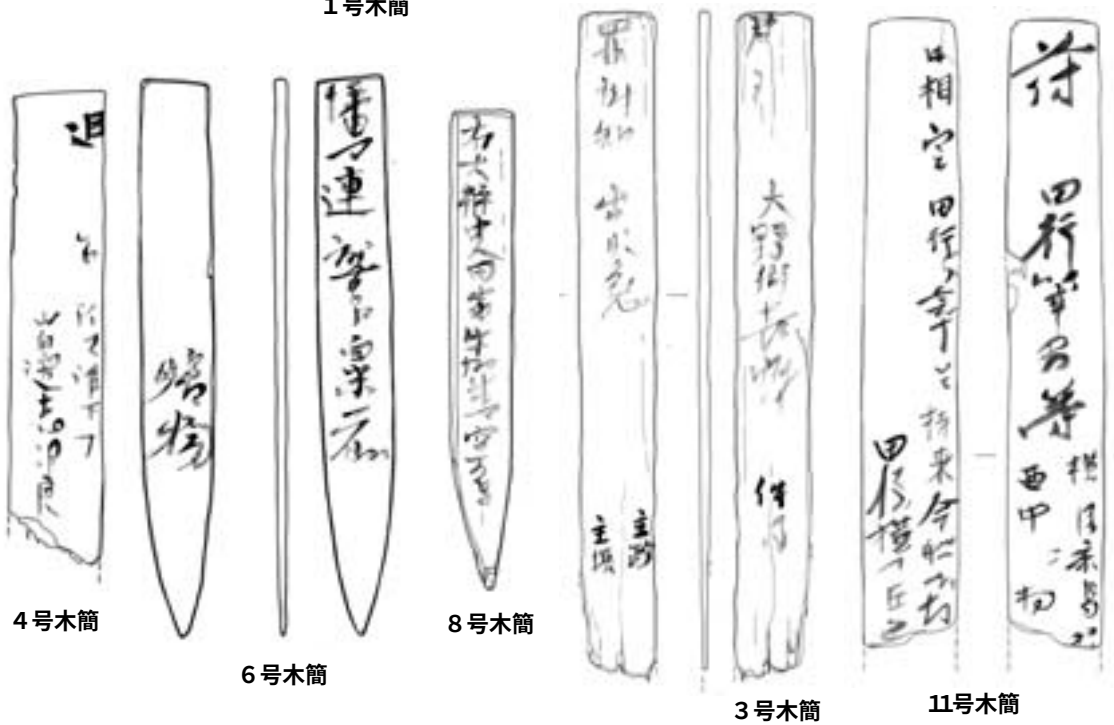


戸水C遺跡出土品

畝田・寺中遺跡出土品



1号木簡



内陸の水上交通にかかる考古学的一視点

— 主に船着場遺構への認識をめぐって —

根津 明義（高岡市教育委員会）

水上交通にかかる諸問題

交通及び交通路については、概して歴史的様相と付随して形成されていく一方で、周辺の自然環境などとも表裏をなす傾向にある。富山平野においても、網目状に水利が交錯する自然環境から水上交通の果たす役割も少なくなかったとする見解が以前より提起されてきたが⁽¹⁾、近年では、同平野の内陸に位置する高岡市中保 B 遺跡から船着場遺構や倉庫群をはじめとする遺構群が検出され、上記の推察は物証をもって論ずることが可能となっている⁽²⁾。

周辺地域の歴史的様相を解く糸口は、水上交通を考察の基軸とした場合においても多方面にわたり存在する可能性がある⁽³⁾。残念ながら、この分野をめぐっては報告例が少ないなどの障壁も存在する現状にあるが、水上交通への検討を一つの研究分野として確立せんことを近・未来的な目標にするならば、まずは第一段階として船着場の把握が急務であると考え次第である。

試論：船着場遺構の把握にかかる指標—内陸のそれを中心に—

紙枚の関係により詳細を述べることは不可能であるが、以下では遺跡から検出された（あるいは既に調査報告書等に記録保存されている）遺構を「船着場」と認識する際の指標を筆者なりに試論として掲げておくこととしたい。

- ①. 水辺と接し、一部なりとも何らかの手が加えられた遺構であること。
- ②. 荷物の積みおろしに使用するための平坦面が存在すること。
- ③. 護岸施設又はその痕跡が伴うこと。

事例： 周防国衛「船所」⁽⁴⁾・長崎県原の辻遺跡⁽⁵⁾・岡山県上東遺跡⁽⁶⁾など

- ④. 船を停泊ないし係留させるための舟杭などの施設が備わっていること。

事例： 周防国衛「船所」⁽⁴⁾・原の前遺跡⁽⁷⁾・石川県加茂遺跡⁽⁸⁾？

- ⑤. 乗降場と考える硬化面や、これに該当する施設が伴うこと。

事例： 富山県中保 B 遺跡⁽²⁾など

- ⑥. 船溜まり又はこれに代わるものが伴うこと。

事例： 富山県梅原安丸 V 遺跡⁽⁹⁾・中保 B 遺跡⁽²⁾

※. 石川県上荒屋遺跡⁽¹⁰⁾や新潟県門新遺跡⁽¹¹⁾のような簡素な構造を呈する船着場については、遺構それ自体が船溜まりの機能を兼ねる可能性があると思われる。

- ⑦. 船又はその道具類が検出されること。

事例： 高知県船戸遺跡における石碇の検出など⁽¹²⁾。

- ⑧. 船又は船道具を収蔵する施設や、あるいは船を修繕するドックなどが近隣に所在すること。

事例： 福岡県今山遺跡⁽¹³⁾？・兵庫県兵庫津遺跡⁽¹⁴⁾？

- ⑨. 水上交通の存在を示す文字史料の検出や、これと関連する字名などが周辺に存在すること。

事例： 石川県金石本町遺跡⁽¹⁵⁾・畝田寺中遺跡・畝田ナベタ遺跡・戸水 C 遺跡⁽¹⁶⁾・

中保 B 遺跡⁽²⁾・新潟県蔵ノ坪遺跡⁽¹⁷⁾など

- ⑩. 船の航路と推定しうる水路が併存すること。

事例： 富山県小杉丸山遺跡及び御亭角遺跡⁽¹⁸⁾・中保 B 遺跡⁽²⁾など

- ⑪. 倉庫群や道路遺構、その他木簡をはじめとする文字史料など、船着場との関連が考えられる検出物や蓋然性との総合的機能論から、当該遺構を船着場と判断することができること。

事例： 門新遺跡⁽¹¹⁾・中保 B 遺跡⁽²⁾・梅原安丸 V 遺跡⁽⁹⁾など

関連施設との総合的検討

水上交通の介在を考古学に把握するにあたっては、船着場遺構を検出することが最も有効な手段の一つになると思われる。しかしながら、その関連諸施設の把握やこれらを含めた総合的検討も、周辺の歴史的様相を検討するための資料になる可能性があると思われる。

①. 簡易的な構造物の並存

⇒ 現代にも類例がみられるように、船又は船道具を収蔵する施設となる可能性がある。

②. 水路の規模

⇒ 寄港する船の規模がある程度反映される可能性がある。

③. 倉庫類の構造

⇒ 郡衙正倉に比定されるような総柱構造の掘立柱建物を主とする倉庫群と、中保 B 遺跡のように側柱構造のそれを主とするものとの対比。またはこれと関連し、収蔵物の種類や数量からも当該遺跡の性格を把握するための指標となる可能性があると思われる。

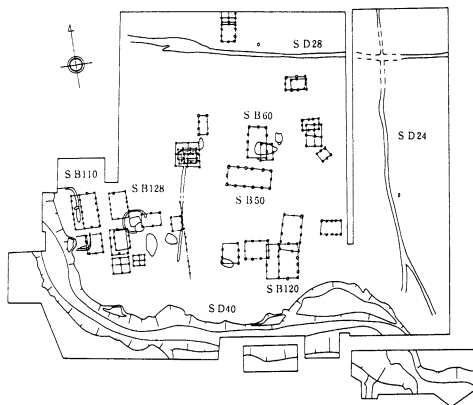
まとめにかえて

歴史をひもとく作業において船着場を見逃すということは、同時にその背後にある当該地の歴史的様相の一端を見逃すことに繋がってしまう。水上交通から派生する研究課題は多岐に及ぶであろうが、現状においては船着場の把握という根本的な課題を克服する段階にあると考える次第である。

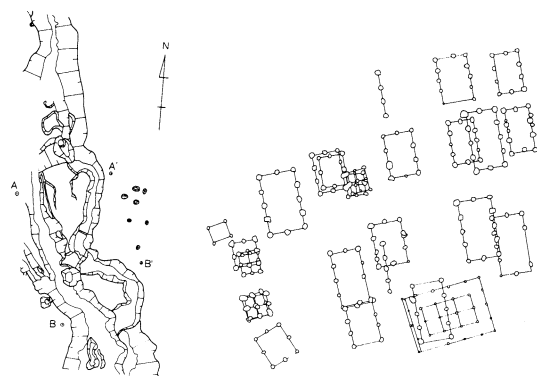
なお、本稿においては内陸の水上交通にかかる検討を中心に行なったが、海洋を対象とするそれについては、若干内容を異にするため、別の機会において論ずることとしたい。

【参考文献】

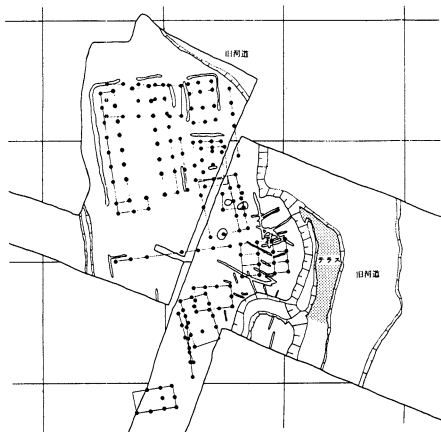
- (1) 高岡市『たかおか—歴史との出会い—』1991他
- (2) 高岡市教育委員会『中保 B 遺跡調査報告』2002
- (3) 根津明義「古代における物資の輸送の一形態」『平成16年度環日本海交流史集会 古代日本海域の港と交流 発表要旨・資料集』(財)石川県埋蔵文化財センター2004
- (4) 防府市教育委員会『周防の国府跡1970～80年代の発掘調査成果から』1990
- (5) 安楽勉「倭人伝の道対馬・一支国の港と道」『考古学ジャーナル434』1998他
- (6) 岡山県教育委員会『下庄遺跡・上東遺跡』2001
- (7) 島根県教育委員会『原の前遺跡』1995
- (8) 石川県埋蔵文化財センター・三浦純夫氏より詳細をご教示戴いた。
- (9) 福光町教育委員会『梅原安丸遺跡群Ⅲ』1997
- (10) 金沢市埋蔵文化財センター『上荒屋遺跡』1999他
- (11) 和島村教育委員会『門新遺跡』1995
- (12) 松田直則「四万十川流域の中世河津」『中世都市研究3 津・泊・宿』1996
- (13) 大庭康時「古代日本海域の港と交流九州—鴻臚館と古代の港湾—」『平成16年度環日本海交流史集会 古代日本海域の港と交流 発表要旨・資料集』(財)石川県埋蔵文化財センター2004
- (14) 神戸市教育委員会・橋詰清孝氏より詳細をご教示戴いた。
- (15) 石川県埋蔵文化財センター『金石本町遺跡』1997
- (16) 和田龍介「金沢市畝田ナベタ遺跡、畝田・寺中遺跡他」『平成13年度発掘速報会資料よみがえる石川の遺跡』2002他
- (17) 新潟県教育委員会他『一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』2002
- (18) 西井龍儀「御亭角遺跡出土の瓦について—御亭角廃寺を中心に—」『富山県小杉町・大門町小杉流通団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会1985



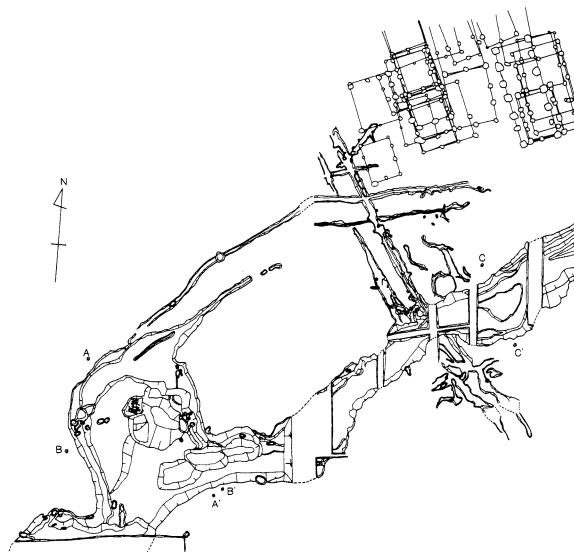
上荒屋遺跡・概略遺構図
参考文献 (10) より転載



中保 B 遺跡・調査区東側遺構群
参考文献 (2) より一部抜粋



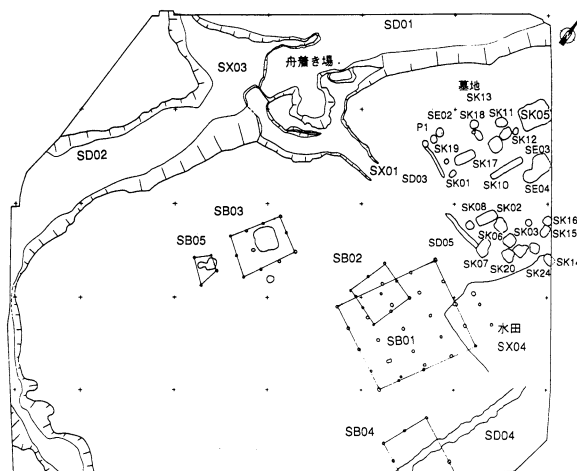
門新遺跡・概略遺構図
参考文献 (11) より転載



中保 B 遺跡・調査区北側遺構群
参考文献 (2) より一部抜粋



金石本町遺跡・調査区全体図 参考文献 (15) より転載



梅原安丸 V 遺跡・概略遺構図 参考文献 (9) より転載

新潟県の古代港湾遺跡

田中 一穂（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）

新潟県内では河川や潟湖を通じた内水面交通が発達し、「津」の墨書土器を出土した中条町蔵ノ坪^{くら の つぼ}遺跡など港津に関する遺跡が多くみられる。そこで先学に従って、遺物では文字資料や祭祀遺物、遺構では船着場施設や津を管理する官衙的掘立柱建物・倉庫状総柱建物を目安として、その立地を中心に分類し、特徴などを考察した。

川津：柏崎市箕輪遺跡や和島村門新遺跡^{かどしん}など自然流路の川岸に船着場と思われる遺構が検出され、流路に沿う川津が想定される。よく船着場遺構が検出される背景には一定の水流に対するためかと推測される。その反面、船を停泊させる舟溜まりは見出しえない。周辺地域から川津までは陸送され、ここで舟運へ転換されたので多くの船を止める舟溜まりは必要ないのであろう。国郡司の公的な管理とは対照的に、在地との密着度が高く在地有力者に津の管理・維持が一任されたと思われる。

潟津：潟湖の潟端付近に立地した港津遺跡で、新発田市曾根遺跡^{そうね}や新潟市的場遺跡^{まとば}・見附市上田遺跡^{じょうだ}などがその具体例である。水流がほとんどなく船を繫留^{けいりゅう}しなくとも汀線に乗上げ、汀線そのものを船着場として利用可能なためか船着場遺構がない場合もある。時期的にも荘園と関係する可能性が見出せ、推定荘域の境界付近に位置していることが注目される。潟湖や河川を通じた内水面交通を利用して、境界に近い潟津に物資が集積され、荘域外へ搬送する役割を担ったのであろう。荘域の各地から船が集まり、潟湖自体が船を停泊させる舟溜まりの機能を担ったことが背景に推測される。物資収集の広域性などから郡司や荘官レベルといった在地豪族の管理が考えられる。

外洋の津：新潟県内では、戸水C遺跡のような外洋との結節点に当たる港湾遺跡の発掘調査は行われていない。他方、文献史料からは主要河川の河口付近に外洋への港津として蒲原津と水門駅が見出せる。前者は『延喜式』で越後国の国津とされ、後者は頸城国府の外港として関川河口付近に比定される北陸道の駅家である。一方、海岸線の「浜」が外洋への港津的な役割を担っていた史料も散見する。現在の寺泊港付近の「浜」で『袖中抄』巻十九に記された「渡戸浜^{わたどはま}」は北陸道の佐渡への渡海点に当たる。佐渡で到着点となる松崎駅比定地・旧畑野町大字松ヶ崎字潟ノ瀬もとりわけ特徴のない「浜」である。律令国家が渡河施設の整備には消極的なため、僧侶による知識料稲が架橋修造に到ったとする館野和己氏の指摘に従えば、渡河と渡海の相違はあるが、渡津にはほとんど明瞭な遺構や施設が少ない可能性も想定される。

最後に、外洋にほぼ直結できる旧岩船潟の潟端には式内湊神社がある。外洋への出口付近には磐舟柵が推定されている。今泉隆雄氏が指摘する城柵国司常駐制を参考とすれば、淳足柵に近接する蒲原津も含めて外洋への港津は国司レベルによって管理されていた可能性が推測される。さらに多数の軍船を用いた阿曇比羅夫の北征記事から考察すると、旧岩船潟に軍船が集結したと考えられ、外洋へ通じる港津には軍船も入港する軍港的な性格もあったと推察される。

館野和己 1998 「久米田橋と古代越前」（『日本古代の交通と社会』 塙書房）

今泉隆雄 1990 「古代東北城柵の城司制」（羽下徳彦編『北日本中世史の研究』吉川弘文館）

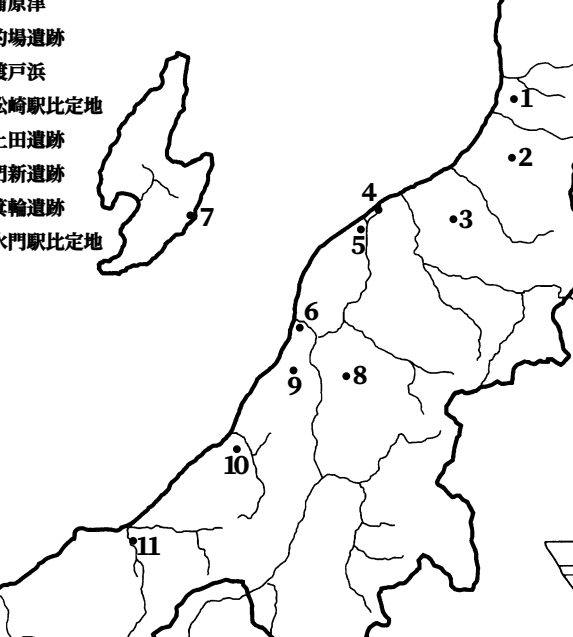
- 2 蔵ノ坪遺跡
3 曾根遺跡
4 蒲原津
5 の場遺跡
6 渡戸浜
7 松崎駅比定地
8 上田遺跡
9 門新遺跡
10 箕輪遺跡
11 水門駅比定地
- 

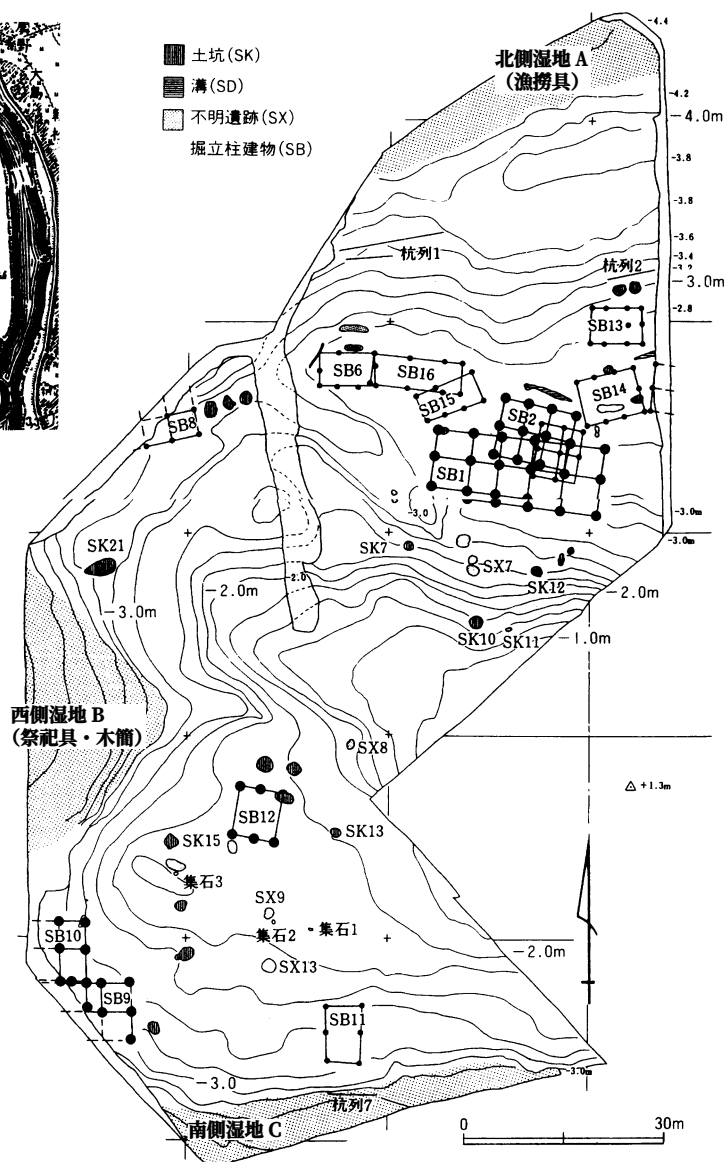
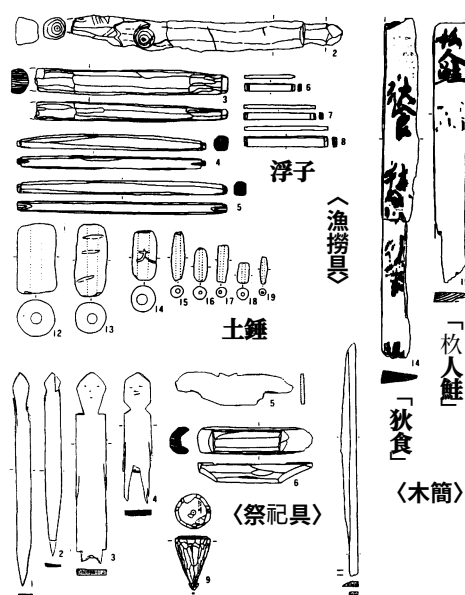
Figure 1 shows three views of a pottery fragment with a black ink inscription. The top left view is a side profile of a fragment with horizontal lines and a thick black rim. The top right view is another side profile, similar to the first but with a small notch. The bottom view is a circular plan view of the fragment, showing the character '津' (Tsuyu) inscribed in the center.

所進

少目御縮米五斗

木簡 (1/2)

第4図 蔵ノ坪遺跡の出土遺物



史料9 『袖中抄』卷十九 布施屋項

今勘国史云、仁明天皇承和二年六月勅、如聞東海大山兩道河津之處、或渡舟數少、或橋梁不備、由是貢調担夫來集河辺、累日經旬、不得利涉云々(1)。宜每河加增渡舟二艘(2)。其価重者須正稅 又造浮橋令得通行 及建布施屋 備于橋。寄其造作料吉用救急稻云々(3)。

陽成天皇元慶四年云 弘仁十二年国分寺尼法光為救百姓渡之難 於越後国古志郡渡戸浜。建布施屋施墾田四十余町 渡船二隻令往還之人得其穩便 而年代積久無人勞濟 屋宇損田疇荒廢。望請、被充越後国徭五人、永令預守云々。

出羽北部の古代水上交通と交流

— 古代遺跡と史料からみる —

小松 正夫（秋田市教育委員会）

1 はじめに

古代出羽においては、7世紀の阿倍比羅夫の遠征や、天平五年（733）には庄内出羽柵を秋田高清水に一挙100km北進、さらに全国で唯一河川の駅である水駅が集中する等、海上・河川に伴う遺跡、遺構、遺物が認められていることから、出羽北部の水上交通に関連する遺跡や地理的環境について述べることにする。

2 古代北海道との交流

能代市寒川Ⅱ遺跡は、4世紀から5世紀代の土壌墓群で、墓壇形態と副葬品である後北C式土器（図1）、横手市田久保下遺跡は、近世アイヌが所持する「マキリ」等の例にみられるような柄頭が逆反りする刀子が出土するなど、北方交流を示す遺跡として注目される。また北大Ⅰ式土器が出土した由利郡西目町宮崎遺跡は、海岸から直線で約1.4km東に位置し、遺跡の東に開けた水田とは比高差がわずか2m前後で、絵図（図2）でみるように江戸期には大きな沼地を形成していた。西目町史によれば、文政十一年（1828）に干拓が行われ現在の水田が形成されたが、古代においては日本海から入り江を経て西目川を上り、沼地（旧西目瀉）の西砂丘地に営まれた遺跡ということになる。旧西目瀉は、入り江と小河川で結ばれ、まさに海上交通にとって自然の良港を呈していたと言えよう。



図1 後北式土器



図2 本荘藩領内絵図（部分）
（本荘市郷土資料館）

宮崎遺跡

西目瀉

3 古代越後・北陸との交流

北陸との海上交通を示す史料に、阿倍比羅夫が越国から180艘の船団を連ねて、秋田、能代、津軽、道南方面まで北上した斉明天皇四・五年（758・759）の遠征記事がある。比羅夫の経由地と思われる男鹿半島周囲、旧八郎潟（図3）は、5世紀から9世紀代に、漁場としてばかりでなく湊としても活用されていたものと考えられる。平成9、10年に発掘調査された州崎遺跡（図3）は潟の東側に位置

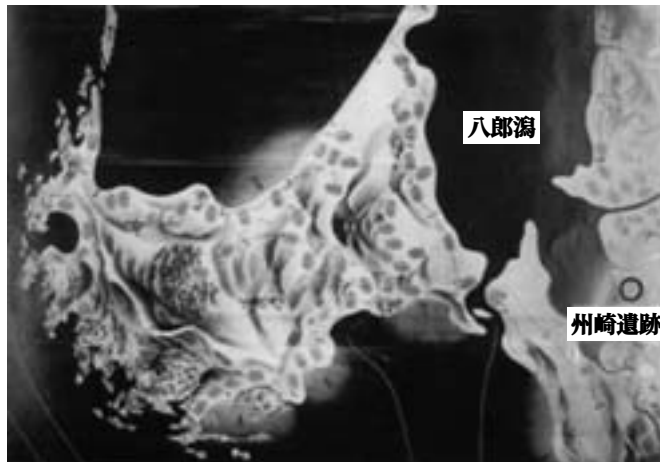


図3 正保四年出羽一國絵図（秋田県立図書館）

し、濠が確認されるなど海から潟を経由する中世の湊町と考えられている。

秋田城の西側に営まれた後城遺跡は8世紀前半から9世紀後半にかけての竪穴住居を中心とする集落遺跡である。遺跡からは、北陸系、上野系の須恵器が出土し、秋田城の管理下に置かれた集落と考えられているが、一方では、擦文土器の文様を思わせる甕形土器（図4）も認められ北海道等、海上交通を考える上で注目される。

4 大陸との交流

出羽国には神亀四年（727）から延暦十四年（759）まで、渤海使節の5回の来着記事が認められる。その中で、来着地が記されているのは「賊地野代（能代）湊」「夷地志理波村」のみであるが、安置供給先の一部が常陸、越後国にあったこと以外、施設等の詳細については不明である。

出羽国に到着した渤海使の対応にあたった官衙は不明であるが、出羽国府が置かれていたと考えられている秋田城跡からいくつか注目される資料が発見されている。



図4 後城遺跡出土土師器
甕鋸歯状刻文



図5 水洗厠舎跡

①水洗厠舎跡沈殿槽内出土の寄生虫卵

秋田城跡東辺外郭線の外側、鶺ノ木地区で検出されたSB1351水洗厠舎跡（図5）から発見された寄生虫卵（図6）である。時期は、木樋の年輪年代から756年以降、廃絶は出土遺物等から9世紀初頭と考えられている。寄生虫卵は、回虫、横川吸虫、日本海裂頭条虫、有・無鉤条虫等が検出され、このうち有鉤条虫は豚を中間宿主として人に感染することが知られているが、奈良時代の日本では豚を常食する習慣はなかったと考えられている。中国で

は豚の飼育が盛んに行われていたことが『墨子』『備城門』や古墳から副葬品として出土する陶器の豚便所「猪圈」等で判明していることから、大陸からの使者が使用した可能性が指摘され注目された。

②罽釜

罽釜の時期は、出土層位及び伴出土器から8世紀後半頃と考えられる。製作年代と形態から大陸の可能性が指摘されたことから分析を行ったが、素材の産地を明確にするには至らなかった。



図7 罽釜

③墨書土器＝「客人」

第44次調査で出土した墨書土器(図8)である。秋田城の来訪者＝「客人」に供する食器の可能性が考えられている。使用対象者は不明であるが、律令側の官人や蝦夷の饗応等の使用は考えられない。土器の年代は、9世紀前半と考えられることから、すでに渤海使の来着地が出羽方面から

北陸に移行している時期であり、大陸からの使節との関連は検討を要する。

5 元慶の乱の史料から見る水上交通

元慶二年(878)、秋田城が焼き討ちされた俘囚の反乱は『藤原保則伝』によれば、1千余人の賊が小舟で秋田城を襲撃している。乱の主謀者は、秋田城以北十二村で旧八郎潟周辺から秋田県北部鹿角市周辺の村々まで及んでいる。県北の村は米代川経由で日本海に、八郎潟周辺の村落も秋田湾を南下し、雄物川河口から上陸し秋田城の南、北、西から攻め込むことが可能である。しかし、一時的に大量に確保した舟数から、主力は八郎潟の周囲で漁業を生業としている俘囚と考えられる。絵図(図3)の如く、潟の出入り口が南に開いた旧八郎潟は、干拓前までは豊富な漁獲量のある漁場であったと同時に自然の良港であったと考えられる。

6 おわりに

古代出羽国沿岸は、阿倍比羅夫の遠征や渤海使節等の度重なる来着もあり、河口や入り江、それに八郎潟や旧西目潟のような潟湖が人や文物の交流に大きな役割を果たしてきた。また、古代東北の城柵は、大・小河川の中・下流域や河口付近に造営されているものが多く、物資の輸送や人的交流等必然的に何らかの形で水上交通に関わりを持っていた。さらに、河川交通においては駅伝制による水駅が最上川、雄物川を中心に設置されていたが、水量によって激しく変化する河岸地域ということもあり、海上交通の湊も含めその位置や施設等については不明であり、今後の課題であろう。

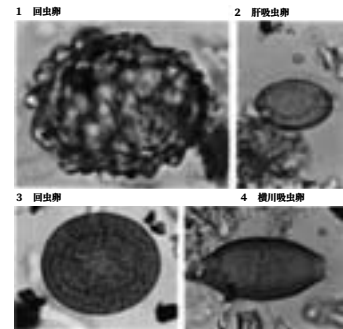


図6 寄生虫卵

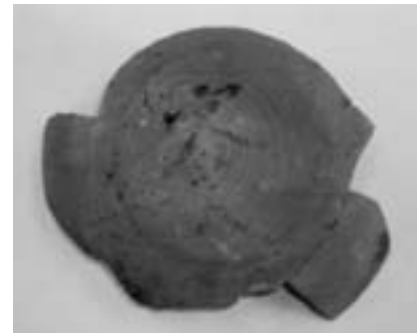


図8 墨書土器「客人」

北海道の古代交易と海上交通手段

— 続縄文～擦文文化期の交易路と準構造船 —

鈴木 信（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

1 鉄製品・銅の必需性と交易—「続縄文人・擦文人」は何のために南下したか

2世紀前葉～4世紀中葉は鉄製利器を象徴的財とし、石器に利器機能を負わせる時期である。4世紀後葉～5世紀前葉は鉄製利器が象徴的財でもあり実用的財でもある時期である。この時期以降に搔器・削器を除いて石器が廃用される。5世紀中葉～8世紀も同様の傾向である。9世紀には定型的石器は消滅して鉄製利器は実用的財としての性格がより濃くなり、鉄製利器の製造が始まる。

7世紀中葉～8世紀にかけての「続縄文人」・「擦文人（渡嶋蝦狄）」は鉄製品・銅・鉄素材の何れも知っているが、鉄加工と鉄生産の技術がないことが確認できる。9世紀には小鍛冶遺構が、10世紀中葉以降には精錬遺構が認められるが少数である。基本的にかねらは鉄製品・銅の生産を拡大せず、鉄製品・銅・鉄素材を交易によって入手していた。

2 古代交易路の変遷—「続縄文・擦文人」はどこまで南下したか

東北部出土の北海道系土器・墓制から 7世紀後葉以前の東北北中部には、袋状土坑^{ふくろじょうどこう}が付帯する土坑墓^{おものがわ}がみられ、北海道系土器（いわゆる北大式・沈線文土師器^{ほくだいしき}）の分布は経路状（馬淵川～北上川^{まべちがわ}）を示す。分布の形状から推定すると、北海道続縄文人は、鉄製品・銅・鉄素材の集積する市、鉄製品・銅・鉄素材を生産する集落に定住して交換を行っていたと考えられる。7世紀後葉には北海道の墓制が見られなくなるので、北海道続縄文人の在地化が進んだと考えられる。土器分布は太平洋側の内陸において前代のままの経路状を示す。

8世紀代には日本海側に北海道系土器が現れるが、経路状は示さない（岩木川、秋田県北部沿岸、雄物川）。新たな交通網（海路）に替わりつつあることを示す。9世紀以降、北海道系土器の経路状分布は消滅し海路による交通が主となったことを示す。土器製作技法の共通点も消滅する。なお、9～10世紀前葉の出土地点に比べ中葉～12世紀前葉の地点が多いことから、経路状分布の消滅は交易の衰退を意味しない。

文献史料から 『続日本紀』 寶龜十一（780）年五月十一日条、『日本三代実録』 元慶五（881）年八月十四日条、『日本三代実録』 元慶三（879）年正月十一日条、『日本三代実録』 貞観十七（875）年十一月十六日条より、日本海側の秋田城～飽海郡（山形県北部沿岸）まで南航していたことがわかる。また、『日本後紀』 弘仁元（811）年十月二十七日条より、太平洋側の気仙郡（宮城県北部沿岸）まで南航していたことがわかる。

3 物資交換方法の変化—「続縄文・擦文人」と律令政権との関係

7世紀後葉～9世紀前葉において鉄製品・銅・鉄素材の交易が盛行する。この背景にあるのが、倭王権・律令政権の交易に対する考え方（饗給^{きやうぎゅう}と朝貢的取引は最重要政務）であり、渡嶋蝦狄にとっ

ての考え方（城柵・官衙に行けば必ず交易できる）である。

8世紀以降は「利害」関係において定期的に滞留して交易する方法が定着・継続したと考えられる。同族意識を前提とし、定住して社会的関係を緊密にすることを重視した続縄文文化期のようなシステムとはまったく異なる。渡嶋蝦狄にとって、中央官僚は非接触的存在であり、律令は無縁な体制である。体制自体を受容するか否かは交易の結果に直接反映されない。従来と異なるのは「知り合いでない交易相手＝ソト」の登場である。要するに、交易の都合上相手を容認するが、背後にある権力に支

配されない。

つまり律令機関の認識は、政務上の原理である「教化」に基づく交易である。いっぽう、渡嶋蝦狄にとって律令機関の存在意義は交易である。その原理は「募化」ではなく、「利」（この「利」とは資本主義という生産過程で生み出される余剰価値の転化した形態＝利潤を意味せず、「ウチ」の同族意識に基づく互酬的関係の維持のために、「ソト」を利用して有利な立場を得ることをいう）である。従って、互いの認識を交錯させることにより関係が維持できた。

4 海上交通の手段—準構造船の登場

準構造船の構造と大きさ 幕府巡見使が記した『松前蝦夷記』^{まつまええぞぎ}（享保二/1717年著）に拠れば300石積み
の板綴船は、船底の構造より準構造船（単材を刳る船底＝舟敷＋縄で綴った舷側板の船、アイヌ語で「イタオマチブ/板のある舟」）である。

アンジェリス1616年の渡航報文には「400～600米袋を積む」板綴船があり、近世の平均である四斗入り俵で160～240石積みである。「蝦夷船にて渡海之図」『蝦夷紀行図譜』（図1）の画中立位の人物の身長を1.5mと測り測長の基準とすると、全長12m、最大幅（船梁の長さを幅とした）1.8mの準構造船となる。石井謙治（1995）によれば、13世紀代の準構造船である250石積み大型海船の復元値が全長32.6m、最大幅2.4mである。中世本州の準構造船と大型板綴船とは瓦（舟敷）が複材である以外はほぼ同じ構造であることから、全長から積載量を推定することは可能である。描かれた大型板綴船は92石積みとなる。

近世後半に描かれたアイヌ民族の板綴船（図1～3）は、沿岸漁労用には2～3人乗り、外洋用は4～9人乗りが描かれている。また、由良勇（1995）が19世紀中葉に『蝦夷紀行図譜』と同じくらいの板綴船があることが明らかにしていること、『松前蝦夷記』の記述内容より、外洋交易用として17世紀前葉～19世紀中葉には90～300石積み大型板綴船が存在していたことがわかる。

板綴船の出現期 札幌市 K39遺跡では6g層（9世紀中葉）から舟敷舷側部片が、5a層（12世代）から舟敷舳先部・舷側板・水押板又は戸立板の破片が出土した。千歳市ユカンボシ C15遺跡ではI B 4～0 B層（9世紀前葉～18世紀前葉）から舟敷舳部・舷側板・水押板又は戸立板等が、I B 2層（11世紀前葉～12世紀後葉）から復元幅0.7mの舟敷が出土した。これら最古の出土例は、K39遺跡5a層例が舷側板に中柵の出土例がないので小型板綴船、ユカンボシ C15遺跡 I B 3層（9世紀中葉～10世紀後葉）例が舷側板に中柵の出土例があり大型板綴船と推定される。また、I B 2層の舟敷は、由良の幅計測値の平均が0.72mとほぼ同じであることから板綴船と推定される。

また、ユカンボシ C15遺跡 I B 3層から、カラマツ属製の車轆が出土した。カラマツ属は南千島・サハリン・沿海州等（日本では蔵王山系～八ヶ岳の亜高山帯に自生）に自生すること、車轆はアイヌを含む北方民族特有の形態であることから、グイマツ製の車轆で可能性が高い。このことはサハリンとの交易が北海道に内陸部にも及んでいる可能性を示す。

5 おわりに—交易拠点とは、港湾遺跡が検出されない理由

8世紀代に海路が、太平洋側は宮城県北部沿岸、日本海側の岩木川・秋田県北部沿岸・雄物川・山形県北部沿岸とつらなる。9世紀以降には海路による交通が主となり、10世紀中葉～12世紀前葉かけてより盛行した。そして、ユカンボシ C15遺跡・美々^{びび}8遺跡から出土する板綴船の部材・船具は、石狩湾（日本海）と勇払海岸^{ゆうふつ}（太平洋）を結ぶ内陸河川路が東北北中部との渡海交易に連繋して、サハリンへも通じていたことを示す。

このように古代の交易路がほぼ把握されたのであるが、交易拠点は判然としない。擦文文化期の集落遺跡は河川・河口・海浜に立地する。このような立地は広く北海道の全域に共通するので、交易拠

点とみなす十分条件ではあるがそれだけではない。ところで、小玉貞良『ウイマムの図』(図3)には汀線際に泊められた板綴船が描かれている。船底部分が丸木舟であるため板綴船は海浜への引き上げが可能であり、平底は^{かくざ}欄座に対して耐性が高いためであろう。石狩低地帯の分水嶺附近では、板綴船の舷側板を取り外して、船を担いで峠越えをしていた。また、近世アイヌ文化期の例から荷役は丸木舟に移し替えるのが通例であり、接岸しての荷役は行わないので接岸施設は必要なかった。従って、板綴船は接岸施設が整備されていない場所へも行ける汎用性の高い舟である。このことが明確な港湾施設が検出されない理由であろう。

引用参考文献

石井謙治『和船Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局 1995

由良 勇『北海道の丸木舟』 1995

鈴木 信「北海道の古代交易と海上交通手段」『古代日本海域の港と交流』

平成16年度環日本海交流史研究会発表要旨 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2004

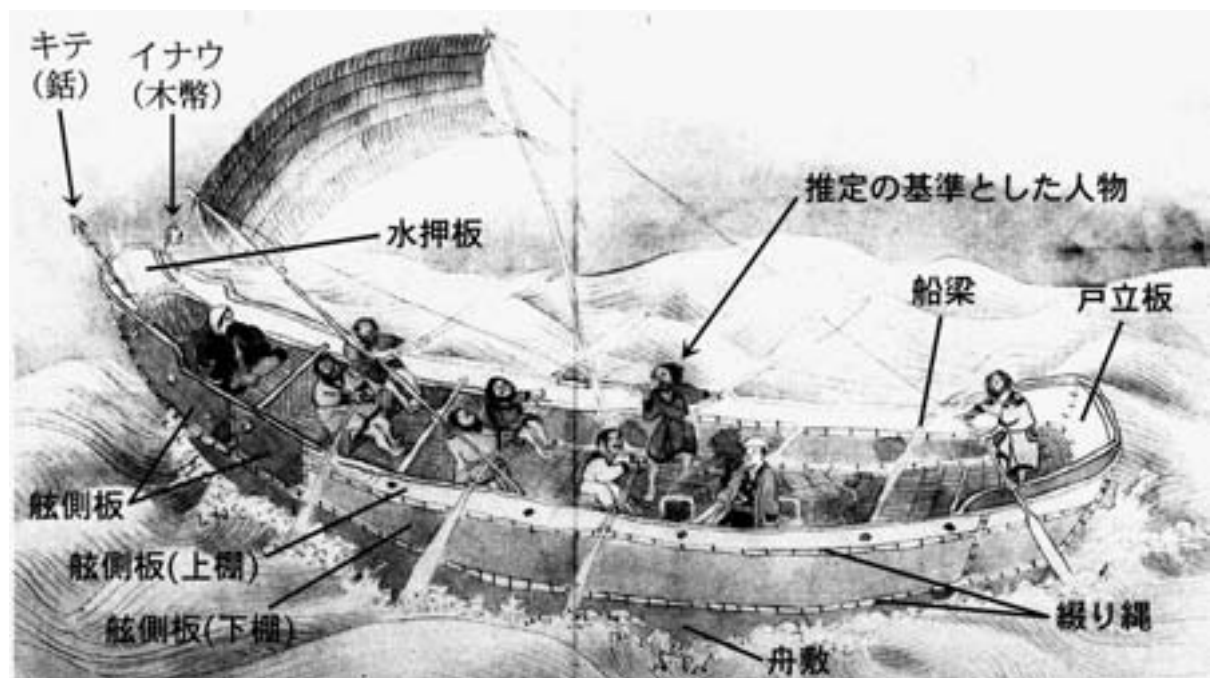


図1 (上)、図2 (左下) 描かれた準構造船

図3 ウイマムの図

討論と展望

安 英樹（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

討論にあたり、司会の小嶋芳孝氏は、古代日本海域の「港」について二つのテーマを設定した。一つは「港には必ず船着場遺構が確認できるかどうか」、もう一つは「港に伴う宗教施設が確認できるかどうか」、である。港の実態と深く関わる二つのテーマをめぐり、討論は進められた。なお、この討論により、文献にある「国津」「郡津」といった政治的な「港」の区分に加えて、田中一穂氏（新潟県）の報告にある「川津」「潟津」「外洋の津」といった立地による区分や機能差の存在が、各地域の報告者間でほぼ共通認識となったようである。

船着場遺構については、根津明義氏（富山県）の報告にある高岡市中保 B 遺跡のように明確な事例は全国的に見ても僅少である。和田龍介氏（石川県）が津湊遺跡の指標と報告した金沢市戸水 C 遺跡でも確認されていない。小嶋氏の見解は、船着場遺構は外洋の港には存在しないが、内水面の港には存在してよいというもので、おおむね各地域の報告者から支持が得られた。これは現実的な接岸条件を推定することに基づいている。まず、海岸部に大型船が接岸するには、全般に浅く砂泥の多い水底の状況からみて難しい。次に、実際は小舟で砂地に乗り入れることが多いため、施設を必要としなかった。そして、出越茂和氏（石川県）が具体的に述べたが、それでもさらに足場が悪い河川や湖沼の港に乗り入れるために、ある程度の施設が必要となる、という仮説である。この点について、鈴木信氏（北海道）の引用した近世アイヌの事例は参考になる。遺構をどう認識するかという問題はあるが、今後の指針となろう。一方で、律令の「津」ならば棧橋程度の施設は存在するのではないかという小松正夫氏（東北）、周防国府など例外を挙げた根津氏などの提言もあった。県内では、渤海使を送り出したという福良津も深い岩礁湾に位置した天然の良港と推定され、例外の一つではないだろうか。

港に伴う宗教施設については、各地域の報告者はおおむねその存在を肯定しつつも、施設としては未確認という状況であった。この問題を考える際、大庭康時氏（九州）、森田喜久男氏（山陰）、川村俊彦氏（福井県）、出越氏、田中氏らは近接する式内社など古社寺の存在に注目しており、重要な視点である。近年の県内調査例では、香嶋津や能登国府に近接し、大型木製祭祀具を多量に出土した七尾市小島西遺跡の性格にも深く関係しよう。大規模祭祀の過程やその母体、さらには「津」の実態も含めて、今後検討を深める必要が感じられた。

今回の研究集会では、短い時間ではあったが、テーマである「古代日本海域の港と交流」について、十分に認識を深めることができた。その実態はまだまだ不明確な部分が多いものの、当時の港は海・河川・潟湖に発達した水上交通の下で、国内・国外の交流に不可欠な存在であり、律令国家が掌握に努めたことも当然といえよう。そして、その構造と機能はわたしたち現代人が抱くイメージとは異なり、きわめて多様であったことが予想されるのである。



討論風景

石川県の畑状遺構と栽培植物

安 英樹

はじめに

人と植物の関わりは古くて、深い。そして、今も昔も重要で根本的な問題である。例えば、色々ある食物のうちで植物質の素材を得るには、対価的に獲得する場合を除けば山野から採集するか、耕地で栽培するかを生業を選択しなければならないが、おそらく歴史上に農耕が確立して以降は、後者の方法が中心となっていよう。農耕、すなわち人が植物を耕地で栽培することは、人が自然を制御していく試みでもあり、歴史上の一大転機であった。

ところで、耕地といえば「田・畑」というように、水田と畑が連想される。水田によるイネの栽培は、縄文時代から弥生時代への過渡、狩猟・採集から農耕への生業の転換という大きな文化・社会の変化を示す指標として、早くから注目が集まっていた。近年は石川県内でも水田遺構の発見例が相次いでおり、検討が進みつつある。しかし、人はイネのみを栽培していたわけではなく、現実に色々な栽培植物が発見されている。そして、それらが栽培されていた可能性が高いのは水田よりも畑ではないだろうか。畑状遺構と栽培植物の検討は、当時の生活・文化をより明らかにできる可能性がある。

小文では、石川県内の畑状遺構を集成して比較することにより、その形態を明らかにすることを目的とする。また、遺跡の土壌から出土した栽培植物の遺存体もあわせてとりあげ、考古学的に畑の実態を考えることにしたい。なお、「はたけ」という読みの方の漢字については、「畑」と「畠」という2種類の和製漢字を引くことができる。両者には語源の違いやそれによる使い分けもあるが^{*1}、小文では現在の常用漢字である「畑」を使用する。

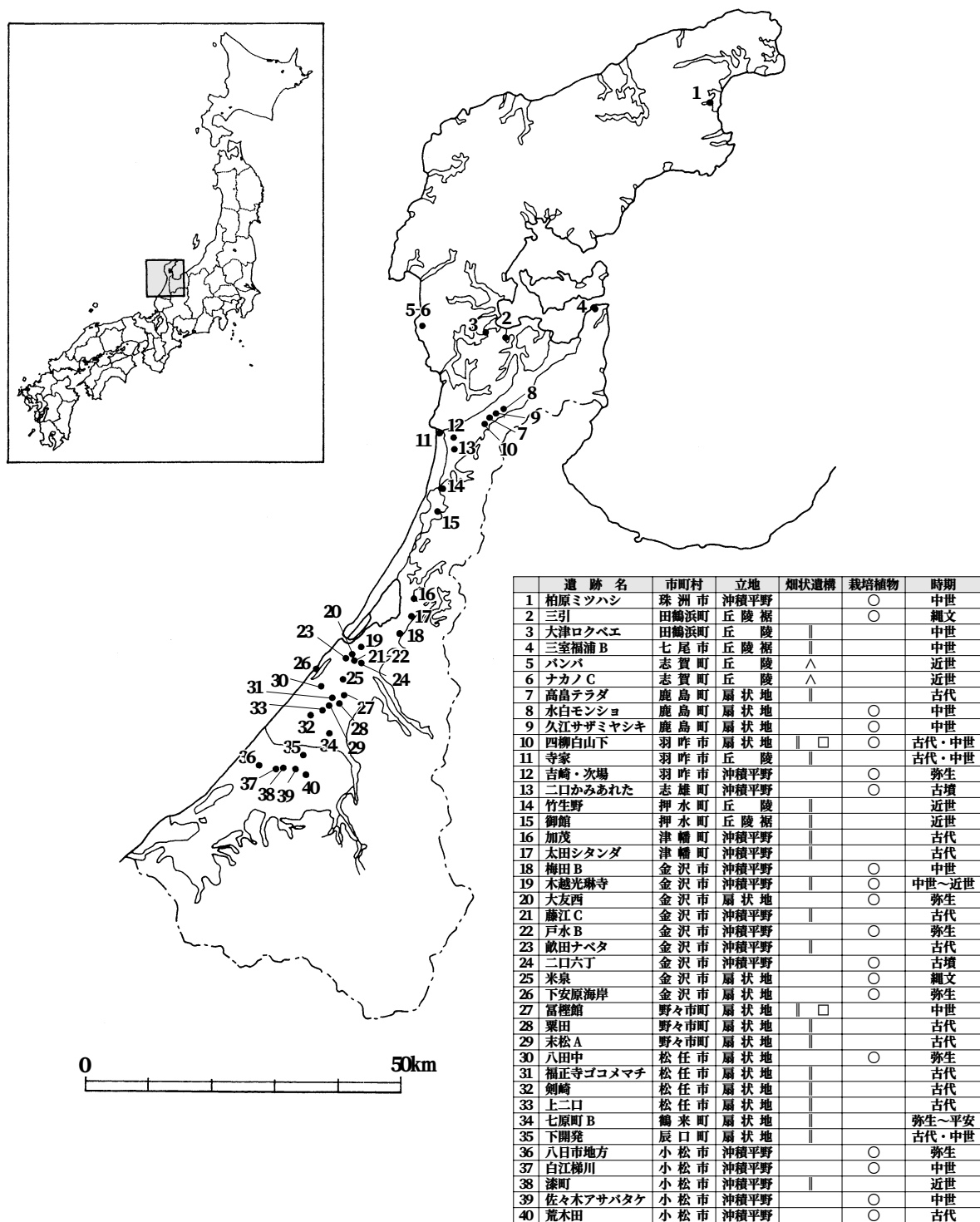
1 資料の集成

畑状遺構 畑状遺構については石川県内の23遺跡を集成した。県内の地域別では能登が9遺跡、加賀が14遺跡となる。時代別では、縄文時代が0遺跡、弥生・古墳時代が1遺跡、古代が13遺跡、中世が6遺跡、近世が6遺跡である（時期が複合しているため遺跡数の合計は一致しない）。立地別では扇状地が10遺跡、沖積平野が6遺跡、丘陵（裾部も含む）が7遺跡となる。種類別では「溝間に畝の存在が想定される細長い平行溝群」、いわゆる「畝溝状遺構」が大半で圧倒的多数を占める。これ以外では、畑と判断された平坦面が2遺跡、土手と溝による区画地が2遺跡ある。以下、小文では畑状遺構の各形態を順に「平行溝群」、「平坦面」、「垣畑」と表記したい（なぜ「平行溝群」を「畝溝」と表記しないのかについては後で述べる）。

なお、「平行溝群」については、ここで集成した以上に多数の事例が存在することを確認しているが、その大半は時期を特定する遺物に乏しかったり、遺構が著しく錯綜しているなどの理由から、積極的にとりあげられない資料であった。また、この種の遺構に対する意識差を表すものか、錯綜する遺構が未整理のまま報告されていたり、深さや覆土などの具体的な記載がない平面的な記録のみの事例も多かった。よって、集成にあたっては、①遺構の配置が単純でわかりやすい、②遺構が錯綜していてもその把握が可能である、③基本的な情報が記載されている、④大過なく時期を特定できるなど、条件の良い事例を取捨選択しているが、それでも地形の傾斜方向については読み取れないものが多

かった。事例の概要は第1表に一覧し、位置は第1図に示した。さらに、事例の多かった平行溝群については第2表でより詳しく一覧している。

栽培植物 栽培植物については同様に県内の19遺跡を集成した。能登7遺跡、加賀12遺跡となる。時代別では縄文時代が2遺跡、弥生・古墳時代が8遺跡、古代が2遺跡、中世が7遺跡、近世が1遺跡である（時期が複合しているので遺跡数の合計は一致しない）。立地別では扇状地が6遺跡、沖積



*市町村名は平成16年4月現在

*畑状遺構の「||」は平行溝群、「□」は平坦面、「^」は垣根を示す

第1図・第1表 主な遺跡

第2表 畑状遺構（平行溝群）一覧表

遺跡名	立地	標高 m	遺構名等	溝長 m	溝幅 cm	溝深 cm	溝間 m	方向 N-°	出土遺物	時期	備考
七原町 B	扇 状 地	57	畝溝状遺構	9	30	15	1.2~1.3	50W	土器	古墳か	区画溝有
高畠テラダ	扇 状 地	19	畝溝状遺構	4~13	40	10	1.6~2.3	0~20W	土師器、須恵器	古代（8C~9C）	
寺家（砂田）	丘 陵	7	第4層 SU 第1群	△	30	20	1.9/2.8	12W/29W	なし	古代（8C~9C）	
寺家（砂田）	丘 陵	8	第4層 SU 第2群	17	20	10	1.7~2.3	30~35W	なし	古代（8C~9C）	東西方向も少し有、道路有
寺家（砂田）	丘 陵	8	第4層 SU 第3群	△	▲	▲	2	25W	なし	古代（8C~9C）	
四柳白山下	扇 状 地	12	E 地区第IV面畝溝	×	×	×	×	×	×	古代（8C~9C）	
加茂	沖積平野	4	×	×	×	×	×	×	×	古代	
太田シタンダ	沖積平野	7	畝状小溝	8.6	20~58	5~10	1.8~2	25W	土師器、須恵器	古代（8C）	区画溝有
畝田ナベタ	沖積平野	3	×	×	×	×	×	×	×	古代	
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 1 群	▲	30~50	10	2.1	5 W	なし	古代	
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 2 群	11	30~50	10	2~3	5 W/25W	なし	古代	東西方向も少し有
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 3 群	10.5/13.5	30~50	10	1~1.8	5~10E	なし	古代	
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 4 群	6.7/9.4	30~50	10	1.6~2.9	5 E	須恵器	古代（8C~9C）	
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 5 群	7.2/10	30~50	10	1.5~3	5 W~5 E	須恵器	古代（8C~9C）	
藤江 C	沖積平野	4	畝状遺構 6 群	10.5/14.2	30~50	10	0.8~1.2	0	なし	古代	
末松 A	扇 状 地	37	畝状遺構	8~9	20~30	10	1.7	0~5 W	土師器、須恵器	古代	道路有
栗田	扇 状 地	33	畝溝①	▲	—	—	—	0	須恵器	古代（9C）	この他にも事例多
栗田	扇 状 地	33	畝溝②	2~4	30	10	1.4~1.8	60W	なし	古代	
栗田	扇 状 地	33	畝溝③	△	30	5~9	1~1.2	10E	なし	古代	畝溝④と同群か
栗田	扇 状 地	33	畝溝④	△	25~40	4~7	1~2	10E	なし	古代	畝溝③と同群か
栗田	扇 状 地	34	畝溝⑤	10	50	5~8	1~1.5	20E	なし	古代	
栗田	扇 状 地	34	畝溝⑥	6.5	20~30	5	1.6~2.1	15W/80E	なし	古代	
上二口	扇 状 地	35	小溝	△	40	5~10	1.5~1.7	5 W	土師器、須恵器	古代（8C~9C）	
福正寺ゴコモマチ	扇 状 地	31	畝状溝	5~13	50	—	1.7~2	0	土師器、須恵器	古代（9C）	
剣崎	扇 状 地	30	第3・4・6・10~12号溝	8.8	20~50	10	1.6~2.2	0	土師器	古代（10C~11C）	
下開発	扇 状 地	19	G 地区畝状遺構	△	30~40	10~20	1.8	20~30W	なし	古代	東西方向も少し有
下開発	扇 状 地	19	H 地区畝状遺構	△	20~40	10	1.5~2.1	0~10W	なし	古代（8C~9C）	別地区にも事例多
三室福浦 B	丘 陵 裾	2	畝溝群	5~10	20	—	1~1.2	25E/60W	なし	中世（15C~16C）	
大津ロクベエ	丘 陵	20	I 区中層面畝溝	△	10~20	10	1~1.2	75W	土師器	中世（12C 以前）	区画溝有
大津ロクベエ	丘 陵	20	I 区上層面畝溝	9	30~50	10~20	1~1.5	85W	珠洲、越前、土師器	中世（13C~14C）	
寺家（砂田）	丘 陵	7	第1層溝	37	20	10	1~1.2	35W	なし	中世（14C）	古い区画を踏襲
富樫館（蝸土居）	扇 状 地	21	畑状遺構 SX03小溝群	10	20~50	10	1~1.4	10E	土師器、陶磁器	中世（16C）	
御館	丘 陵 裾	—	畑畝	▲	—	—	—	55W	なし	近世	区画溝有
竹生野	丘 陵	31	第1畝溝群	—	—	—	—	45W	なし	近世	第2畝溝群と同群か
竹生野	丘 陵	33	第2畝溝群	5~7	—	—	1.3~1.5	25W	なし	近世	第1畝溝群と同群か
竹生野	丘 陵	37	第3畝溝群	3~7	—	—	1~1.2	90E	なし	近世	第4・5畝溝群と同群か
竹生野	丘 陵	37	第4畝溝群	6.5~9	—	—	—	90E	なし	近世	第3・5畝溝群と同群か
竹生野	丘 陵	37	第5畝溝群	7~9	—	—	1~1.1	85E	なし	近世	第3・4畝溝群と同群か
木越光琳寺	沖積平野	0	敷地 C 耕作溝	6	20~40	—	1~1.5	20E	なし	近世（17C~18C）	区画溝有
漆町（白江・フジマキ）	沖積平野	3	第1・3号溝群	12.2	120~180	6~10	2.5~3	10E	磁器（染付）	近世	区画溝有
漆町（白江・フジマキ）	沖積平野	3	第6号溝群	▲	30~40	5	▲	0	なし	近世	区画溝有
漆町（白江・フジマキ）	沖積平野	3	第14号溝群	△	40~70	5~15	1.5~1.6	10E	なし	近世	区画溝有
漆町（白江・フジマキ）	沖積平野	3	第16号溝群	16.6	20~40	10~20	1.2~1.5	0	なし	近世	区画溝有

*遺跡名のうち、地区名は遺跡の分布を考慮してあるものを遺跡名に、調査時の便宜的なものを遺構名に含めた

*規模は、溝長、溝幅、溝深は検出面で、溝間は心々間で計測した。方位は5°刻みの座標北で計測した。

*計測は遺構が明瞭な部分で行った。複数の数値をつなぐ「/」は分化してまとまりがあること、「~」はまとまりがないか不明であることを示す。

*「×」は未報告につき不明、「—」は文献に記載が無いが図面が小さく計測不能、「△」は調査区の制約により不明、「▲」は錯綜あるいは遺存が悪くて不明を示す。

第3表 栽培植物一覧表

遺 跡 名	遺 構 名	オ ム ギ	コ ム ギ	ア フ	ヒ エ	キ ビ	ゴ マ	ソ バ	ア ブ ラ ナ	カ ラ シ ナ	ナ タ ネ	モ ロ コ シ	ア サ	マ メ	カ キ	シ ン ・ エ ゴ マ	ナ ス	ヒ ヨ ウ タ ン	ト ウ ガ ン	ウ リ	キ ュ ウ リ	時 期
三引	第1貝塚															実	種					縄文(前期)
米泉	トチ塚												種			実						縄文(後期)
八田中	旧河道							実					種					種	種	種		弥生(前～中期)
下安原海岸	土坑												種					種	種	種		弥生(中期)
八日市地方	SK09			実																		弥生(中期)
八日市地方	SK10			実		実																弥生(中期)
戸水 B	SD10001			胚									種									弥生(中期)
吉崎・次場	SK12												種			実		種	種	種		弥生(後期)
大友西	SE18								種				種	種			種	種	種	種		弥生(後期)
二口かみあれた	SD129			類									種			実		種	種	種		古墳(前期)
二口六丁	大溝												種					種	種	種		古墳(前期)
四柳白山下	SD03・04												種	種		実	種			種		古代(8C)
荒木田	SX13															実	種	種	種	種		古代(8～9C)
柏原ミツハシ	SE01	胚		類・胚									種				種	種	種	種		中世(12C)
水白モンショ	101号土坑	類		類		類	種	実					種			実	種			種		中世(12～13C)
久江サザミヤシキ	井戸			類												実						中世(12～13C)
木越光琳寺	第8号溝															実	種	種	種	種		中世～近世
木越光琳寺	第9号溝							実									種					中世(16C)
木越光琳寺	第10号溝			類												実	種			種		中世(14～15C)
木越光琳寺	第28号土坑	胚														実	種		種	種		中世(15C)
梅田 B	SE01	胚											種			実	種			種		中世(13～14C)
梅田 B	SE03		胚					実					種			実	種			種		中世(12C 末)
梅田 B	SE04		胚					実					種			実	種			種		中世(14C)
白江梯川	405号井戸		胚													実						中世
白江梯川	408号井戸															実	種	種				中世
白江梯川	410号井戸															実	種					中世(12C)
白江梯川	414号井戸																			種		中世(14C)
佐々木アサバタケ	27号井戸		胚	類		類			種				種			実						中世(13C)
佐々木アサバタケ	31号井戸			類	胚			実	種	種		胚	種		種	実		種		種	種	中世(14～15C)

*各遺跡の遺構土壌選別成果の主なものを選抜して掲載した。栽培植物は「属」「科」「類」に分類されたものも含んでいる。

*「種」は種子、「実」は果実、「類」は類果、「胚」は胚乳を指す

*ミゾソバ、イヌビエ、アカザ、ヒユ、エノコログサなどは栽培の可能性を否定できないが、今回は集成から除いた。

平野が13遺跡となる。事例は主に土壌選別によって得られた植物遺存体の鑑定で栽培種の存在が明らかになった遺跡・遺構を取り上げている。ただし、資料の精度にはばらつきがあり、調査者が意図的に抽出したような事例や、時期が不明確な事例は除いた。また、イネは小文の目的から外れるので除き、モモについても特殊性が指摘されている*2ことから除いた。植物各種の量比については、条件が一律でないため、算出してない。分類方法は文献によりやや異なるが、煩雑さを避けるため、「仲間」・「類」は「類」に統一し、「メロン」と「ウリ」は「ウリ」に統一し、文中では五十音順に記した。「近似種」は省略した。分類の詳細については原典を参照されたい。事例の概要は第1表に一覧し、位置は第1図に示した。さらに、栽培植物の種類については第3表でより詳しく一覧している。

以下は、集成した石川県の畑状遺構と栽培植物について、時代別に紹介し、まとめていきたい。

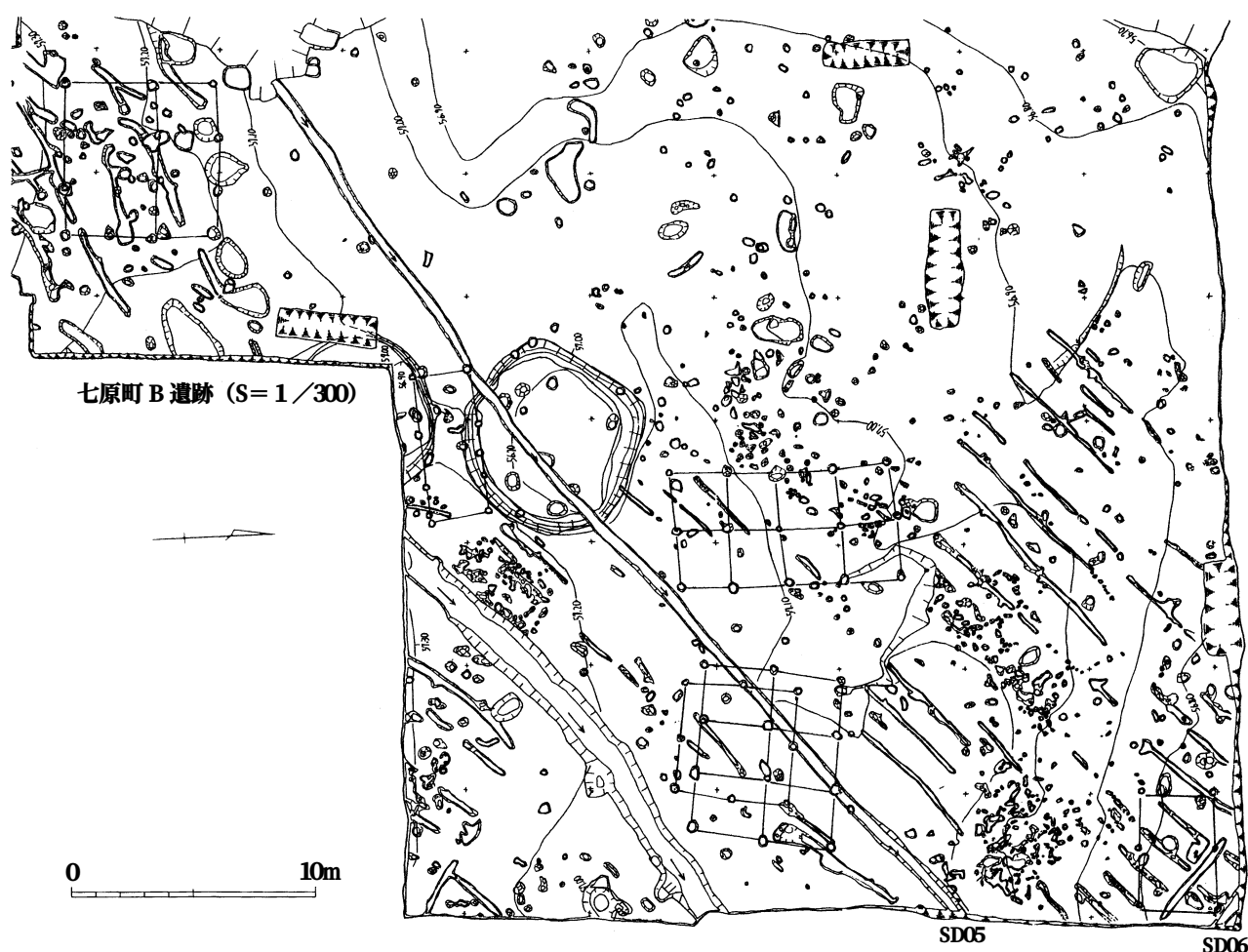
2 古墳時代以前

畑状遺構 畑状遺構は縄文時代には確認されていない。弥生・古墳時代では鶴来町七原町 B 遺跡(第2図)でこの時代まで遡る可能性がある唯一の事例が確認されている。遺跡は手取川扇状地の扇中央部に立地し、種類としては平行溝群である。規模は長さ9m以下、幅25cm前後、深さ10cm前後、間隔1.2m前後を測るのが標準的である。方向は南北よりも東西に近い。配置としては平行溝群の間を走る溝 SD05がほぼ平行し、SD06が逆に直交することから、大まかではあるが平行溝群の集中域を

区画する溝が存在する。遺物は弥生時代末の土器が出土している。時期については弥生時代と報告されているが、特定は難しい状況である。調査では、平安時代の遺構面では検出されず弥生時代の遺物包含層を掘り下げて検出されているが、土層断面では弥生時代の遺物包含層を切り込んでおり、SD 05と弥生時代末の竪穴建物跡に前後関係があることから後出的な存在とみるのが妥当であろう。小文では古墳時代の可能性が高いものと捉えておく。

栽培植物 栽培植物は8遺跡を集成した。畑状遺構が確認されていない割には意外と確認例が多い。縄文時代^{*3}では田鶴浜町三引遺跡（縄文前期）でシソ・エゴマ類、ヒョウタン類が、金沢市米泉遺跡（縄文後期）でシソ・エゴマ類が確認されている。弥生・古墳時代では松任市八田中遺跡（弥生前～中期）で確認されているアサ、ウリ類、ソバ、ヒョウタン類が最も古い。金沢市域では事例が多くなり、戸水B遺跡（弥生中期）ではアワ、アサが^{*4}、戸水遺跡群大友西遺跡（弥生後期～古墳前期）ではアサ、ウリ類、エゴマ、トウガン、ヒョウタン類、マメ類などが、二口六丁遺跡（古墳前期）ではアサ、クワ属、ヒョウタン、マクワウリなどが確認されている。この他、羽咋市吉崎・次場遺跡（弥生後期）ではアサ、ウリ類、シソ・エゴマ類、ヒョウタン類が、志雄町二口かみあれた遺跡（古墳前期）ではアワ、アサ、ウリ類、エゴマ、ヒョウタン類が確認されている。

土壌選別による成果以外では、ヒョウタン^{*5}がいくつかの遺跡で報告されており、あまり注目されていないことから、もっと出土例が多くなる可能性が高い。また、鹿島町藤井サンジョガリ遺跡（弥生後期）では、建物周溝からアブラナ属の炭化種子が出土しているが、栽培種かどうかは不明である。



第2図 畑状遺構1（古墳時代以前）

3 古代

畑状遺構 畑状遺構は13遺跡27例を集成しており、全時代を通じて最も資料数が多い。このうち26例は平行溝群であり、残り1例は平坦面である。以下、両種遺構の概要にふれる。

平行溝群は資料数は多いものの、前述した集成条件に合わないため取捨したものも実に多く、実態としてはこれにとどまるものではない。立地は8遺跡が扇状地、4遺跡が沖積平野、1遺跡が丘陵である。その規模は、長さ2～17m、幅20～58cm、深さ4～20cm、間隔80cm～3mと数値に幅がある。数値幅の重なりを見ると、長さについては13～14mのもの、10m前後のもの、5m前後のものなど複数種類に分化している可能性がある。幅は30～40cm、深さは10cm前後に集中する。間隔については1.6～2m、特に1.7～1.8mに集中している。方向は概ね南北方向を向くものが多く、東西方向はまれである。遺構の配置では、野々市町末松A遺跡（第3図）や辰口町下開発遺跡などで3～4条が最小単位と判断される例がある。また、他の遺構との関係では、遺構間に溝などの区画を持たない事例が多い。区画溝を持っている事例でも、津幡町太田シタンダ遺跡（第4図）のように低地や微高地の境など地形の変換点に設けられたり、末松A遺跡^{*6}のように道や大溝が兼ねているなど比較的大まかな区画であり、平行溝群と建物との間にはほとんど見られない。ただし、平行溝群と建物が明確に位置をずらす事例も多く、土地利用上の区分は意識されているものと考ええる。出土遺物や周辺の状況から想定される時期は8～9世紀代が多く、7世紀代の確実な事例はない。

平坦面は羽咋市四柳白山下遺跡で確認されている。E地区第II面では段々畑状の遺構が確認されており、傾斜地の土地利用を考える上で重要な資料である。時期は10～11世紀代である。また、木製鋤身が出土しているが、全時代を通して農具が伴出したのはこの遺跡だけであり、貴重な事例である。

栽培植物 栽培植物は2遺跡を集成した。確認例は少ない。小松市荒木田遺跡では8～9世紀代の水場遺構からウリ類、エゴマ、シソ科、ナス属、ヒメコウゾ、ヒョウタン、ブドウ属などが発見されている。羽咋市四柳白山下遺跡では8世紀代の溝からアサ、ウリ類、シソ属、ナス、マメ科が確認されている。この他、加賀市松山C遺跡などでも土壌選別が試みられているが、芳しい成果は得られていない。また、土壌選別による成果ではないが、いくつかの遺跡からヒョウタン^{*7}が出土している。

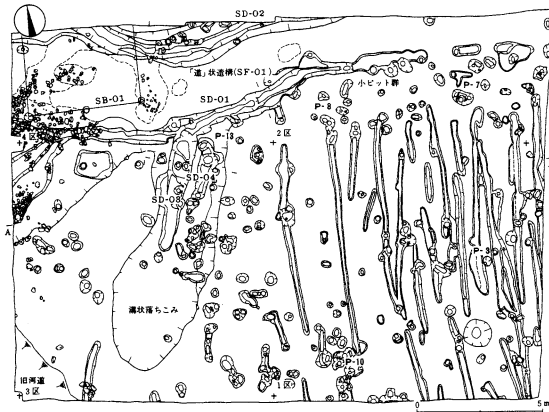
4 中世

畑状遺構 畑状遺構は5遺跡6例を集成しており、4例は平行溝群、1例は平坦面で、1例は平行溝群と平坦面が一体的に検出されている。資料数は古代に比べて少ないが、原則的に中世の遺構面は古代より上位となることから後世の削平を受けやすく、遺存しにくいものと推定している。

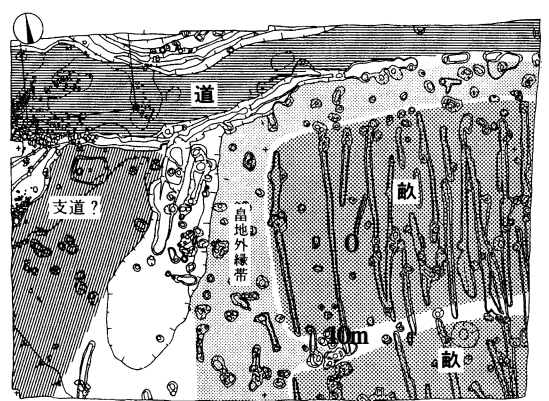
平行溝群は4例すべてが丘陵に立地する。規模は、数値をまとめると長さ5～10m、幅10～50cm、深さ10～20cm、間隔1～1.5mとなる。長さは明確な事例が少なく、間隔は1～1.2mに集中している。寺家遺跡の例は30mを超え、極端に長い。方向は概ね南北を向くものと東西を向くものがあり、東西を向くものが多い。遺構の配置では、周囲に区画溝を持つものが多い。羽咋市寺家遺跡砂田地区第1層（第5図）では土塁と溝による大規模な郭の区画を踏襲する形で施された平行溝群が検出されている^{*8}。時期は14世紀代である。田鶴浜町大津ロクベエ遺跡I区中層面（第6図）では、約12×8m（約100㎡）を測る長方形の区画地と推定される範囲内に8条の平行溝が検出されており、この面積はほぼ1畝に相当するものである。時期は12世紀代以前とされる。

平坦面は四柳白山下遺跡のJ地区第III面で確認されている。第III—1面では約8×8mを測る小区

磁北 末松 A 遺跡 (S = 1/300)

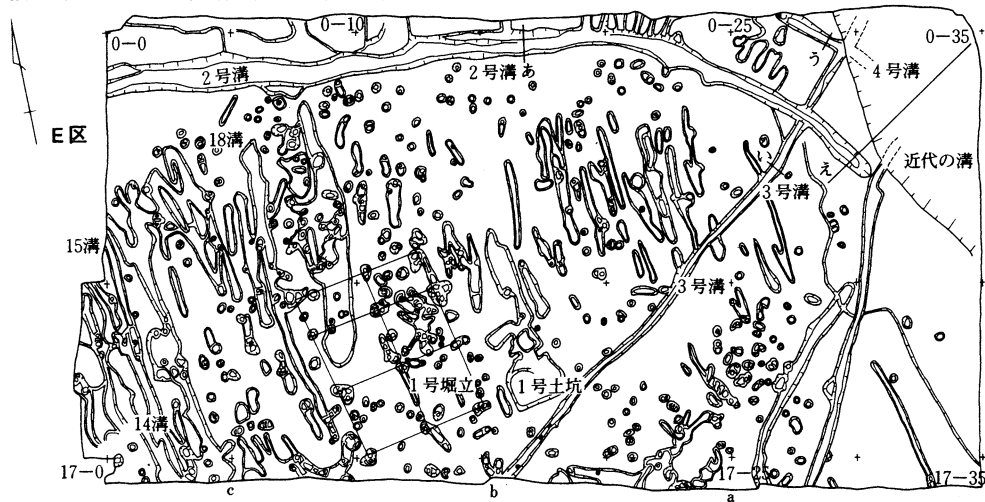


(概念図)

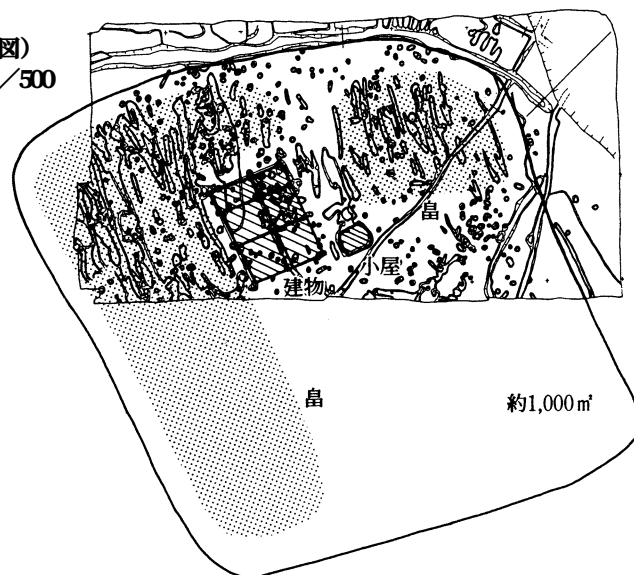


0 10m

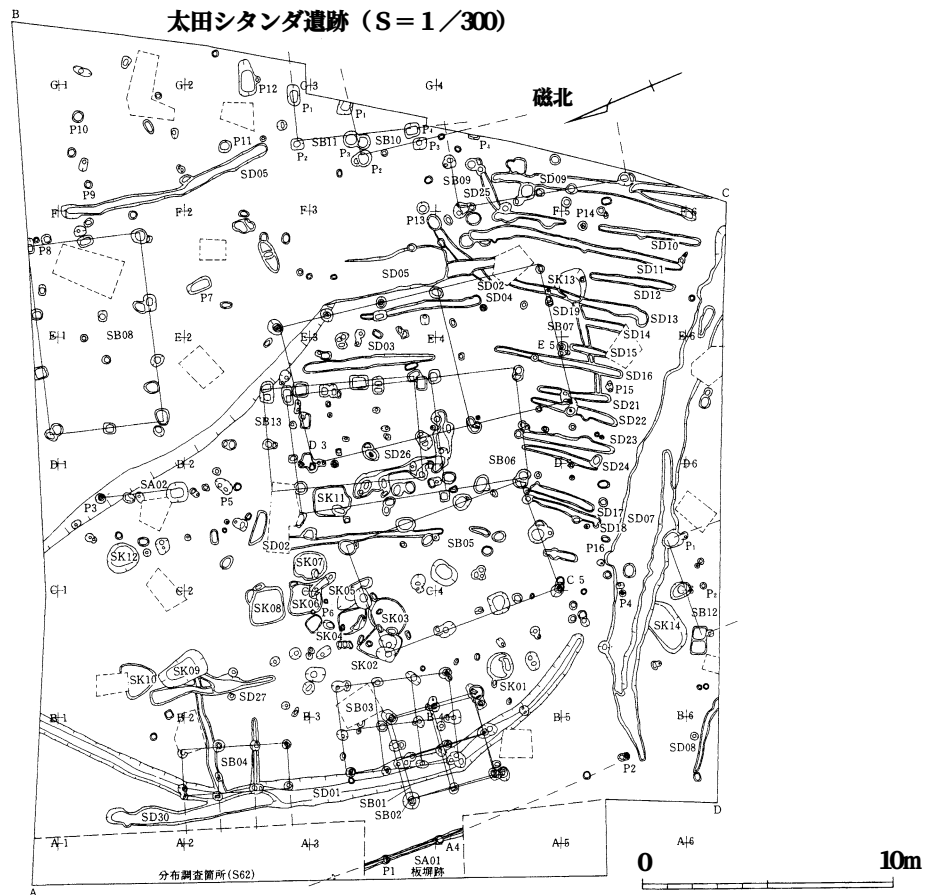
福正寺ゴコメマチ遺跡 (S = 1/300)



(概念図)
S = 1/500

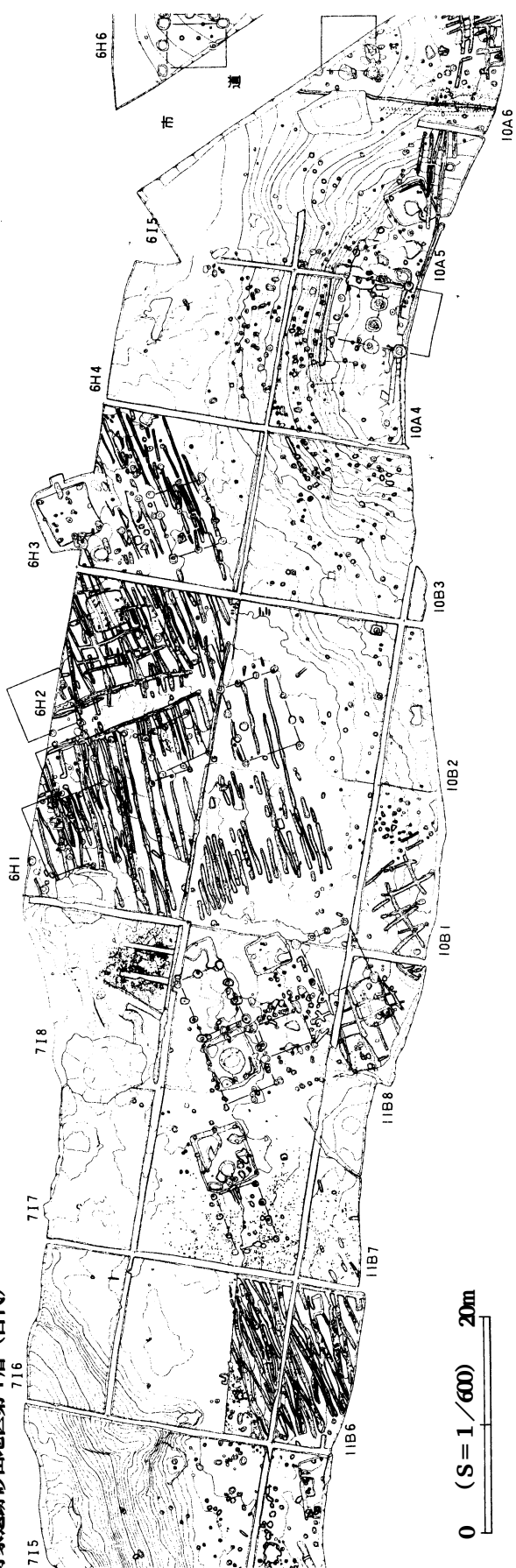


第3図 畑状遺構2 (古代)

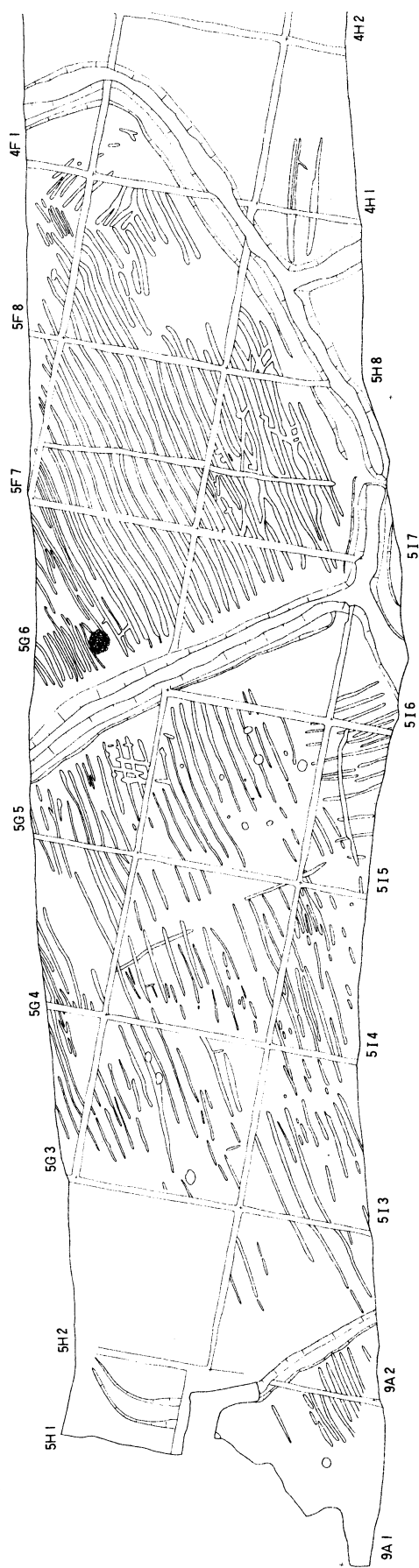


第4図 畑状遺構3 (古代)

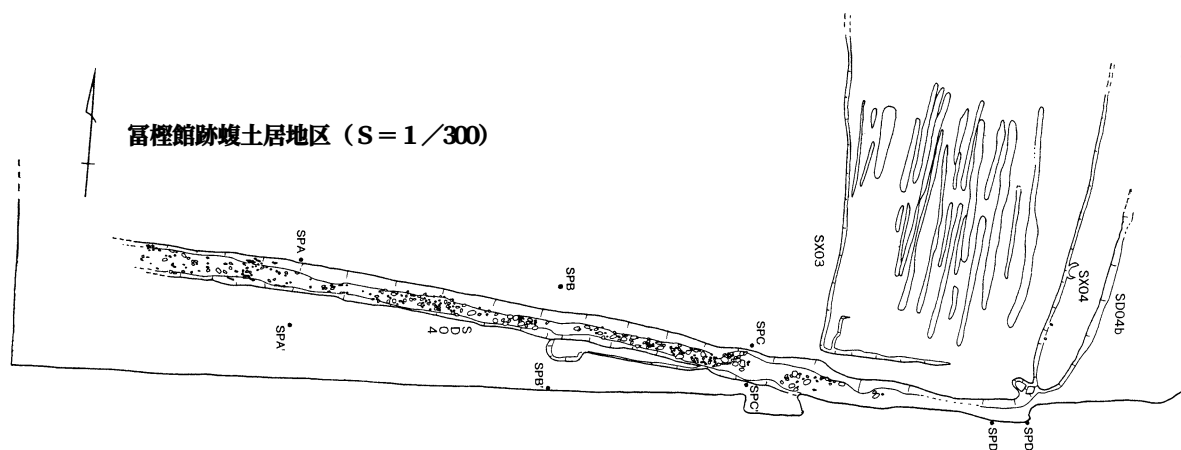
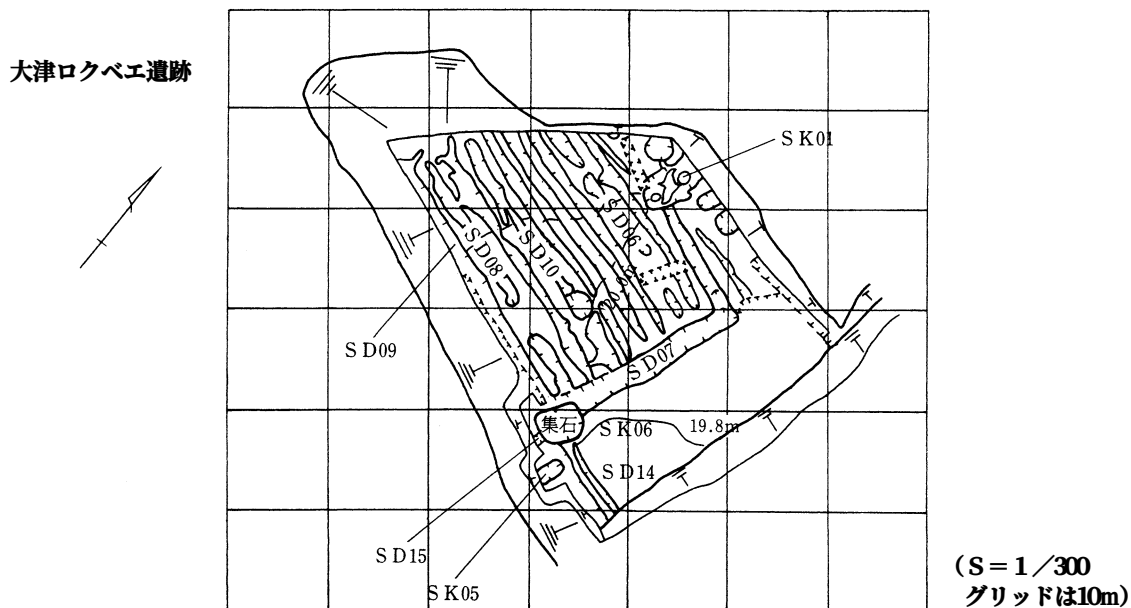
寺家遺跡砂田地区第4層 (古代)



寺家遺跡砂田地区第1層 (中世)



第5図 畑状遺構4



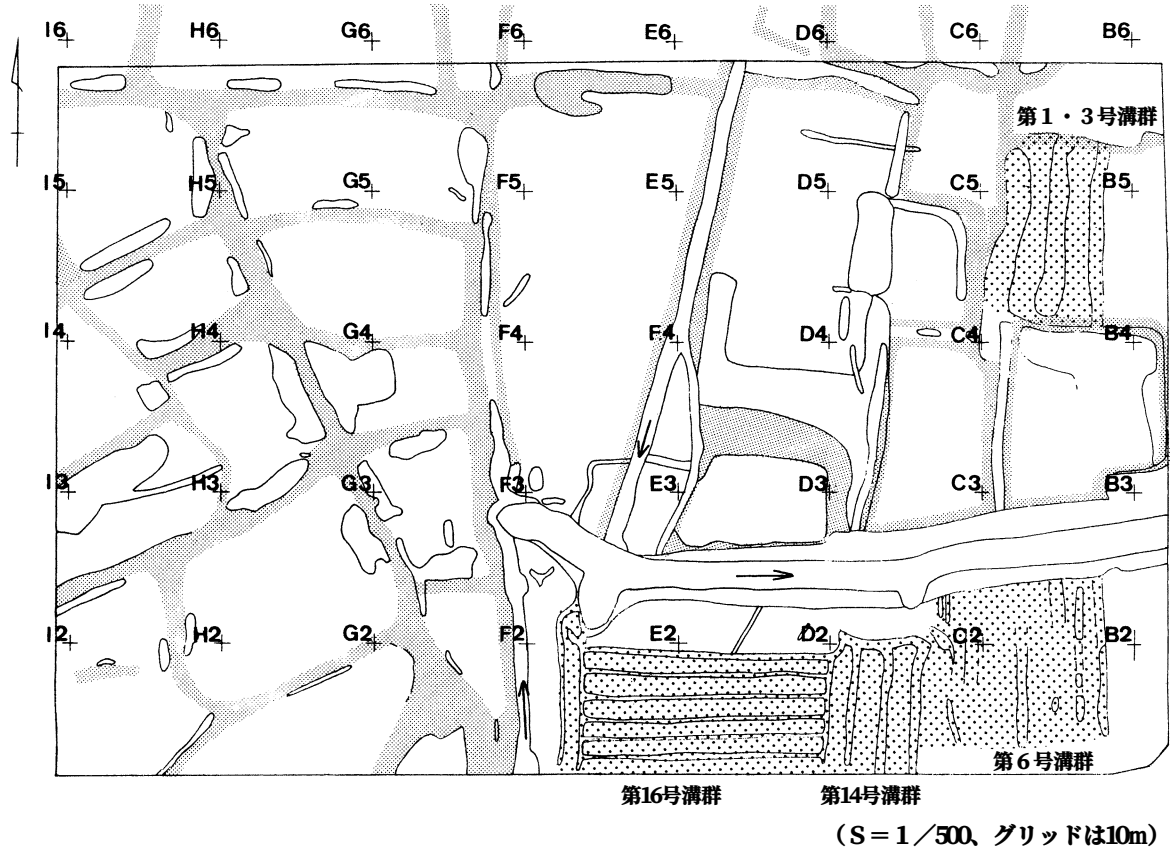
第6図 畑状遺構5 (中世)

画の平坦面群が検出されており、礫で土留めが行われている。時期は、遺物がほとんど出土しておらず、上下に位置する遺構面との関係から、古代末から中世前半にかけての幅を持つと判断されている。

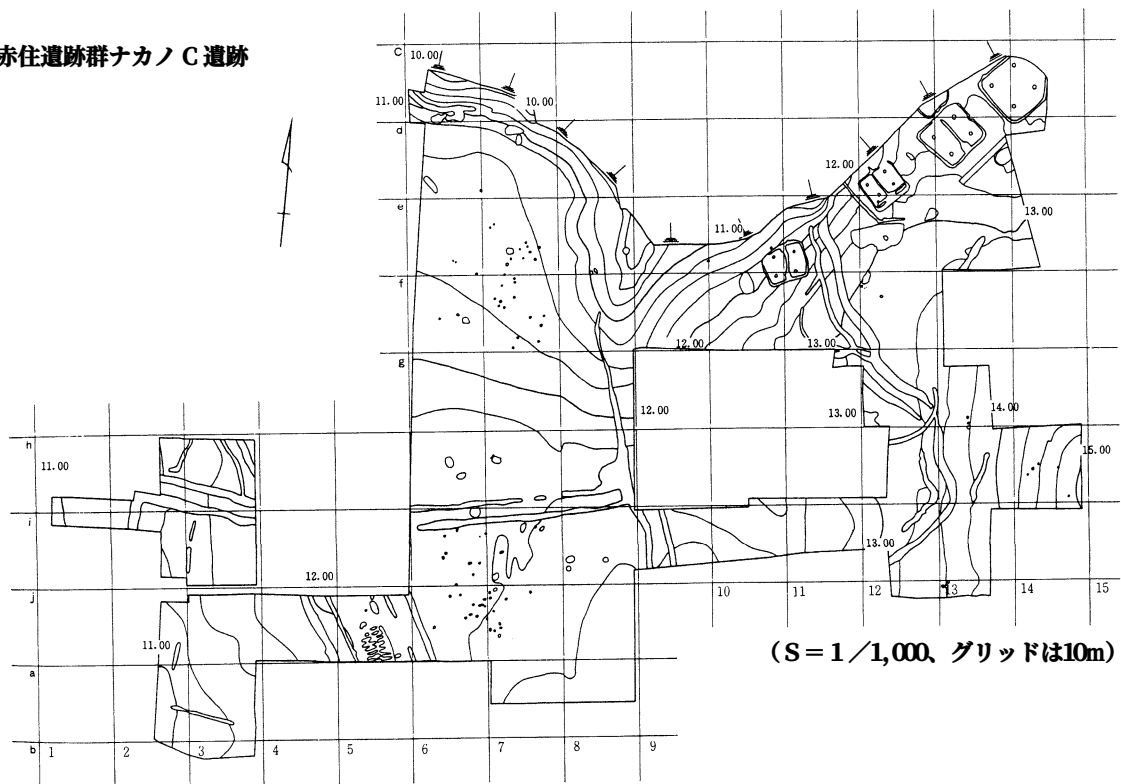
平行溝群と平坦面が一体的に検出された事例は野々市町富樫館跡（第6図）であり、四角形の平坦面 SX03上に多数の平行溝群が検出されている。平坦面は前述の大津ロクベエ遺跡例とほぼ同じ規模が予想される。平行溝群は平坦面の覆土を掘り込んでいるが、地山面まで到達していない点で、他の遺跡とは異なっている。時期は16世紀代とされる。

栽培植物 栽培植物は7遺跡を集成した。山本直人氏の精力的な選別の成果があり（山本1990）、遺跡数・植物種類とも比較的多い状況である。珠洲市柏原ミツハシ遺跡では12世紀代の井戸からアワかヒエ、アサ、ウリ類、ナス、ヒョウタン類、ムギ類が確認されている。鹿島町水白モンショ遺跡では12～13世紀代の遺構からアサ、アワ、ウリ類、エゴマ、オオムギ、キビ連、ゴマ、ソバ属、ナス、ナタネ属が確認されている。金沢市梅田B遺跡では13～14世紀代の井戸からアサ、ウリ類、エゴマ・シソ類、オオムギ、コムギ、ソバ、ナス科が確認されている。小松市佐々木アサバタケ遺跡では主に14～15世紀代の井戸からアブラナ類、アワ、エゴマ、カラシナ、キビ、キュウリ属、コムギ、シソ、

漆町遺跡 (白江・フジマキ地区)



赤住遺跡群ナカノ C 遺跡



第7図 畑状遺構6 (近世)

ソバ、ヒエ、ヒョウタン、マクワウリ、モロコシなどが確認されている。

5 近世

畑状遺構 畑状遺構は6遺跡13例を集成しており、11例は平行溝群、2例は垣畑である。資料数は少ないが、発掘調査で詳しい記録が残されて報告される機会そのものが少ないように感じている。

平行溝群の立地は、2遺跡が沖積平野、2遺跡が丘陵である。沖積平野立地では、木越光琳寺遺跡の標高は0mと極端に低く、整地がかなり恒常的に行われている。規模は、数値をまとめると長さ3～16.6mでばらつき、幅20～70cmと1.2～1.8m、深さ5～20cm、間隔1.2～1.6mと2.5～3mとなる。幅と間隔が大きいものは小松市漆町遺跡（第7図）の1例のみである。方向は南北と東西の両方がある。遺構の配置では多くの事例が区画溝を持つ。木越光琳寺遺跡では畑状遺構を含む全体的な区画が近現代のものとほぼ一致している。漆町遺跡では第14・16号溝群のように南北・東西方向の平行溝群が一体的に区画内におさまっている例がある。詳しい時期が特定できる事例は17世紀代の木越光琳寺遺跡である。漆町遺跡は不明確であり、中世に遡る可能性を残している。

垣畑は2遺跡2例とも丘陵地に立地する志賀町赤住遺跡群で見られる。地元への聞き取りから、土手は「^{ししがき}猪垣」と通称され、獣害を防ぐ目的で畑の区画に沿って築かれた土塁状の高まりであり、区画地が畑であることが判明したものである。ナカノC遺跡（第7図）では1辺約6mと約30m、パンバ遺跡では約20mの四角形の区画が確認されており、約6mの区画内にはやや部分的で不明確ながら同じ方向の平行溝群が検出されている。遺物が少なすぎるため、詳しい時期は不明である。

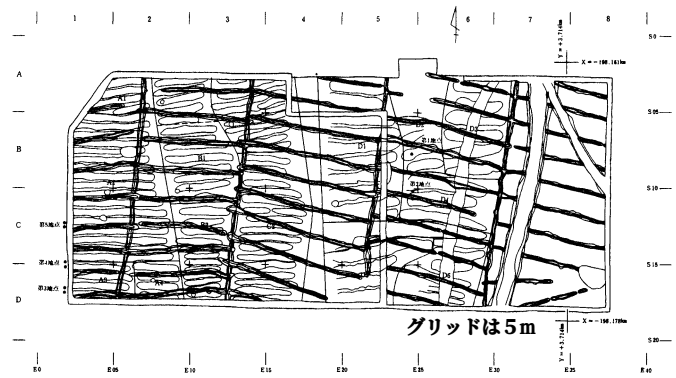
栽培植物 栽培植物の確認例はほとんどないが、その背景は前述した畑状遺構と同様であろう。木越光琳寺遺跡では17世紀頃の時期を含むとされる第8号溝からウリ類、エゴマ、トウガン、ナス、ヒョウタン類が発見されている。

6 検討する視点

平行溝群の問題 石川県における畑状遺構を概観すると、各時代を通して比較できる遺構は平行溝群であり、まずはその特徴をまとめてみたい。長さについては確定できた資料数が少なくよくわからない。幅や深さは調査状況によって変動が大きいことが予想されるが、少数の明らかに数値の大きいものを除けばよく似た数値を示す。間隔と方向については最も明瞭な変化が見られた。古墳時代以前は不明確であるが、七原町B遺跡の事例を参考にすると、1.2m前後で概ね東西方向である。古代は1.7～1.8mと比較的間隔が広いものが主になっており、北野博司氏の指摘した数値（石川県埋文セ1989c P20）とほぼ一致する。方向は、地形の傾斜とも関係するのであろうが、概ね南北方向を向くものが主になっている。中世は間隔が広いものもあるが、1～1.2mと間隔の狭いものが多くなり、方向は概ね東西方向を向くものが多くなる。近世は遺跡の偏りが大きいため参考にとどめるべきであるが、中世とほぼ同様ある。なお、記録が少ないためふれなかったが、管見の限りでは断面形は底縁に丸みを持つものが大半であり、底面や溝間に小穴が連なる例も散見される。

こうした平行溝群については、その大半の遺構名が表すように、畑の畝間溝と捉えられている。しかし、私たちが目にする畑を参考にすると、畝間溝は耕作土を掘り込むが基盤層を大きく掘り込むものではなく、畝の間隔は1m程度のものが多い。また、畑の大小に関わらず見られる。これに対して平行溝群は、富樫館跡のように掘削が浅くて耕作土中にとどまっている例もあるが、基盤層を大き

く掘り込んでいるものも多く見られ、間隔もかなり広いものが見られる。また、畝自体が確認された例^{*9}はほとんどなく、平坦面の畑状遺構では検出されていない。すなわち、平行溝群には私たちが目にする畝間溝とは異なった形態的特徴を持つものが含まれることになり、特に、間隔が広いものや深いものについては構造や性格を再考する余地がある。ただし、畝間溝でないとした場合にも、佐藤甲二氏らが地力回復のための土の入れ替えや、溝自体が根菜類や桑の作付け部と推定している耕作痕（第8図、日本考協2000 P16～25）に類似しており、畑状遺構かそれに関連したものである可能性は高い。いずれにしても、平行溝群には耕作土や当時の表土が認められる事例がほぼ皆無か未報告な状況であり、良好な事例が増えてくるまでは多様な解釈が可能であろう。



第8図 仙台下ノ内浦遺跡7a層上面の耕作痕
(6c層上面の畑跡プランと合成、S=1/500)

景観と土地利用 畑状遺構の配置をみると、遺跡内で他の遺構との関係が明確になっているのは古代の時期であり、区画は大まかであるが、平行溝群が確実に一定の空間を占めるようになっている。その中には末松A遺跡や粟田遺跡のように微高地と低地の境界といった地勢の境界部に作られ、建物遺構は微高地に築かれるなど、自然地形を巧みに生かした土地利用のあり方が示されている。規則的な配置の例では藤江C遺跡（第4図）と寺家遺跡砂田地区第4層（第5図）が好例である。ともに規則的な配置の建物群を持つ遺跡であるが、藤江C遺跡では建物群の北にまとまって配置され、寺家遺跡では建物群の周辺を埋めるように配置されている点で異なる。藤江C遺跡は建物群と明確に地点を分けており、寺家遺跡では個別の建物群に畑状遺構が付属するように見える。藤江C遺跡のあり方は金沢市畝田ナベタ遺跡に、寺家遺跡のあり方は津幡町加茂遺跡に類似する。やや時期が新しくなると、松任市福正寺ゴコメマチ遺跡（第3図）のように一定規模以上の建物に伴う「園宅地」的な配置を取る例があらわれている。中世は古代とは対照的に大小の区画溝が明瞭であり、面積単位に合致する事例が示すように、区画によって耕地が細かい単位で区分されていることがうかがえる。平行溝群の溝間隔が狭いものが多いこととあわせて、絵巻物で見る畑と一致し、私たちが連想するものに近い。また、東西方向のものが多いことは掘立柱建物跡の傾向とも一致し、当時の集落構造を反映するものであろう。近世は細かい区画が徹底されてくるとともに、近現代の区割りの祖型を形成する。以上のような動態には、当然ながら時代によって集落の構成や、土地利用の意識が変化し、景観も変化していることがうかがえよう。

また、畑状遺構の立地では、23遺跡中10遺跡が扇状地に存在しており、さらにそのうちの8遺跡は手取川扇状地の扇央部に集中するという分布を示す。手取川扇状地の扇央部については、選択基準を満たさないがために取捨された事例も実に多く、平行溝群の多さが特徴的な地域である。こうした様相の背景を考えると、扇央部の地勢は示唆に富んでいる。一帯は一見すると水源に富み、水田に好適なようであるが、実際は地下水位が低く水はけがよすぎるという特性によって利水・保水が難しいことから、経営の安定化は弥生時代に大きく遅れていることが、遺跡の低調な分布から推測される。古代においては遺跡数が急増することから、かなり広域に水田を核とした耕地開発が進むものと推定されるが、その一方で潜在的に畑作が盛んな地域でもあった可能性が高い。それは、同じ地域に弥生・

古墳時代に遡る可能性がある唯一の事例が存在することからも傍証されるのではないだろうか。

栽培植物の問題 取り上げた遺跡間で共通する栽培植物は、縄文時代はシソ・エゴマ類のみである。弥生・古墳時代はアサ、ナス、ヒョウタン類、ウリ類が見られ、雑穀類はアワ、キビが弥生中期に見られるが、以降は見られなくなる。古代も事例は少ないが同様である。中世はそれらに加えてコムギ、オオムギ、さらにはアワ、ソバ、ヒエなど雑穀類や、シソ、エゴマ、ナタネ、トウガンなどが見られ、種類が多い。近世は事例は少なく不明確である。確認された種類で見ると、ウリ類など確実に食用となる栽培植物が増えてかなり普遍化する弥生時代、ムギをよく含みさらに種類が増加する中世に変化が大きい^{*10}。また、加賀・能登の地域間で比較する限りでは、植物種の差は小さいといえよう。

おそらく、実際に栽培されていた植物はこの限りではあるまい。まず、現生種との変移が大きく、栽培種かどうかを判断できない植物については注意が必要である。例えばクワについては、クワ属としての出土例は実に多い。クワは蚕との関係や実が食用になるなど利用目的が多く、栽培種でなくてもクリのように積極的に保護されていた可能性が高い^{*11}。クワが栽培されているとすれば、間隔が広い平行溝群は、草本ではなく果樹のような木本を栽培している可能性がある^{*12}。また、現在行われている土壌選別や科学分析では確認が難しい栽培植物も存在する。例えば重要な栄養源となる根菜類については、かなり古い段階での列島への伝播と栽培化が指摘されている（坪井1979 P281）が、植物遺存体として確認された例は全国的にもほとんどない。また、一般に扇状地などシルト質の土壌では有機質が遺存しにくいという性質があり、選別や分析を行っても成果が得られることが少ない^{*13}。今回の確認例も、畑状遺構とは対照的に、沖積平野の方が多くなっている。栽培植物を考える際には、以上のような根本的な問題点を念頭に置く必要がある。

遺構と遺物の関連 残念ながら畑状遺構と栽培植物の関係が明らかになった例は存在しなかったが、両方の様相をあわせて各時代を考えてみたい。縄文時代は僅少であるが栽培植物が確認されており、畑で栽培されていたとすれば、水田より古くから存在した可能性もある^{*14}。弥生・古墳時代は畑状遺構の事例がほとんどないが、栽培植物の共通性と共伴する畑雑草の多さから、遺跡内かその周辺に畑が普遍的に存在したものと推定する。古代は畑状遺構の事例が急増して活発な地域開発をうかがわせ、間隔の広い平行溝群はこの時代に特徴的である。一方で、栽培植物の種類は古墳時代とほとんど変わらないが、土壌の質とは関係なく遺跡や遺構によっては確認されないといった格差が大きくなっており、その性格がかなり反映されている可能性がある。中世は細かい区画の使用、ムギ類や雑穀類の確認が顕著となり、小規模な二毛作も含めた土地利用の多角化・集約化^{*15}が想定できよう。

おわりに

小文は日本考古学協会2000年度鹿児島大会の際に、石川県内の畑状遺構に栽培植物を加えて集成したことが契機であり、今回、浅学ながら最新の資料と知見を補充して作成した。集成の際には、まず、畑状遺構と栽培植物には具体的な研究が少なく、評価も小さいこと、そして、考古学の中にも水田中心史観が存在しており、その克服^{*16}が必要なが強く感じられ、それらが小文を作成する動機となった。小文での検討は簡単なものであるが、人が畑で植物を栽培するという行為が、その時代や地域の特性を強く反映する文化の一つであり、永く社会・生活を支えてきたであろう重要さを提示できた。

今後の課題と展望であるが、畑状遺構については、古墳時代以前の事例や耕作土が遺存する事例の増加と、それに基づいた検討によって、やがてその構造や変化が明らかにされていくであろう。栽培

植物については畑状遺構で検出された事例が必要であり、やはり良好な事例に期待すると同時に、新たな確認・分析方法にも期待したい。僅少な縄文時代の事例が追加される可能性、陸稲など従来の認識を覆す種類が確認される可能性は十分にある。以上のような成果が期待されるとき、小文が少しでも参考になれば幸いである。

小文の作成にあたっては、伊藤隆三、小阪 大、田村昌宏、湯川善一、横山貴弘の各氏の他、多くのセンター職員からご協力やご教示を得た（五十音順）。末尾ながら記して感謝したい。

注

- 1 ともに水田とは区別される乾燥した耕地、という意の国字であり、「畑」は火と田、「畠」は白と田の会意文字である。明確な典拠はないが、前者は焼き畑、後者は乾燥した水田の意があるという（市販の漢和辞典から）。史料では、古代は「畠」ないし「白」あるいは「白田」のみが見られ、中世は「焼畑」と「定畠」の意で区別されて使い分けられるが、近世には「畑」にほぼ統一されている（黒田1984 P142～P146）。
- 2 モモは弥生時代以降、桃核として多くの出土例があるが、特殊な出土例も目立ち、黄泉国説話にも登場することから、呪術的意味を持つものと推定されている（大山1994）。県内でも出土状況は同様である。
- 3 全国的に見れば、縄文時代でも栽培の可能性がある植物は確認されている。北陸周辺では、マメ類は滋賀県栗津湖底貝塚（早期）や福井県鳥浜貝塚（前期）で確認されており、シソ・エゴマ類やヒョウタンも確認例が多い。
- 4 戸水B遺跡では（財石川県埋文セ2002e・2004b）でキビの報告があるが、前者は遺構の時期が不明確であり、後者はP286表の誤植であるので、その存在は確実とはいえない。
- 5 出土例は多いが、その中でも注目すべき事例について紹介しておく。金沢市畝田・寺中遺跡では種が入ったままのヒョウタン10個体以上がまとまって出土した土坑（古墳時代中期）があり、種抜き作業に関係したものと推定されている。まとまった量が未加工で遺跡内に存在していることから、付近で栽培されていた可能性が高い資料である（財石川県埋文セ2002a、他調査担当者からの教示）。金沢市藤江C遺跡SE7B001（古墳時代後期）では柄杓として加工されたものが出土しており、栽培されていたかどうかはわからないが、その利用方法の一部といえる（財石川県埋文セ2002c）。利用方法としては容器の他、果肉の食用も考えられる。
- 6 この調査区の北側が財団法人石川県埋蔵文化財センターによって平成15年度に調査されており、道の北側でも同様な平行溝群が検出され、道の南北で対称的に展開することが確認されている（財石川県埋文セ2004a）。
- 7 金沢市無量寺C遺跡ではヒョウタンの種子が多量に出土した土坑SK4があり、小型のヒョウタンも伴出している。抜き出した種と利用できないヒョウタンを捨てた可能性がある。（財石川県埋文セ2004d）。
- 8 別地点においても断片的であるが同様の事例がある（羽咋市教委2000）。
- 9 財団法人石川県埋蔵文化財センターによって平成15年度に調査された加茂遺跡F地区では、部分的であるが、耕作土が遺存して畝状の隆起を伴った畑状遺構が検出されている（調査担当者からの教示）。
- 10 富山県では、中村亮仁氏がすでに栽培植物の様相をまとめており、一部石川県との資料共有や弥生・古墳時代の時期錯誤といった問題はあるが、ほぼ石川県と一致する傾向が得られている（中村2003）。
- 11 養蚕は北部九州では遅くとも弥生時代には始まっていたとする指摘があり（布目1979 P18）、古代には北陸からの輸納や栽培の記録もある（同 P87～98）。古代のクワ栽培に対する課税単位は「本」のようであり、一般的な畑作物とは異なっている（木村1992 P83～86）。
- 12 この他の木本では、ウルシや、出土例が多いモモも栽培されていた可能性が高い。
- 13 扇状地に立地する七原町B遺跡や富樫館跡では、陸稲の可能性を考え、畑状遺構の土壌でプラント・オパール分析が実施されているが、栽培植物は検出されていない。また、立地にかかわらず、畑状遺構自体にも収穫や耕作による遺存にくい性質が備わっていることが推定される。こうした状況の下で栽培植物を追求するには、花粉分析により、飛散や移動の少ない虫媒性の花粉に注目するのも一案であろう。
- 14 水田と畑は日本列島においては農耕の両輪であるが、水田に比重を置く農耕は中国中部以南、同様に畑は韓半島から中国北部で伝統的に卓越することから、起源が別の可能性がある。
- 15 中世における畑地二毛作を含む畑作の盛行は木村茂光氏が指摘しており（木村1992 P188～198・P265）、加賀・能登に畑地二毛作が存在した可能性についても山本直人氏の指摘がある（山本1990 P75）。

- 16 網野義彦氏の発言（網野1980 P63～75）が原典であり、木村茂光氏は克服の方法を畑作史研究による農業生産体制の再評価に求め（木村1992 P10～14・29）、山本直人氏は植物遺存体の選別による耕地の復元に求めている（山本1990 P77）。

参考文献

- あ 網野義彦1980『日本中世の民衆像』岩波書店
- い 石川県石川郡鶴来町教育委員会2000『七原町遺跡』
石川県石川郡野々市町教育委員会1992『粟田遺跡第二次発掘調査報告書』
石川県石川郡野々市町教育委員会2001『富樫館跡 蝮土居地区 富樫館跡 鬼ヶ窪地区』
石川県金沢市教育委員会他1983『金沢市二口六丁遺跡』
石川県金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003『石川県金沢市大友西遺跡Ⅲ』
石川県羽咋郡押水町教育委員会1998『御館遺跡』
石川県羽咋郡志賀町教育委員会他1990『赤住遺跡群』
石川県羽咋郡志雄町教育委員会1995『二口かみあれた遺跡』
石川県羽咋市教育委員会1991『四柳白山下遺跡Ⅱ』、1994『吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査』、2000『寺家遺跡—第13次発掘調査報告書—』
石川県松任市教育委員会1998『松任市福正寺ゴコメマチ遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター1982『松任市上二口遺跡』、1986a『剣崎遺跡』、1986b『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』、1988a『佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ』、1988b『竹生野遺跡』、1988c『辰口西部遺跡群Ⅰ』、1988d『八田中遺跡』、1989a『漆町遺跡Ⅳ』、1989b『金沢市米泉遺跡』、1989c『末松遺跡』、1989d『白江梯川遺跡Ⅱ』、1989e『水白モンショ遺跡』、1993『大津ロクベエ遺跡』、1995『荒木田遺跡』、1997『金沢市下安原海岸遺跡』、1998a『木越光琳寺遺跡』、1998b『辰口西部遺跡群Ⅱ』
- お 大山真充1994「桃」『同志社大学考古学シリーズⅥ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- き 木村茂光1992『日本古代・中世畠作史の研究』校倉書房
- く 黒田日出男1984『日本中世開発史の研究』校倉書房
- さ 財団法人石川県埋蔵文化財センター1999『松任市剣崎遺跡』、2000『七尾市三室福浦 B 遺跡 三室まどがけ遺跡』、2002a『石川県埋蔵文化財情報』第8号、2002b『金沢市藤江 C 遺跡Ⅳ・Ⅴ』、2002c『金沢市藤江 C 遺跡Ⅶ』、2002d『金沢市梅田 B 遺跡Ⅰ』、2002e『金沢市戸水 B 遺跡Ⅱ』、2003『石川県埋蔵文化財情報』第10号、2004a『石川県埋蔵文化財情報』第12号、2004b『金沢市戸水 B 遺跡』、2004c『小松市八日市地方遺跡』、2004d『金沢市畝田 B 遺跡 畝田 C 遺跡 無量寺 C 遺跡』、2004e『田鶴浜町三引遺跡Ⅲ』、2004f『珠洲市柏原ミツハシ遺跡・柏原ジッチン遺跡』
- し 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1993『加茂遺跡—第1次・2次調査の概要—』、1994『藤井サンジョガリ遺跡 高畠テラダ遺跡 高畠カンジダ遺跡』、1996『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報7 平成7年度』
- つ 坪井洋文1979『イモと日本人—民俗文化論の課題—』未来社
- て 寺沢 薫1986「畑作物」『季刊 考古学』第14号 雄山閣
- な 中尾佐助1966『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
中村亮仁2003「富山県における植物利用—栽培植物の導入期と変革期—」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- に 日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会2000『はたけの考古学』
- ぬ 布目順郎1979『養蚕の起源と古代絹』雄山閣
- や 山本直人1990「加賀能登における中世集落遺跡の農業経済基盤」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会

津幡町^{りょうけ}領家地内出土遺物の資料紹介

高見哲士 長田政彦 松尾 実

はじめに

本稿は石川県津幡町に所在する領家地内から出土した遺物の資料紹介を行うことを目的とする。

経緯は、金沢市在住の大倉和男氏が著者に本資料を所有している旨を知らせて頂いたことに端を発する。大倉氏は、平成16年度に本センターが津幡町所在の加茂遺跡で発掘調査を行った際の発掘作業員として従事していた。大倉氏は友人から「水道管を埋設する際に出土したものがあり、それらがどのようなものなのか教えてほしい。」との相談を受け、遺物を譲渡された。そして、調査担当の一人である著者に上記の経緯を説明された後に、遺物を実見させて頂いたのである。資料は破片で2点、土師器の皿と弥生式土器の壺である。出土地については、現在南北に縦断している国道159号バイパスより西方から出土しており、同地内にある埋蔵文化財包蔵地、領家遺跡の範囲外であることが判明した。現地確認を行ったところ、沖積地に立地していることが伺える。津幡町南方の沖積低地で調査された貴重な成果^(註1)から、本資料は単なる流れ込みに伴った出土を示唆する可能性よりも、むしろ集落などがあった可能性を示唆すると考えた。さらに、領家遺跡を含む周辺の遺跡から勘案して、多くの新知見が得られ、これを契機に現地点での領家地域の動態を把握することは重要であると感じた。また、埋蔵文化財包蔵地である遺跡範囲外にあることから、それが確実に広がるため、報告する義務と必要性を感じたのである。

本稿では、遺物出土地が領家地内にあることから西方に位置する埋蔵文化財包蔵地の領家遺跡を便宜的に一括し、論を進めることとする。まず、遺物が出土した領家遺跡を中心に周辺の地理的環境を言及し、資料を報告、歴史的環境を考察して、これらのまとめと評価を行いたい。

なお、大倉氏には上記の趣旨を理解して頂いたうえで起稿するに至っている。起稿するにあたり、加茂遺跡発掘調査に従事した金沢大学大学院生の高見哲士氏、奈良大学卒業生の長田政彦氏に経緯とその意義について説明したところ、文化財に対する重要性を理解し、本稿を起す必要性を感じて頂いたため、協力して頂けることとなった。幾度と勉強会を行い、3者による協議を得て検討を行っている。各章の文末にそれぞれの名前を記し、文責とする。(松尾)

1 地理的環境

領家遺跡は、津幡町の北端、かほく市^(註2)と境を接するところにある。津幡町は石川県のほぼ中央、同県の細くくびれるところに位置しており、東に宝達山脈の南端・南能登丘陵や砺波丘陵と呼ばれる低い山地を持ち、西に河北潟を臨む地である。また、丘陵地とそこから潟へ流れ込む中小河川によって形成された沖積平野で構成されている。一方、地理的に見れば、北は能登、東は富山、南は金沢へと通じる地であり、陸上、水上交通の要衝であることが看取される。

本稿で紹介する領家遺跡は、東方にある丘陵から派生する能瀬川の堆積作用によって作られた沖積地上に立地しており、丘陵裾部分は河川の開析により広い谷底平野を形成している。また、当地は越中・能登・加賀に通じており、古来より交通の要衝であったことが推察される。なかでも、古代では津幡町内にある深見駅を分岐点とし、能登は横山駅、越中は坂本駅へとその先を繋いでいる道があっ

たとされている^(注3)。当該遺跡南方における加茂遺跡の調査成果^(注4)からは、古代の北陸道が検出されており、その延長として当該地の近隣を通っていたことが想定できる。また、中世は不明だが、近世には能登へ向かう道は能登街道（七尾街道）が機能していた。これは多田・狩賀野・宇野気を経て七窪・木津・高松へ出る道とされており、当該地を通過していることが窺える。また、河合谷方面を通る梅ヶ谷街道が通っている。さらに、近辺には鉢伏から谷へ出るありご道^(注5)と呼ばれる近道等が存在していたことから、交通路が密であったことが看取される。このように、少なくとも平安時代頃から当該地域は陸上交通における要衝であったことが考えられる。また、現在は干拓されているが、当該遺跡は西に河北潟を臨んでいる。江戸時代には貨物の運搬に限らず、旅人を運ぶ舟運も往来していたようである。少なくとも近世以降は河北潟を利用した水運が整備・運用されていたことが分かる^(注6)。それらを鑑みるに、古くより河北潟が水上交通路として利用されていたことが窺える。

丘陵地と比べ、沖積地は堆積の度合いが多く遺跡は発見され難いが、当該遺跡は谷を抜けた広い平野上に位置しており、越中・能登・加賀を繋ぐ陸運や河北潟を利用した水運を結んだ交通の要衝であったと推定されることから、立地的に人が住むのには好都合だったと考えられる。（長田）

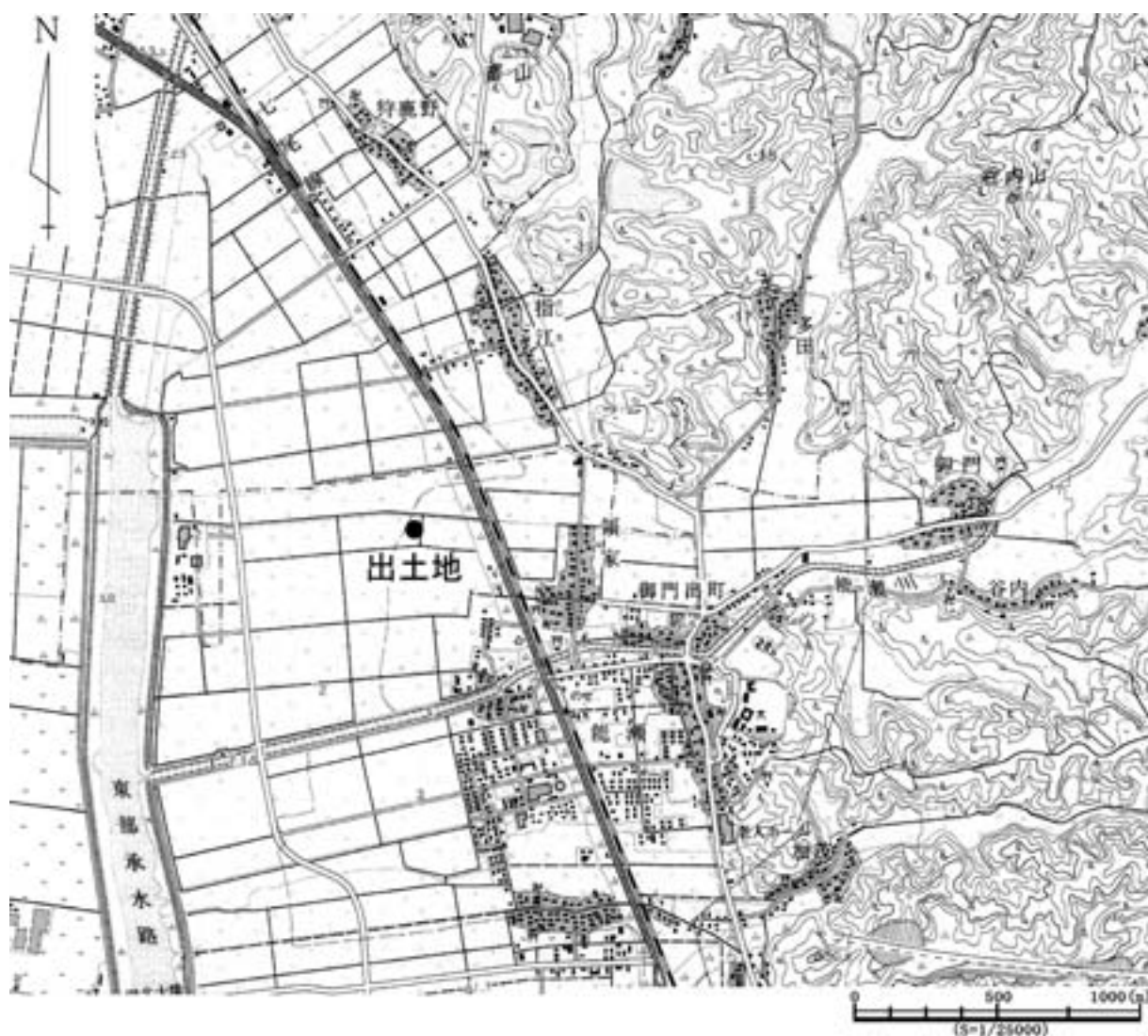


図1 出土地位置図

2 資料報告

(1) 出土地

本資料は、領家遺跡の西方約500mの地点から出土した。現在は、土地圃場整備のためか整然とした水田が広がっており、区画割りがされている道脇にはコンクリート製U字溝が南北に走っている。出土地は図2で示している地点にあり、そのU字溝埋設時に発見されたようである。G.L. (Ground Level=現地表面)はT.P. (Tokyo Peil=東京湾平均海水面) + 約3mにあり、それから下約3m地点で本資料が出土したようである。また、G.L. 下約2.5mでも土器が多く出土したようである。すなわち、T.P. +0.5~±0mの間に遺物包含層があったことが考えられる。本資料以外の遺物の多くは水道管埋設作業完了後、埋め戻し時に排土とともに廃棄されたようで、そのなかで残されたのが本資料となる。なお、周囲が水田といった立地から土質は粘土、シルトなどの沖積地堆積層が想定される。おそらく、いくつかの文化層があったと考える。

(2) 出土遺物

観察所見を種類、器種、法量、胎土、焼成、色調、調整、所見、時期の順に述べていく。なお、色調は標準土色帖^(注7)に依拠する。図2の実測図を参照して頂きたい。

1は弥生式土器の壺底部片である。底部径は6.2cm。胎土は密で、直径3mm以下の白色砂粒(石英・長石・雲母等)、海綿骨針を少量含む。焼成は良好で、やや硬質。色調は、内面が灰白(2.5Y7/1)色、外面がにぶい黄橙(10YR7/2)色となる。調整は、内面にユビ押え痕、縦方向の指ナデが施され、時計回りにめぐる。外面は板状工具によるナデが時計回りに施され、後に一部横方向のナデがある。底面には、植物の圧痕が無数見られる。また、外面と内面には一部黒斑が認められ、焼成方法が野焼きであったと考える。さらに、底部外面から粘土の接合部が認められることから、粘土紐を輪にしてから底部を成形したと考える。時期は弥生時代後期後半に属する^(注8)。

2は土師器の皿底部片である。底部高台の1/2が欠損している。法量は底部径が5.4cm。胎土は

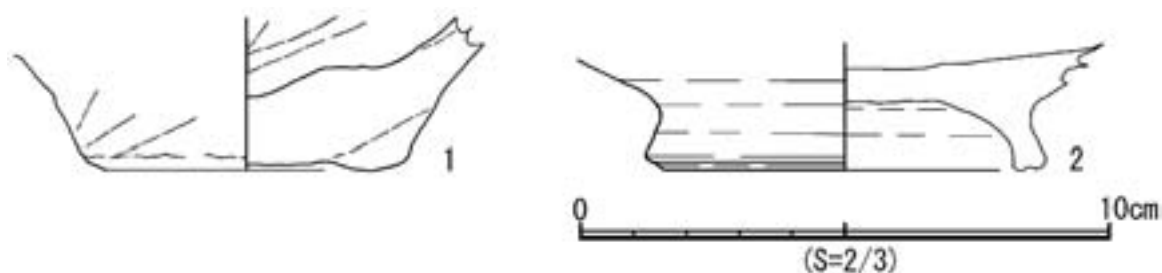


図2 出土遺物実測図



写真1 出土遺物1



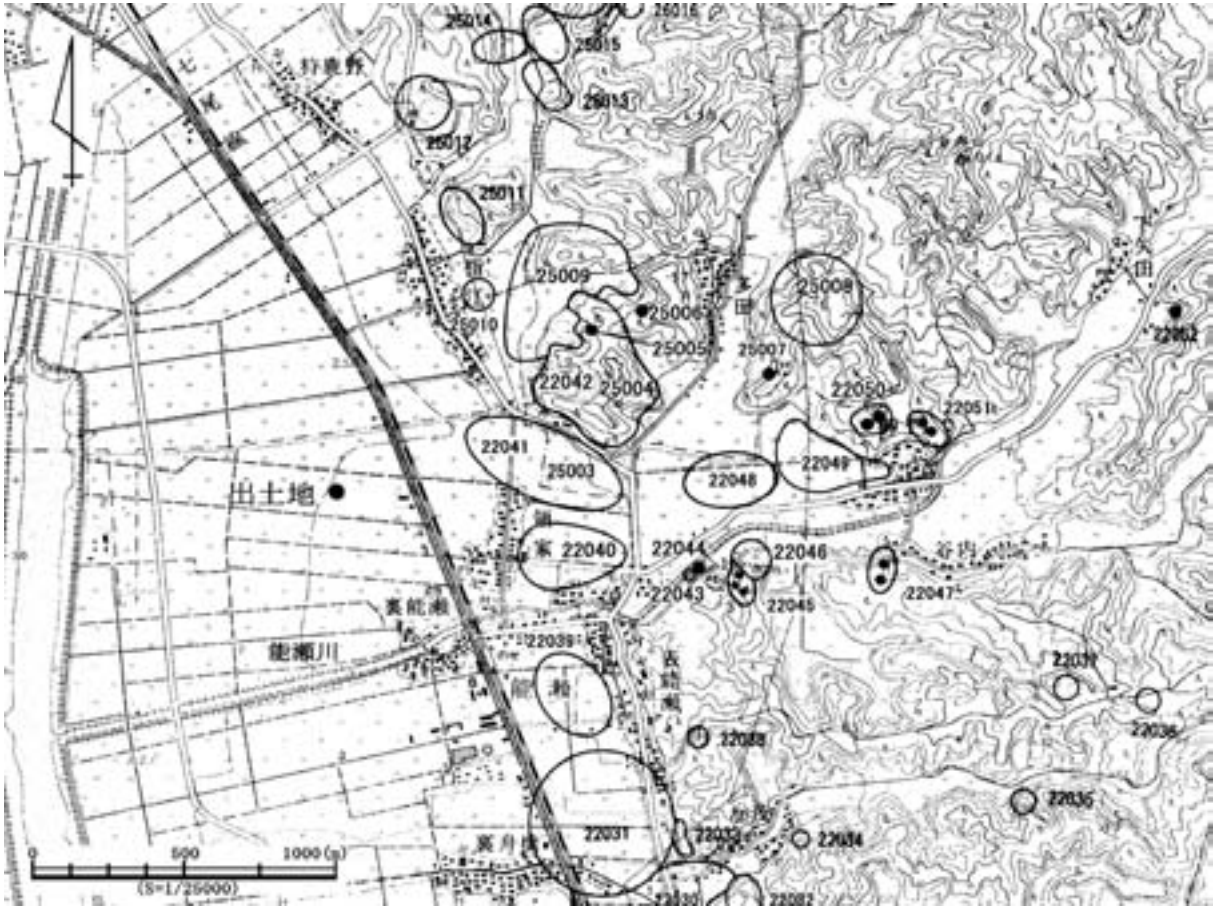
写真2 出土遺物2

密で、直径2mm以下の白色砂粒(石英・長石・雲母等)、海綿骨針を少量含む。焼成は良好で、硬質。色調は、外・内面ともに灰白(2.5Y8/1)色である。調整は内外面ともに回転ナデで、回転方向は時計回りとなる。底面には回転糸切り痕が見られる。高台は底部糸切り後に貼り付け、回転ナデを施したと考える。胎土、焼成などから窯で焼成(酸化焰焼成)されたと考える。時期は平安時代前期(9世紀後葉)と推定する^(注9)。(松尾)

3 歴史的環境

本章では、能瀬川水系の遺跡群を時代ごとに概観し、今回報告する遺物と近年の調査成果を踏まえ、領家遺跡の歴史的評価を行なう。

なお、領家遺跡は1992年に石川県教育委員会が発行した『石川県遺跡分布地図』で奈良時代～中世の複合遺跡として周知されている。



番号	遺跡名	時代	主な遺物	番号	遺跡名	時代	主な遺物
22030	加茂遺跡	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、石包丁、須恵器、墨	22048	御門ジャモテ遺跡	奈良～中世	土師器、須恵器、珠洲焼
22031	加茂神社遺跡	古墳～平安	土師器、古銭、木製品	22049	御門遺跡	奈良～中世	土師器、須恵器、珠洲焼
22032	加茂遺跡マメダシ山地区	縄文～古墳	縄文土器、弥生土器、瓦、軒丸瓦、平瓦	22050	御門A古墳群(1・2号墳)	古墳	土師器、須恵器、珠洲焼
22033	加茂A遺跡	弥生	土器	22051	御門B古墳群(1・2号墳)	古墳	
22034	加茂明神遺跡	古墳	須恵器	22052	下矢田横穴	古墳	
22035	加茂奥宮遺跡	古墳	瓦	22053	指江古墳	古墳	
22036	能瀬クサヤマA遺跡	古墳	土器、石器	22054	多田中世塚	中世	
22037	能瀬クサヤマB遺跡	縄文・平安・中世	土師器、須恵器、磨製石斧、珠洲焼	22055	多田西ヶ峰横穴	古墳	
22038	能瀬神社遺跡	鎌倉	珠洲焼	22056	多田城跡	安土桃山	
22039	能瀬遺跡	弥生～平安	磨製石斧、磨製石鏃、高坏、土師器	22057	指江B遺跡	古墳～平安	土師器、須恵器、墨書土器、埴輪、木簡、玉類、漆器、木製品
22040	領家遺跡	奈良～中世	土師器、須恵器、珠洲焼	22058	指江A遺跡	奈良～平安	土師器、須恵器
22041	領家指江ハシバ遺跡	奈良～中世	土師器、須恵器、珠洲焼	22059	指江遺跡	古墳～中世	土師器、須恵器、珠洲焼
22042	英田広済寺跡	中世	土師器、須恵器	22060	狩鹿野八幡神社裏遺跡	古墳	菅玉木製品、土師器
22043	能瀬イシヤマ遺跡	縄文	勾玉、鉄鏃、ガラス小玉、直刀	22061	指江大堤北遺跡	弥生	土器、砥石
22044	能瀬石山古墳	古墳		22062	上山田遺跡	古墳	菅玉、土器
22045	谷内石山古墳(1～3号墳)	古墳		22063	上山田和田遺跡	古墳	土師器
22046	谷内石山遺跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器、須恵器	22064	上山田東田遺跡	中世	
22047	谷内1・2号横穴	古墳					

図3 遺跡周辺図

(1) 旧石器・縄文時代

能瀬川水系における旧石器時代遺跡は未だ発見されておらず、現時点では縄文時代中期中葉頃から人の活動痕跡が認められるようである。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが丘陵地あるいは丘陵裾に立地している。谷内石山遺跡では、中期中葉の土坑が検出されており、落とし穴と推定されている。これは該期における活動の一端を示しており、東側の山間部で狩猟活動が行われたことが窺える。周辺の丘陵上においてもこれらの活動痕跡が遺存する可能性は十分予想される。

後期になると、往時の状況がより詳しく見られるようになる。能瀬クサヤマ遺跡から流紋岩質の磨製石斧が採集されており、宝達山東方の鶏坂付近からその石材が入手された可能性を指摘されている^(注10)。気屋遺跡でも出土した磨製石斧の4割が宝達山系の流紋岩で構成されており、他の出土石器の石材も遺跡から40km 圏内で入手可能とされている^(注11)。これらの成果から、能瀬川水系でも生活に密着して使用される石器の素材は周辺でまかなえたことが窺えよう。ただし、実証できるデータが不十分で、遺跡間の相関関係についても言及できないのが現状であり、将来の検証・検討作業が不可欠となる。他に、気屋遺跡では礫石錘や土器片錘、石皿、敲石が出土し、動物遺体分析では魚類、鳥類、哺乳類で焼けた痕跡があると指摘されている^(注12)。また上山田貝塚も豊富な動物遺体資料で知られ、他に石錘等が出土している^(注13)。これらの遺物の特性からは、漁撈、狩猟、植物採集、食料加工（調理）をしていたことが想起され、生業、生活の一端を知ることができる。特に川・海・沼・潟等の水域を資源獲得領域とした漁撈活動が行なわれていたことは想像に難くない。能瀬川水系においても同様な推測ができるが、調査事例が多くないため具体的な様相を示すことは難しい。近年、低湿地における調査事例が全国的にも増加していることから、その条件を満たす当該地域においても遺跡が遺存している可能性は否定できないため、注意を要する。

以下では、立地からその可能性を考察したい。

能瀬川水系における平地での縄文遺跡は河北潟の海進・海退による海面水準の変動と関連性がある。藤氏の推定^(注14)によると、縄文早期から河北潟の海面高度は現海水面から+5m 程度であり、中期頃には現在とほぼ同じ海面水準となり、指江付近は水域であったという。中期末葉以降は海面水準が低下し、現海水面から-2m 程度を推定している。また、平口氏は上山田貝塚の立地分析において河北潟の縄文時代前期の汀線を T.P. +2.5m、中期前葉後半の汀線を T.P. +1.2m とする仮説を提示している^(注15)。そこで、領家遺跡周辺には平地に立地する縄文時代の遺跡が幾つか存在するため、河北潟の海面水準の変動を反映するこれらの遺跡の標高を検討し、低地における遺跡が遺存されている可能性の有無を見出したい。平野に立地する指江 A 遺跡は未調査であるが、縄文時代の石匙が採集されており、現地表の標高は+2.7~3m を測る^(注16)。丘陵裾部に立地する指江 B 遺跡では縄文時代後期の土器片が4点出土しており、最も標高の低い出土地点で約+5.5m となるが、これより下層に縄文時代の集落が存在する可能性が指摘されている。指江遺跡では、縄文式土器（後期か）2点が出土しており、検出された標高は約+3.2m である。これより下層に文化層の存在が想定できよう。そして、領家遺跡における縄文時代の文化層は標高約±0m より下となることが想定できる。さらに、加茂遺跡では、縄文時代中期末葉～後期頃の河道が検出された標高は約+3.7m である^(注17)。当該遺跡南約4km に位置する北中条遺跡では縄文時代の遺構検出面の標高は約+3.7m で、後期中葉以降の土器が一定量出土している。低地においては概ね T.P. +3.7m を目安にして広範囲に縄文時代の遺跡の存在が予想できる。将来、それより下層にも縄文時代の遺跡の存在が予想される。

このように、平地に立地する周辺の遺跡からは、縄文時代の遺構・遺跡が次々と発見されており、

能瀬川水系における低地進出の可能性は十分に予想される。さらに、斎藤氏の現河北潟沿岸の測量によると、能瀬川流域の低地は堆積作用によって微高地が形成されたことが明らかになっている^(注18)。上記の藤氏や平口氏の河北潟水位の推定を勘案すると、領家遺跡の地表の標高は縄文時代中期末葉以降、河北潟の水位を上回り、陸地であったと推定できる。よって、河北潟や能瀬川等の水域を利用した生業活動に適した環境に立地する領家遺跡において、陸地であった縄文時代中期末葉以降の遺構・遺物が遺存する可能性は十分に予想される。

以上、縄文時代後期では河北潟の水位は低下しており、人の活動範囲が広くなり、平地へ進出した可能性が指摘できる。河北潟に面した低位の丘陵斜面あるいは平地を生活領域とし、その周囲の水域と山間部を資源獲得領域として生活を営んでいたことが考えられるが、あくまでも想定のをでず、縄文時代の平地での活動や、環境がどのようなであったか未だその様相は明らかでない。こうした点を解明する上で領家遺跡は重要な意味を持つ遺跡といえる。

(2) 弥生時代

能瀬川水系における弥生時代の遺跡は少数であり、谷内石山遺跡、能瀬川の谷口の左岸に領家遺跡、右岸に能瀬遺跡、指江 B 遺跡が分布する。そのうちの指江 B 遺跡では前期末～中期前半頃の条痕文系土器が発見されているが、それ以外の状況は不明である。以降は空白となり、後期になると遺跡が散見される。T.P. + 約30m の狭い尾根上にある谷内石山遺跡では、後期後葉の断面 U 字状の環濠を持つ集落址が見つかった。計4棟の住居址が検出されているが、土採りによって破壊された部分を含めると10数棟存在していた可能性を示唆している^(注19)。ただし、環濠についてはその機能と性格を特定するのには疑問の余地がある。また、丘陵上の高地に立地する集落は鉢伏茶白山遺跡(後期)、加茂マメダン山遺跡(中期～後期)でも検出されている。後期になって増加する傾向^(注20)を示すようであり、周辺の動向と連動していた可能性がある。なお、当該地域でも地形から勘案して墳丘墓などがある可能性が予想される。

一方、平野部における遺跡の動向は現在のところ不明である。『津幡町小史』、『津幡町史』によると、能瀬地区内からは、太形蛤刃石斧と磨製石鏃が採集されており、平野における弥生文化の受容・展開を考える上で示唆的といえる。また、今回報告した出土遺物1は、弥生時代後期後半の時期にあたる。出土地は図1で記した箇所で、平地にも遺跡が広がることが判明したことは、当該地域の動態を考えるうえでも重要と考える。加茂遺跡を例にとると、弥生時代中期～後期の水田・住居址が検出されており、谷口の平地に稲作水田農耕が営まれていた証左となる事例が提出されている。さらに加茂遺跡で磨製石包丁や蛤刃石斧が発見されることはその傍証となり、弥生文化が少なくとも後期には当該地域の平野部にも受容・定着したと理解できる。そして、加茂遺跡付近の地形は、小河川に開析された丘陵と堆積によって形成された谷部の平地で構成される。この地形は規模の違いはあるものの能瀬川水系の地形と類似性が認められるため、能瀬川流域においても、少なくとも当該時期には丘陵上と平地に集落などが展開して土地利用を行っていたと推測する。後期におけるこれらの状況は、中小河川沿いに集落が定着する時期にあたり、「弥生時代後半期に拠点集落は分散・解体し、水系を基盤とする小地域ごとの集落群の核を形成した。」との指摘^(注21)と一致するようである。しかし、安氏も指摘している通り北加賀地域に卓越する規模の集落が存在しないため、規模による格差を検討できない状況にある。河北潟北東岸という地域レベルで見ると、小河川流域単位ごとに集落が営まれていることが看取されるが、データの蓄積を待つより他ない。

(3) 古墳時代

能瀬川の兩岸には能瀬石山古墳、谷内石山古墳群(全て円墳で、1号墳径約19m、2号墳径約14m、

3号墳径約8.5m)、御門A・B古墳群(円墳2基、方墳2基でそれぞれ径約8m、辺約10m)指江古墳(方墳辺約12m)、谷内横穴墓群、下矢田横穴墓、多田西ヶ峰横穴墓が存在しているが、詳細が判明しているものは少ないのが現状で、概して小規模な古墳が多い傾向を示唆する。なかでも、古墳時代中期後半～後期の円墳(径約10m)である能瀬石山古墳からは副葬品が出土しており、被葬者の性格が窺える。副葬品は勾玉、ガラス小玉、鉄製直刀、鹿角装直刀、鉄鏃があり、武器が多いことも注目される。なお、周辺地形から勘案して未発見の古墳があることは予想に難しくない。これらの能瀬川流域の古墳の編年は、小嶋氏によって試案が提示されている^(注22)。すなわち、4世紀前半に御門A古墳、5世紀に谷内石山古墳、5世紀後半に能瀬石山古墳が造営されたとする見解である。ただし、資料的な制約があるため、将来各古墳の調査や新規古墳発見のために修正される余地は残されている。

集落についても調査事例が少ないため、詳細は不明である。ただし、指江B遺跡からは掘立柱建物や河道などが確認され、貴重な成果が上がっている。当該地域を考える上で特性として捉える貴重な遺跡であるため、以下では指江B遺跡を中心に述べていきたい。集落は谷筋に中期末以降、連続と継続して営まれていたことを示唆しており、居住域として安定した利用がなされていたと理解する。掘立柱建物が幾度と建替えがなされていることは、その傍証となると考える。また、後期の河道からの出土遺物は多く、玉類や須恵質埴輪などが発見されており、特異な遺物の存在が注目される。玉類については、遺跡内に製作遺構がなく、未製品も少ない。さらに玉の材料が、ガラスや緑色凝灰岩を使用していることを考慮すると、遺跡外から製品を入手したと推測できる。このことから、交易あるいは交換による物品の入手が窺え、指江B遺跡が拠点的な性格を有していた可能性を示唆する。また、周辺に埴輪を配置した古墳の存在が想定されている。特に、須恵質埴輪は、南加賀の二ツ梨殿様池窯跡群で生産された可能性を示唆しており、政治的・社会的動向を考える上で示唆的である^(注23)。特筆すべきは、百済系とされる韓式系土器の存在であり、直接・間接的にも渡来系集団との関係性が濃密といえる。石川県下では、その研究はほとんどなされていないが、渡来系集団は、地域を支配する首長の政治的・社会的変革があった事象と大きな関係性があったと考えられ、重要といえよう^(注24)。

指江B遺跡は、陶邑産の須恵器が搬入され、埴輪を有した古墳が周辺に存在したことなどから畿内の影響を少なからず受けたことを示唆している。従来の支配システムが不安定であり、その補完として外部もしくは新規の力を利用した可能性も考えられる。当該地域においても畿内王権との関連性があったことを指摘する。さらに、渡来系集団が、従来の支配者構造に組み込まれた可能性があり、より強固な基盤を築いたと考える。土地の開発や技術などの分野で活躍したかもしれない。このような動向があったことは、周辺に影響を与えなかったとは考え難く、領家遺跡においても関連する遺構などの存在が予想される。

(4) 古代

能瀬川水系の遺跡分布は、谷口に御門遺跡、御門ジャモチ遺跡等があり、さらに指江B遺跡、領家指江ハシバ遺跡、能瀬遺跡が丘陵沿いの平野部一帯に広がる。丘陵地では谷内石山遺跡、能瀬クサヤマB遺跡が存在している。これらの遺物の出土分布は、谷部の平野に沿って遺跡が偏在しているため、生活領域の中心が平地にあったことが看取される。

指江B遺跡では、四面庇付床張建物が発見され、出土した木簡には「大国別社」、墨書土器には「寺」の文字が確認されている。その性格は宗教施設と考えられており、重要拠点であったとされている。建物周辺には、河道からは漆かきとり棒、漆液容器などが出土しており、8～10世紀にかけて漆生産が経営されていたことが判明している^(注25)。鍛冶生産をおこなっていた証左となる鑄の羽口も出土している。宗教施設周辺では、専業集団による手工業生産経営の存在が読み取れ、分業体制が確立した

事象として捉えられる。交通面でも、能登国や越前国からの人や物資の移動が指摘されており、こうした物資や土地の管理施設あるいは管理者がいた可能性が指摘されている^(注26)。他に谷内石山遺跡では奈良時代後半～平安時代前期頃の畝間溝が検出されており、畑作が行われていたと考えられている。近年、勝示札が出土した加茂遺跡からは、奈良時代初頭には構築され9世紀後半には管理を放棄された古代北陸道や、外国製の方形帯金具、多量の墨書土器等が発見されている。古代北陸道は深見駅より能登方面と越中方面に分岐することが考えられており、勝示札に「深見村」の記載がある点や深見村には関がある可能性^(注27)もあることを考慮すると、この地域が交通上重要な役割を果たしたと推測される。また、方形帯金具は渤海使との関連が窺われる。さらに、加茂遺跡の北にある加茂廃寺跡では大型掘立柱建物や瓦塔が発見され、寺院と駅家との関係性が注目される。今回採集された出土遺物2については、従来の領家遺跡の遺跡範囲より西側にあることから、居住域が広がることを示唆し、低地に展開した可能性を指摘できよう。

また、当該期は全国的に土地開発が各地で行われていたことは周知されている。地域においても北陸道施工に伴い、周辺地形の整備も行われていたと考えられる。当該期には、少なくとも9世紀中頃には条里制が施行されていたことが文献によっても裏付けられており、北中条遺跡周辺において試案が提出されていることは示唆的である^(注28)。ただし、古代の条里制にともなう坪境が地籍図などによって反映されているかといえ、多に疑問であり、将来平地部を調査されるに際して、断面観察と平面による擬畦畔の確認を行い、検証していく必要がある。

(5) 中世以降

中世以降の領家遺跡周辺の遺跡は、数多く存在するがほとんどが詳細不明である。領家指江ハシバ遺跡からは陶磁器が出土し、他の遺跡では珠洲焼が採集されていることは、人の活動領域が丘陵地から平地までより広がったことを示しているといえ、古代よりもさらに開発が増したと考える。

多田と領家にまたがる標高約30mの丘陵上には英田広済寺跡が存在し、『石川縣河北郡誌』の記述から文献上の廣済寺に比定されている。調査では、丘陵上に平坦面や切岸・曲輪状の地形が形成され人為的改変が行なわれたことが判明している。『官知論』には、15世紀末に廣済寺を中心とする一向一揆側の将兵五千余騎が富樫政親救援軍を撃破したと記されており、当時は能瀬川流域における中心的役割を果たした寺院であった。しかし、その所在地については様々な説があり、能瀬川上流の菩提寺や16世紀末の金沢移転前には領家集落の西の河北瀧寄りにあったと伝承されている^(注29)。廣済寺の所在地は未だ確定できていないが、地理的に近接している領家遺跡とその西側は英田広済寺と深い関連を持つと考えることができ、広済寺跡と関連する遺構が存在する可能性がある。

一方、能瀬川右岸の標高約77mの丘陵上に中世の山城とされる多田城跡がある。多田城は『越登賀三州志』や『石川縣河北郡誌』に記述がある。調査では、南側に対して防御する意図を持った短期的城塞であった可能性を指摘する。また、谷内尾氏は主郭と付属施設で構成され、防御施設を持つBⅡ型に分類し、在地土豪クラスの詰城として築城されたと推定する^(注30)。周囲の城館跡には、上記の一向一揆系城館寺院である英田広済寺跡、鉢伏茶臼山城跡とその出城的位置にある森城跡、上田山城跡があり、河北瀧と東に広がる山間部との間に並ぶように立地する。後述するが、河北瀧沿いの道が通っており、城館跡がそれぞれ河北瀧北東岸の陸路の要所を押さえる役割を持っていた可能性を指摘できる。

中世以降では文献に多くの当該地域における記載があり、具象として捉えられるが、資料批判による精緻な研究が行われる必要がある^(注31)。以下に概観してみたい。

中世には領家遺跡付近は南英久保と井上庄の境界付近となった。13世紀初頭に北英久保の地頭代覚

心と現在の宇ノ気町付近の金津庄雑掌法眼祐豪による土地争いがあったことが、『温故古文抄』に記されている。また、『祇園社記』によれば、14世紀半ばに北英久保の萱野が梶井門跡から祇園社祈禱領所に安堵されたと記載される。その後、萱野は守護富樫昌家の被官河口氏らが押領したため、祇園社が訴え、室町幕府は守護富樫氏に押領停止を命じている。

その後も萱野は在地有力者による支配が進むが、一般にこの時期は荘園の管理・支配を在地有力者である地頭に委ねざるをえなくなる時期に当たる。南英久保に含まれる領家付近も上記のような土地争いが起き、こうした動向を受けたと考えることができる。

南北朝時代には守護富樫昌家の弟満家が英田小次郎を名乗り、英久保との関連を示す。萱野の押領も富樫氏が絡んでおり、さらに、『遊三国嶺記』には富樫氏が地頭職にあり、領家付近に居住したことが記載されている。この時期、領家遺跡付近は地域支配者であった富樫氏の管理する田地の一部であり、付近に居館が存在した可能性がある。

15世紀末には聖護院門跡道興が残した旅行記『回国雑記』の和歌に津幡付近が散村であったことが記されている。彼が津幡から高松方面へ移動する際に領家付近を通過したことが指摘されている^(注32)。守護大名富樫政親を一向一揆が打倒した後、16世紀には加州三ヶ寺と超勝寺や本覚寺との争いが加賀に及び、英田広済寺が超勝寺・本覚寺統制下に置かれている。『天文日記』によれば一向一揆体制下にあつて、河北五番組として組織された有力農民の中に指江や能瀬、谷内の名が見える。これらの名が見られる記述は主に土地・年貢問題に関するもので、有力農民の勢力が体制の基礎を担っていたことが分かる。この時期、能瀬川水系は農地に立脚した経済基盤があり、村落レベルで統合された組織があった。領家遺跡付近は有力農民らの田地あるいは居住地であった可能性がある。

近世の領家は、河北郡領家村として加賀藩の支配に組み込まれた。領家村の周囲には、舟橋村、能瀬村、谷内村、御門村、多田村、指江村がある。17世紀には領家村の百姓数が26であったことが『高免付給人帳』に記され、19世紀には『河北郡村々書上帳』に245人、『高免家数人数等書上』に290人であったことが書かれている。これは、領家村の開発が進み、人口が増加したことを示している。また、19世紀の十村役名に野瀬の名が見え大庄屋が近世後期に存在したことが分かる。そして、「能州道中図」に津幡から高松への経路に領家付近を通る道が描かれている。また、「加州河北郡図」や「賀州河北郡図籍」には舟橋に舟橋不湖、狩鹿野に狩鹿野不湖と呼ばれる入り江が描かれていたが、19世紀半ばの「河北郡分間絵図」では陸地に干拓されている。不湖の利用について、斎藤氏は周期的な水稻耕地と漁場であり、畝田として標高の高い部分から開発されたと指摘する^(注33)。19世紀には大庄屋を輩出できる程の経済基盤を不湖や河北潟の開発によって得ていただろう。その他、近世の領家周辺の文化財には能瀬道標が残っている。御門・種方面と高松方面の分岐点にあり、領家付近に三叉路があったことが指摘され^(注34)、近世においても交通路が領家付近を通っていたことが分かる。

領家遺跡付近は河北潟と能瀬川による堆積地形を利用した活動が行なわれてきた。現在では七尾線や産業道路が通り、宇ノ気と津幡を結ぶ交通の面でもこの地域が一定の役割を果たしている。(高見)

4 まとめ

本資料は、領家遺跡西方約500mの箇所で見られている。遺跡の範囲外で大幅に範囲が拡張、改定されることとなる。また、当地域は従来から古代からと考えられていたが、本報告によって少なくとも弥生時代から連続して遺跡が形成されていた可能性がでてきた。本資料は、少なくとも当地域における弥生時代からの歴史を解明する上で重要であると評価したい。

縄文時代については、後期段階で一定の石材流通網が構築されていた社会の一端にあることが窺え、かつ生活の場が丘陵や、海水位の影響を受けながらも平野部で展開されていたことが想定できることを指摘する。縄文時代の平地での活動や、それぞれの小河川や谷と河北潟がどのような環境であったか明らかにする上で領家遺跡は多くの示唆を与えるデータを残すと考える。

弥生時代の領家遺跡は、出土遺物1から能瀬川水系に居住した集団の平地利用の一端を知る上で示唆に富み、集落や水田などといった居住域、生産域があった可能性を指摘する。また北加賀における集落の動態・様相を考察する上で貴重なデータを有する遺跡といえよう。

古墳時代では、能瀬川水系の谷口周辺流域が中期末頃には畿内の影響を受けた地域であることが指摘できる。さらに、後期になると、渡来系集団も居住した地域といえ、低地における領家遺跡の様相も関連性が示唆され、注目される。

古代では、出土遺物2からは当該期の遺跡がより西側にある可能性が高くなったことは、集落や施設などの居住域があった可能性を指摘する。さらに、古代北陸道の経路が森田氏^(注35)や三浦氏^(注36)によって推定されており、双方の推定とも加茂～指江間を通るものとなっている。そのため、領家遺跡は古代北陸道をはじめ当時の交通とその管理者に関する重大な発見があると予想される。文献との検討を含め、領家遺跡は加賀立国前後の律令国家による地域支配の一端を明らかにする上で極めて重要な地域である。

中世以降は、東に広がる山林と能瀬川の水利用で支えられた幾つかの農村が存在し、能登への交通路が通っていた要所であった。そして、その農村を統合した小地域の有力者が管理を行なったと考えることができ、将来これらを実証するデータを得る必要があろう。

本資料は、沖積地における遺跡の存在と各時代の様相を示唆するものとして貴重な資料であると評価したい。また、領家遺跡周辺は河北潟の汽水域の変動、縁辺の土地利用などに関して示唆に富む情報が得られ、自然環境と人々の土地利用の変化を考える上でも興味深い地域であるといえよう。なお、近代についてであるが、領家遺跡は主



写真3 地籍図表紙紙



写真4 領家村地籍図（紙上が北方位）



写真5 領家村地籍図全図

に生産域であったことが判明している。現在の集落あたりは、神社や墓地などがあり、自然地形に即した区画の水田が営まれていた。また、河北潟に面するところは水田となっており、東西に細長い短冊形に区画されている^(注37)。

本資料の保管場所についてであるが、冒頭に大倉氏が所管していたが、後になって著者に遺物を譲渡された。しかし、文化財（共有財産）を私物化するのは資料の再検討、再評価がされにくい。一個人が保管するよりは、公的機関に譲渡して保管してもらうことが本義ではないかと考えた。そこで、本資料の出土地が津幡町の行政区画内にあるため、津幡町教育委員会生涯学習課の中嶋氏、戸谷氏を伺ったところ、遺物の保管について快く承諾して頂いた。よって、本資料は津幡町教育委員会が保管していることを明記しておきたい。本稿の資料が広く活用されることを切望する。

今回のような工事に際して発見された遺物はわずかであるが、多くは埋め戻し時に廃棄されているようである。本来ならば、文化財担当者に連絡するところである。このような事態を事前に防ぐために、各行政機関においても関連する他部署に文化財の法的かつ歴史的 understanding を得る必要があることを強調したい^(注38)。さらに、文化財に関する情報（立会・試掘などの調査報告）は周知する根拠となるため、開示されることを提言したい。

最後に、資料の収集にあたり、徹底したものとはいえず、また十分に活かすことができなかったことは大いに反省すべき点である。ご教授・ご叱正頂けば幸いであり、今後の糧としたい。本報告に際しては、資料提示、譲渡して頂いた大倉和男氏をはじめ、以下の機関、方々からご教授、ご協力を頂いた。氏名を記して感謝の意としたい。

石川県立図書館 英田 慧 大倉和男 大西 顕 杉本芳江 鈴木真之 柿田祐司 濱田景子
久田正弘 廣田典之 中嶋徹朗 戸谷邦隆 安 英樹 柳生俊樹

(高見、長田、松尾)

【補注】

- (1) 津幡町内に所在する加茂遺跡、北中条遺跡、中橋遺跡等。津幡町教育委員会 戸谷邦隆氏よりご教示頂いた。
- (2) 平成14年の市町村合併により、旧宇ノ気町、七塚町、高松町が新市名「かほく市」となった。
- (3) 平川南監修・(財)石川県埋蔵文化財センター編2001『発見！古代のお触れ書き（石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札）』（株）大修館書店
- (4) 同注3文献他加茂遺跡関連は参考文献参照。
- (5) 宇ノ気町史編纂委員会1991『宇ノ気町史 第二輯別巻集落誌』石川県河北郡宇ノ気町
- (6) 内日角村の波止場から須崎村に達する漕下りは公用の場合に利用されていたが、安政七年（1778）になってからは許可書があれば商人荷物の運送も許されるようになった。また、明治になってからはテント船と呼ばれる船で各地と交通し、テント組という株組織が作られていた「石川県津幡町史」。
- (7) 小川正忠・竹原秀雄編2004『新版 標準土色帖』（26版）農林水産省農林水産技術会議事務局監修 日本色研事業（株）
- (8) 久田正弘氏・安英樹氏よりご教示頂いた。当該資料の時期は下記の編年案に準拠した。
楠正勝1996「第5章まとめ 第1節 弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』（『金沢市文化財紀要』119）金沢市・金沢市教育委員会
- (9) 柿田祐司氏よりご教示頂いた。当該資料の時期は下記の編年案に準拠した。
望月精司1991「第5節小結」『戸津古窯跡群Ⅰ』小松市教育委員会
望月精司1992「第4章出土遺物 第5項 須恵器のまとめ」『戸津古窯跡群Ⅱ』小松市教育委員会
- (10) 津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』
- (11) 藤則雄1996「第4章第4節第2項 石器の石質」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会
- (12) 平口哲夫1996「第6章 気屋遺跡出土の動物遺体」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

- (13) 宇ノ気町教育委員会1979『上山田貝塚―石川県河北郡宇ノ気町上山田遺跡調査報告―』
- (14) 藤則雄1970「第二編 十五 地形と地質」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場
藤則雄1983「北陸における新石器時代の海水面変動と気候変化」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- (15) 平口哲夫1984「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境」『石川考古学研究会々誌』第28号 石川考古学研究会
- (16) 以下の出土高・標高値は石川県発行「昭和49年8月測図 地形図 五千分の一」と各報告をもとに概算した。
指江 A 遺跡・領家遺跡は上記の地図から、指江遺跡・指江 B 遺跡は石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2002『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』による。指江 B 遺跡の縄文集落の可能性については、大西顕2002「第4章第2節 平成11年（1999）年調査」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センターが指摘している。なお、領家遺跡は上記の地図から現標高を概算し、今回報告する遺物の出土高から推定した。
- (17) 2004年度加茂遺跡調査においての成果を松尾氏よりご教示頂いた。
- (18) 齋藤晃吉1970「個別研究三 河北潟々開墾史」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場
- (19) 津幡町教育委員会1980『津幡町谷内石山遺跡』
津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』
岡本恭一2004「谷内石山遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第12号』石川県埋蔵文化財センター
- (20) 安英樹氏よりご教示頂いた。
- (21) 安英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター
- (22) 小嶋芳孝1979「北加賀地域の概観」『北加賀地域古墳群分布調査報告』石川考古学研究会 能瀬石山古墳に関して津幡町教育委員会1990『津幡町谷内石山遺跡Ⅱ』による。
- (23) 指江 B 遺跡の古墳の存在と須恵質埴輪に関しては、以下を参照した。
久田正弘・松尾実2003「指江 B 遺跡出土の埴輪片をめぐって」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター
- (24) 鈴木靖民編2001『倭国と東アジア』日本時代史2 吉川弘文館
- (25) 四柳嘉章・四柳嘉之2002「第5章第1節 宇ノ気町指江 B 遺跡出土漆器の科学的分析」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
- (26) 湯川善一2002「第8章第2節 指江 B 遺跡出土二～十号木簡」『宇ノ気町指江遺跡・指江 B 遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
- (27) 平川南2001「第4章第2節 古代の通行手形 - 過所様木簡」『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』平川南監修 石川県埋蔵文化財センター編 （株）大修館書店
- (28) 津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』石川県津幡町役場
- (29) 宮本哲郎1991「英田廣濟寺跡を訪ねて―城郭寺院調査の記録（19）―」『石川考古』第204号 石川考古学研究会
- (30) 谷内尾晋司2002「第2章第1節 城館跡概観」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』石川県教育委員会
- (31) 中世以降における史料の記述は、主に以下の文献によった。
河北郡役所1920『石川県河北郡誌』、津幡町役場1962『津幡町小史』・津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』津幡町役場、宇ノ気町史編纂委員会1970『宇ノ気町史』宇ノ気町役場、同1991『宇ノ気町史第二輯別巻集落誌』宇ノ気町役場、角川書店1981『角川地名大辞典』、平凡社1991『日本歴史地名大系第17巻 石川県の地名』、石川県教委 94年・95年・02年
- (32) 瀬戸薫1994「第1章第2節 中世の北陸道」『北陸道（北国街道）歴史の道調査報告書第1集』石川県教育委員会
- (33) 同注18
- (34) 石川県教育委員会1995『能登街道Ⅰ 歴史の道調査報告書第2集』
- (35) 森田悌1992「古代加賀国の駅制」『日本海域研究所報告』金沢大学日本海研究所
- (36) 三浦純夫1995「古代」『能登街道Ⅰ 歴史の道調査報告書第2集』石川県教育委員会
- (37) 明治24年に作成された地籍図を基にした所見である。河北郡英田村の地籍図は石川県立図書館が収蔵している。領家はその内字として所収。領家は全図38葉で構成され、一葉にまとめているものもある。なお、写真6にあ

る色分けは田畑などの種類によるものではない。多種の地籍図が収蔵されており、旧地形、土地利用等が伺える。一般にも閲覧でき、調査にあたって大いに参考になると考える。なお、写真の掲載許可を頂いた。

(38) 以下の提言には共感できることが多い。

森岡秀人2004「遺跡の個性は地域から発信を」『古代学研究』166号古代学研究会

【参考文献】

〔報告書〕

石川考古学研究会1979『北加賀地域古墳群分布調査報告』

石川県立埋蔵文化財センター編1984『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ（昭和54・55年度）』石川県教育委員会

石川県埋蔵文化財センター1988『津幡町刈安野々宮遺跡』

石川県教育委員会1992『石川県遺跡分布地図』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1993『加茂遺跡―第1次・第2次調査の概要』

石川県教育委員会1994『北陸道（北国街道）歴史の道調査報告書第1集』

石川県教育委員会1995『能登街道Ⅰ 歴史の道調査報告書第2集』

石川県教育委員会1999『海の道と川の道・補遺歴史の道調査報告書第6集』

平川南監修・石川県埋蔵文化財センター編2001『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』（株）大修館書店

石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2002『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』

石川県教育委員会2002『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』

宇ノ気町史編纂委員会1970『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

宇ノ気町史編纂委員会1991『宇ノ気町史 第二輯別巻集落誌』石川県河北郡宇ノ気町役場

宇ノ気町教育委員会1979『上山田貝塚―石川県河北郡宇ノ気町上山田遺跡調査報告―』

宇ノ気町教育委員会1987『宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡』

宇ノ気町教育委員会1996『宇ノ気町気屋遺跡』

金沢市・金沢市教育委員会1996「金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ」（『金沢市文化財紀要』119）

河北郡役所1920『石川県河北郡誌』

小松市教育委員会1991「戸津古窯跡群Ⅰ」

小松市教育委員会1992「戸津古窯跡群Ⅱ」

石川県津幡町役場1962『津幡町小史』

津幡町史編纂委員会1974『津幡町史』石川県津幡町役場

津幡町教育委員会1980『津幡町谷内石山遺跡』

津幡町教育委員会1985『竹橋柚木谷遺跡』

津幡町教育委員会1990『谷内石山遺跡Ⅱ』

津幡町教育委員会2002『北中条遺跡A区』

〔論文・報告その他〕

伊藤雅文1999「48吉原親王塚古墳・法華堂古墳群」『金沢市史資料編19考古』金沢市

大西顕2002「第4章第2節 平成11（1999）年調査」『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター

柿田祐司・空良寛・久田正弘・松尾実2004「加茂遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第12号』石川県埋蔵文化財センター
角川書店1981『角川日本地名大辞典17石川県』

兼田康彦2000「加茂遺跡」石川県埋蔵文化財情報第4号』石川県埋蔵文化財センター

北川晴夫・松尾実2003「加茂遺跡（第8次）」『石川県埋蔵文化財情報第10号』石川県埋蔵文化財センター

小嶋芳孝1979「北加賀地域の概観」『北加賀地域古墳群分布調査報告』石川考古学研究会

座主哲二2002「加茂遺跡（第7次）」『石川県埋蔵文化財情報第8号』石川県埋蔵文化財センター

瀬戸薫1994「第1章第2節 中世の北陸道」『北陸道（北国街道）歴史の道調査報告書第1集』石川県教育委員会

高堀勝善1970「第二章 原始より古代へ」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

久田正弘・松尾実2003「指江B遺跡出土の埴輪片をめぐる」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター

平川南2001「第4章第2節 古代の通行手形 - 過所様木簡」『発見！古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝
示札』平川南監修・石川県埋蔵文化財センター編 (株)大修館書店

平口哲夫1984「北陸における縄文時代の動物遺体出土遺跡と水域環境」『石川考古学研究会々誌』第28号

平口哲夫1996「第6章 気屋遺跡出土の動物遺体」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

藤則雄1970「第二編 十五 地形と地質」『石川県宇ノ気町史』宇ノ気町役場

藤則雄1983「北陸における新石器時代の海面変動と気候変化」『北陸の考古学』石川考古学研究会

藤則雄1996「第4章第4節第2項 石器の石質」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会

平凡社1991『日本歴史地名大系第17巻 石川県の地名』

本田秀生2001「加茂遺跡（第6次）」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター

松尾実2003「加茂遺跡における弥生時代の水田跡の紹介」『石川県埋蔵文化財情報第9号』石川県埋蔵文化財センター

三浦純夫1995「古代」『能登街道Ⅰ 歴史の道調査報告書第2集』石川県教育委員会

宮本哲郎1991「英田廣濟寺跡を訪ねてー城郭寺院調査の記録（19）ー」『石川考古』第204号石川考古学研究会

森岡秀人2004「遺跡の個性は地域から発信を」『古代学研究』166号 古代学研究会

森田悌1992「古代加賀国の駅制」『日本海域研究所報告』金沢大学日本海研究所

安英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』石川県埋蔵文化財センター

谷内尾晋司2002「第2章第1節 城館跡概観」『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）』石川県教育委員会

湯川善一2002「第8章第2節 指江B遺跡出土二～十号木簡」『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・
石川県埋蔵文化財センター

四柳嘉章・四柳嘉之2002「第5章第1節 宇ノ気町指江B遺跡出土漆器の科学的分析」『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺
跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター

〔図版・写真出典〕

図1：国土地理院発行「津幡」25000分の1を元に修正・加筆。

図2：新規作成（実測；松尾、トレース；高見）

図3：石川県教育委員会1992『石川県遺跡分布地図』を元に加筆。

写真1～2：新規作成（写真；松尾）

写真3～5：新規作成（石川県立図書館蔵・掲載許可 写真；松尾）

（金沢大学文学研究科史学専攻 高見哲士）

（奈良大学文学部文化財学科文化財博物館学専攻卒業生 長田政彦）

（財団法人石川県埋蔵文化財センター 松尾 実）

畝田遺跡出土玉杖形木製品にかんする新知見と研究メモ

伊藤 雅文

はじめに

1985年から87年にかけて発掘調査が行われた畝田遺跡から、玉杖の頭部に類似する形状の漆塗木製品が出土し、既に石川県立埋蔵文化財センターから報告書が上梓されている⁽¹⁾。筆者は発掘調査を担当し報告書を編集したものの、土器群の編年的位置づけや大量の木製品などをはじめとして、弧文板、ト骨など県内初例の遺物も多く出土したので、細かな検討が行えなかったものがあった。今回検討する玉杖形木製品は、そのような遺物の一つである。それは、漆が全面に塗布されていたために製作技法がよくわからず、今まで心の中に引っかかっていたのである。

1 玉杖形木製品の報告

調査対象区域の中央を南から北に蛇行しながら貫流する川跡であるSD05中層から出土した。この河は、弥生時代後期後半ごろに流れを形成し、早い水流が堆積状況からうかがい知れる。弥生時代後期ごろには砂層の堆積が進んで穏やかな流れとなり、黒色系の粘質土が厚く見られ、白江期から古府クルビ期の土器が多量に出土している。埋没は高島期で、川の西側ほど多くの土器を出土しているので、これら遺物を投棄した人々の生活の本拠は、川の西から南西側に展開していたものである。

報告書から玉杖形木製品関係の記述を再録する。「アカガシ材が使われ、全面にわたって黒漆が塗られている。記述の便宜上頭部、基部、脚部とする。頭部の全体的な形状は松林山型の琴柱形石製品を連想させる。頭部は二つに途中から分れその基



第1図 畝田遺跡調査区全体図 (S = 1/1,500)

方眼はグリッド

底に二つの突出部があり、二つの稜を持ちながら屈曲して基部に至る。基部は船状を呈し、底は丸く両端を上げている。脚は透かし彫りされ屈曲して杖本体部分に続くと思われる。頭部、基部の大きさの割に繊細な作りである。しかも、カシ材という非常に堅い樹木から作られている点に注意する必要がある。」

(133頁)、「…(前略)漆を塗り繊細な細工で作られた畝田例を、実用品としての(玉)杖に

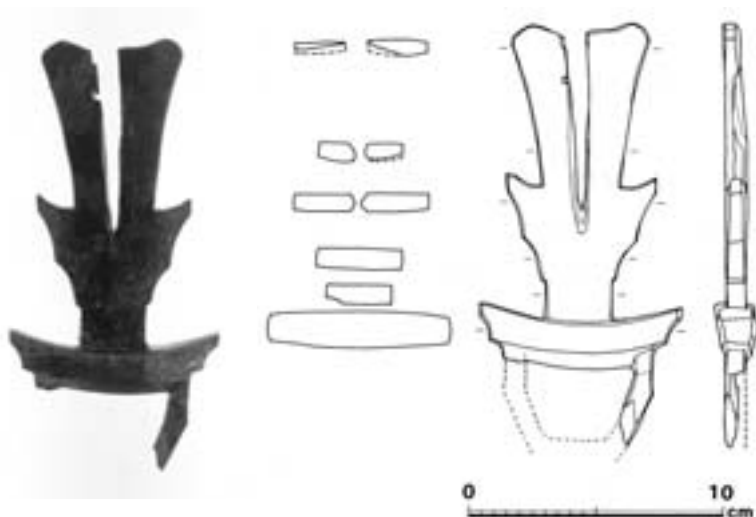
想定するには無理があろうか。さらに、カシ材から作られていることを考えると、木工技術の粋を集めて作られており、それらを作らしめる象徴的器物ではなかろうかと、考えたい。」(205頁)。法量は、現存長16.3cm、頭部厚0.7cm、基台幅7.9cm、同厚1.3cmである。

2 X線透過結果

X線透過による調査目的は、「頭部」とした鏃飾りが船状の「基部」との関係がどうなっているかを知ることにある。調査に用いた機器は当埋蔵文化財センターに備え付けられているX線照射装置である。照射条件は、電圧40kV、電流1mA、照射時間2分で、保存処理担当の中山主事がおこなった。

現在、玉杖形木製品はPEG含浸処理による保存処理が施されている。報告後直ぐに保存処理が行われなかったため冷蔵庫の中で保管していたが、筆者の遺物の管理不行き届きで凍結してしまいかなり損傷を与えてしまった。それゆえ、「頭部」の鏃の一方が途中から欠損しているなど、報告時とX線照射時の形状が異なるのはこのためである。

照射結果により、一木で作られていることがわかった。基部には鏃飾りを差し込んだような柄穴やそこに差し込まれる鏃飾りの茎



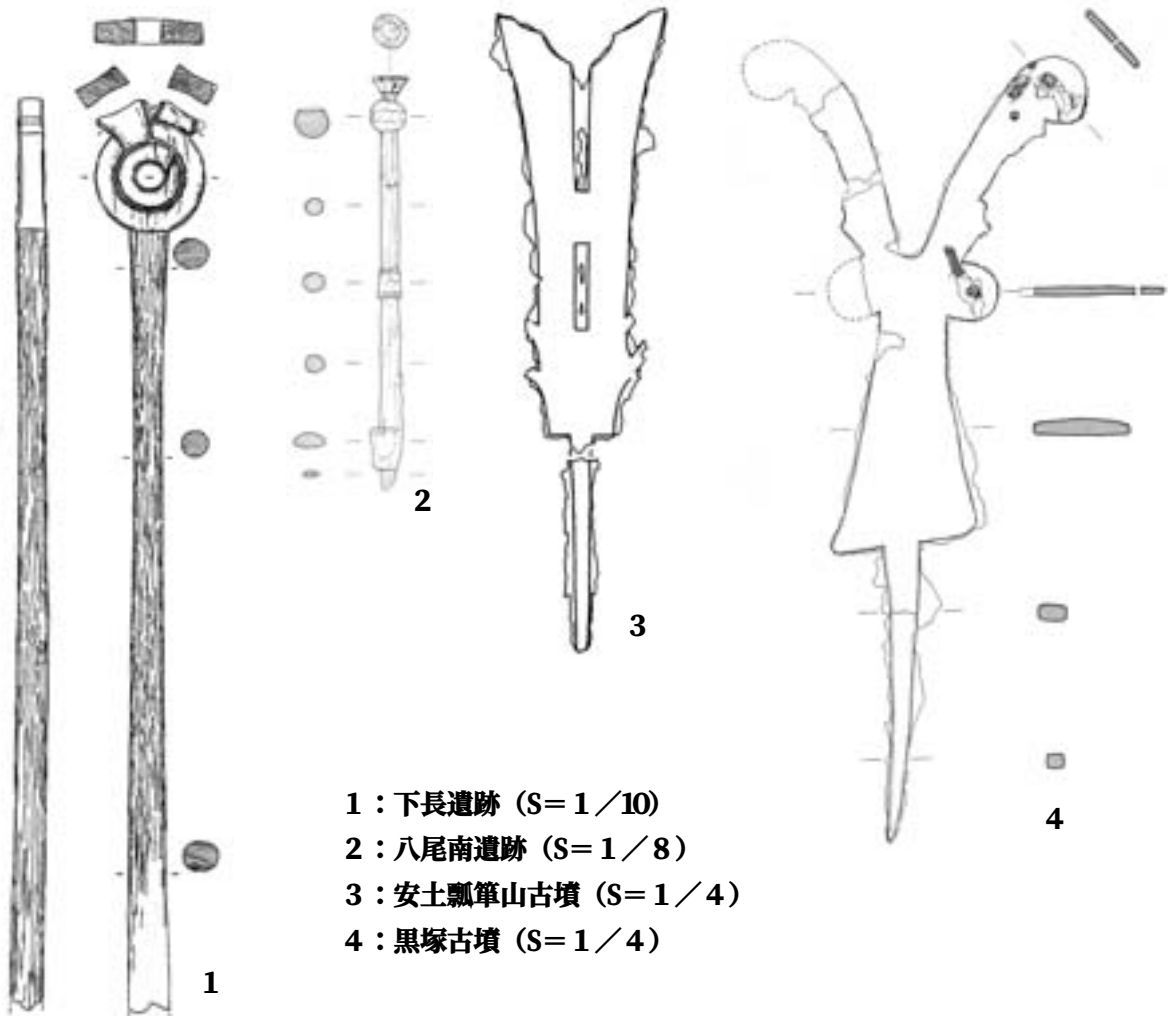
第2図 玉杖形木製品の写真と実測図 (S=1/3)



第3図 X線透過写真

(なかご)の陰影は写っていないのは、第3図の写真のとおりである。基部には厚みがあるので、やや黒っぽく見えるものの、基部上面がやや凹む位置にある鐳飾りの根元が見えることから、二つの部材を組み合わせたものならば何らかの痕跡が写るはずである。このような状況から、柄穴は無く一木を削りだして作られた器物であることが明らかとなった。

3 関連資料の検討



第4図 儀仗と関連遺物

厚さ7mmの頭部の鐳飾りを持ち、9mmの厚みのある脚を屈曲させて下に伸びる繊細な造形を、木製鋤鍬などに使われる堅牢でねばりのあるカシ材を削りだして作られていることに驚嘆する。この器物が杖かどうかは断定できないが、16cmあまりという出土した部位の大きさから、いわゆる木製儀仗とされる滋賀県下長遺跡出土品⁽²⁾のような1mを超えるサイズは似合わない。また報告書刊行後に上原真人から儀仗の可能性は少ないとの指摘を受け、「木器集成図録」でも「石川県畝田遺跡の『玉杖形木製品』は、(中略)下部を欠くので明言できないが、これも櫛^{たたり}の可能性もある。ただし、櫛の台と考えられる平面方形、側面台形の木器は5～6世紀に集中しており、畝田遺跡出土の『玉杖形木製品』が弥生末～古墳時代初頭に属する以上、これを櫛と断言するのは保留すべきだろう」⁽³⁾との慎重な姿勢を示している。今回のX線調査の結果、畝田例に近い形状の器物など関連すると思われる資料もあ

り、玉杖の成立と展開をも視野に入れて検討する必要があると考える。

①杖としての可能性

木製儀仗と推定されている事例は決して多くはない。僅かだが、2・3の事例を確認する。

下長遺跡（滋賀県守山市古高町）⁽²⁾

古墳時代初頭（庄内期）の資料である。先端が欠損しているが、長さ100cmを超える。繊細な細工に適さないスギの半割材で作られている。上部に円形に回る弧文を作りだし、それが表裏2面で表現されているので、あたかも環状の頭部に二つの小さな突起があるように見える。頭部の大きさは、直径14.4cm、厚さ3.5cmで大形品であるために全体的に厚い作りである。

八尾南遺跡（大阪府八尾市八尾）⁽⁴⁾

古墳時代前期後半の資料である。報告書では完形のように表現されているが、「木器図録集成」では先端が欠損してさらに延びることとなっている。頭部に球形の飾りを持ち、途中一部の広がりがある。樹種は不明ながら芯持ち材であることから、少なくともヒノキやスギではない。

「木器図録集成」ではほかにも東大阪市鬼虎川遺跡のような弥生時代中期からの類例を載せているが、個々の形態にかなりの差があり、一般的に儀仗とする判断基準が不明確である。

②形態的な類似例

以下の2例は鉄製品である。いずれも茎部があり棒に刺して使われたものであろう。

安土瓢箪山古墳（滋賀県安土）⁽⁵⁾

前期後半の古墳で前方部埋葬施設から出土した。Y字形鉄製品と報告されているものである。先端が二股になったやや直線的に広がる方形である。先端の突起の内側が清野孝之が指摘するように⁽⁶⁾微妙なアールを描き、体部途中に透かしを設けることで、長い突起をイメージしたものである。このような点で、畝田例の形状要素に近い印象を受ける。

黒塚古墳（奈良県天理市柳本町黒塚）⁽⁷⁾

前期初頭の古墳である。Y字形鉄製品と報告されているもので、全長41.3cm、体部長25cm、厚さ0.4～0.8cmを測る。基部はいびつな台形で、その先端で二つに分かれる頂部がある。頂部は根元に円盤の突起を持ちそして大きく開いて丸い先端になる。円盤と先端には穴があけられ周囲に繊維が付着している。台形の基部から二股に伸びる突起という点で畝田例に通じるものがある。

③櫛としての可能性

櫛は、古墳時代中期以降に木製品が出土し、福岡県沖ノ島では平安時代の祭祀遺跡から形代としての金銅製品が出土している。櫛とは紡織具のひとつで、糸のもつれを防ぐために繊維の束をかける台である。櫛が古墳時代のどこまでさかのぼるか、はたまた弥生時代までさかのぼるか知らないが、少なくとも弥生から古墳時代前期にかけて一般的な器物ではない。そして沖ノ島の形代⁽⁸⁾や鳥取市塞ノ谷遺跡例⁽⁹⁾は畝田例との形の親近性を醸し出しているものの、畝田例を櫛として製作するのに何ゆえ硬いカシ材で作らねばならなかったのかという理由を探さねばならない。

4 まとめ

X線透過調査の結果、玉杖形木製品はカシを一本で削りだして作られていることを確認し、報告書

で述べた儀杖の可能性がより高まったと考える。この器物が作られた時代、弥生時代から古墳時代にかかる時期は、地域に王墓と呼べるような大規模な墳墓が出現する。ヤマトに纏向遺跡が営まれ、特徴ある古墳を作っていく。前方後円墳に代表される王墓が作られ地域を越えたオウが誕生したとされている⁽¹⁰⁾。当然それにかかわる器物が生まれたであろうし、儀杖もまたこのような社会的要求の中で生まれたものであろう。畝田遺跡の玉杖形木製品の本質はこの点に求められると考えている。

そして、ここで検討しなかった松林山型の琴柱形石製品とのかかわりも重要であると考えている。亀井正道によってこれが玉杖との関連の中で生まれてきた器物であるとされる⁽¹¹⁾。玉杖の出土例が限られ極めて特殊な遺物である。まずそれが考案されて作られて石製品として敷衍化されていく過程の中でさまざまな要素が交錯したに違いない。畝田遺跡出土の玉杖形木製品もそのような流れの中で理解されるべきものであり、北陸という玉生産との関係も最重要と考えている。ここでは細かく述べる紙幅はない。別に稿を書いているので、そちらに論考を譲ることにする。

註

- 1 伊藤雅文・福島正実1991「畝田遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 2 岩崎 茂2001「下長遺跡」Ⅷ 守山市教育委員会
- 3 上原真人1993「木器集成図録 近畿原始編」奈良国立文化財研究所
- 4 八尾南遺跡調査会1981「八尾南遺跡」
- 5 梅原末治「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』7冊 滋賀県教育委員会（1974年復刻 名著出版）
- 6 清野孝之1996「鐙飾りの変遷とその背景」『雪野山古墳』近江八幡市教育委員会
- 7 河上邦彦ほか1999『黒塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所編 学生社
- 8 註3の櫛の項目で詳しく述べられている。
- 9 小野山節1978「古墳時代の装身具と武器」『日本原始美術体系』5 講談社
- 10 寺沢薫2000「王権誕生」『日本の歴史』02 講談社 など
- 11 亀井正道1972「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』8号

石川県埋蔵文化財情報
第13号

発行日 2005(平成17)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター